

ベル・クラネルの治癒魔法の使い方は間違っているだろうか？

救命団副団長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何故か異世界に召喚されてしまったベル・クラネル（当時7歳）。治癒魔法に素質があったばかりに兄弟子のウサトと共に鬼畜のローズに目をつけられた！

7歳という幼さ故に魔王軍と戦いはそこまで前線に出ることはなかったが、魔王軍の脅威が去った後も帰れず7年。ようやく帰還する術が見つかり、祖父と再開し憧れのウサトのような英雄になるべく、相棒のフェルと共にオラリオへと旅立つ！しかしローズ達により常識を書き換えられてしまったベルは……

目次

怪物祭

プロローグを書くのは間違っているだろうか？	1
ファミリアを探すのは間違っているだろうか？	5
派閥を決めるのは間違っているだろうか？	9
恩恵を刻むのは間違っているだろうか？	13
謝罪に行くのは間違っているだろうか？	19
食事の誘い方が間違っているだろうか？	26
酒場に入るのは間違っているだろうか？	32
ダンジョンで出会うのは間違っているだろうか？	39
酒場で怒るのは間違っているだろうか？	44
酒場で再会するのは間違っているだろうか？	53
凶狼と戦うのは間違っているだろうか？	59
再び謝罪に行くのは間違っているだろうか？	67
黄昏の館に来たのは間違っているだろうか？	76
花を千切るのは間違っているだろうか？	83
祭の日に手伝うのは間違っているだろうか？	89
祭りで襲われるのは間違っているだろうか？	96
祭りで跳ね回るのは間違っているだろうか？	101
リヴィラの騒動	
地下の街に潜るのは間違っているだろうか？	111
作戦を立てるのは間違っているだろうか？	121
死んだはずの男が居るのは間違っているだろうか？	128
エルフに頼るのは間違っているだろうか？	136
怖がらないのは間違っているだろうか？	142

小人の盗人

サポーターと契約するのは間違っているだろうか？

——

150

防具を買いに行くのは間違っているだろうか？

——

156

ハーフェルフと約束するのは間違っているだろうか？

——

161

怪物祭

プロローグを書くのは間違っているだろうか？

勇者召喚。

この世界ではない異世界より素質ある者を呼び出す儀式。素質ある者の素質は、勇者召喚という仰々しい名に相応しく規格外。鍛えれば相応の強さ、魔王を倒すほどの力を手に出来る。

しかしそんな、素質ある二人の近くに居たことでたまたま巻き込まれた兎里健……そして、彼等とも別の世界のはずなのに何故か召喚されたベル・クラネルはどちらも治癒魔法の適正を持ち……地獄を見た。

ベル・クラネルは未だ地獄を見ている。

「くそがああああ！ あのゴリラ女ああああ！」

「グルウウ」

相棒のグレイウルフという体高2メートルある狼を背中に乗せながら走るベル・クラネル。

怒りのままに叫び爆走する彼がこの世界に来たばかりの頃は泣き虫な幼子であったと、この光景を見ても信じる者はいるだろうか。

「今日、は……せっかく、休日だったのいい!!」

ウサトの活躍も含め世界が平和になった後も、何故巻き込まれたかさえ不明なため帰れなかったベルはそのまま救命団に所属していた。

国王達は未だ真摯にベルを帰還させる方法を探してくれている。

「なのに！ あの、女は！ 悪魔かあ！」

遊びに行く予定だった先輩治癒魔法師が急患が入ったと謝罪してきたと思えば、いつから居たのか加虐的な笑みを浮かべる団長に連れ去られ訓練が始まった。

「フェルもごめんね、のんびりしてたのに」

「くう……」

大丈夫というようにベルの顔を舐めるフェル。大きいから一舐めでベトベトだ。

「まあ、もうフェルぐらいなら3日は担いで走っても余裕が……!?」
ズドン、とベル達の真横を巨大な岩が落ちる。

錆びついたブリキのように、恐る恐る振り返るベルとフェル。そこには鬼のような笑みを浮かべたベル達の師匠、ローズが立っていて。「余裕持って走ってんじゃねえよ。また根性から鍛え直してやろうか？」

「ひいー！」

「キュウン……！」

慌てて走り出すベル。時速80キロはゆうに出ている。ローズは、なんの重りも持っていないとはいえサボらぬよう監視するためか、普通に並走してきた。

「今となっては懐かしいなあ………」

フェルの背に揺られながら空を見上げるベル。細かいことは省くが、無事元の世界に帰ってきた。王様達には感謝してもしきれない。祖父はベルが行方不明になった7年前、殺されかけたんじやからなあ！ と泣きついてきた。

でもベルの誕生日のたびに、そうでもない時も、ベルの大好きな英雄譚を増やしてくれていたらしい。それを読みながら、ベルも異世界で知り合った、誰よりも優しく誰よりもかっこいい一人の英雄の話
を祖父にした。

そして、英雄になりたければオラリオに向かえと送り出された。

「お、あれがバベルかな？」

天を突かんばかりの巨大な塔が見えた。ダンジョンの蓋、であり、
迷宮都市の象徴。

「よしフェル！ 全速力だ！」

「ワオン！」

「なるほど、それでモンスターの襲撃だと勘違いしちゃった衛兵達を、

叩きのめしちやっただね〜」

「はい」

「クウン……」

灰色の髪に、空色の瞳の少女は項垂れる少年の巨狼のモンスターに、困ったように頬を描く。

Lv. 5の自分が駆り出されるほどのモンスターなんて、と慌ててやってきたらモンスターよりもやばい兎が暴れていた。でも不思議なことに誰一人として傷付いていない。気絶しているだけだ。

「いや、うん……君のお友達に武器を向けた私達も悪いけどね〜。まさか都市の外でもタイムを行う人がいるなんて……」

「これぐらい、普通なのかなって……」

「モンスターを恐れてる人は多いよ。この子は大人しくしてるし、良い子なんだろうね……ほくら、ワシヤワシヤ〜」

「クウ〜、キュウン」

少女に撫でられ気持ちよさそうな声を出すフェル。初対面の人にここまで気を許すのは初めて見た。いや、それともローズみたいに一瞬で屈服させたのだろうか？

「なんか失礼なこと考えてるでしょ〜?」

「い、いえ! すつごくきれいな人だなくって」

「あはは! ありがとう。戦ってる時は『こんなもんかよ!』とか『ふきとびやがれえ!』って言ってた子とは思えないよ」

「その、フェルを殺そうとしたから……」

「……………そっか。本当に、仲がいいんだね……………わわ!」

ベロンと舐められ、やったなくとワシワシする女性。

「うん。じゃあ、はいこれ」

「これは?」

すつと差し出された象を象った装飾品のついて首輪。

「^{タイム}調教してますよ〜って証拠。これがあれば、私達が責任を持ちますって事で街でも連れ歩けるよ」

「…いい、良いんですか?」

「良くない!」

「あう！」

と、新たに現れた女性がベルと話していた女性の頭を殴る。

「勝手に決めるな」

「あ、お姉ちゃん……」

「すまないな、少年。その狼は、暫く我々に預らせてくれ。そのうえで、安全を確認した上でダンジョンと畜舎間での行動を許そう」

「大丈夫だと思うけどなく、おとなしいし」

「お前を前にすれば大抵のモンスターは大人しくなるだろう」

はあ、と疲れたようにため息を吐く。

「君は、このオラリオで新たな主神を探しに来たのだろうか？ もし、何処のファミアリアにも所属できなかつたらうちに来るといい。テイマーは何時でも歓迎だ」

「はい！ あ、でも……新しいも何も、僕まだ神様の恩恵もらったことないですよ」

「……………え？」

ファミリアを探すのは間違っているだろうか？

「お前みたいなヒョロっついガキを雇えって？ 冗談じゃねえ！」

イラツ☆

「金を持ってきたら考えてやるよ。ガハハ！」

イライラツ☆

「そうねえ、弱そうだけどペットとしてなら飼ってあげてもいいわよお？」

イライライラツ☆

「ここを何処だと思っていやがる！ 【ロキ・ファミリア】、都市最強の一角だ！ お前のような奴が後輩になるなど、冗談ではない。帰れ帰れ！」

ブチツ☆

ドゴオン！

「うおおお!!? なんや、カチコミかあ!!? 新入りが壁にめり込んだるやん、何処のどいつやゴラア！」

なかなか受け入れてくれるファミリアが見つからない。これでも鍛えているのだが、着痩せするタイプだからなめられているのだろうか？

しかし冒険者として行動するにはファミリアに所属しないと駄目だとギルドの綺麗な人に言われた。やはり【ガネーシャ・ファミリア】に所属するしかないのだろうか？ でもコネで所属したとローズに知られたら……世界を超えて折檻されかねない。と……

「うわああん！」

不意に響く鳴き声。振り返ると膝を擦りむいてなく子供の姿。転んでしまったのだろうか。

「大丈夫？ ほら、泣かないで」

ベルが片手を向け、緑に輝く治癒魔法特有の魔力光を当てると傷はあっという間に治る。驚いて目を見開く少女は痛みを確認するように足を動かかし立ち上がる。

「ありがとう、お兄ちゃん！」

「うん、気をつけてね」

頭を撫で優しく微笑むベル。ポツと顔を赤くする少女。立派な初恋キラーだ。

「もし……」

「？」

と、不意に話しかけられて振り返る。

「わあ……」

「……………」

美しい少女が居た。思わず息を呑むほど美しい。

ウェーブのかかった銀糸のような白銀の髪。大きめの瞳にかかった長い睫毛。150セルチに届かない小柄な体軀は精緻な顔立ちも合わせり人形のような印象を受ける。

「何か……？」

「あ、す、すみません！ その、綺麗な人だなんて……………」

照れながら言われた言葉は、口説いているのではなく本心なのだろう。その容姿故に何度も口説かれたことのある少女も、思わず赤くなる。

「そ、それより……………先程少女の傷を癒やしていたようですが」

「あ、はい。僕の魔法です……」

「やはり、そうですか。オラリオの治癒師ヒーラーは全員覚えたつもりでしたが、貴方は外から来たのですか？」

「はい！ 所属するファミリアを探しています！」

「改宗コンバージョンですか」

「あ、いえ……………」

違います、と言いかげ城門で知り合ったシャクティ・ヴァルマという女性の忠告を思い出す。

『確かに、神の恩恵がない……………神々の言う未知というやつか。面倒な……………いいかベル・クラネル。それが知られた場合、面倒なことにはかならない。それはお前が所属するファミリアの主神にのみ話を通せ』

更にその妹のアーディ・ヴァルマも……

『私達3人だけの秘密だよ、ね?』

と言っていた。

「は、はい! そうです新しい神様に恩恵を授かりに来ました!」

「? そうですか。でしたら、どうでしょう。我々のファミリアに入りませんか?」

「良いんですか!? でも、何で……」

「我々は治療と製薬を活動内容としているファミリアなのです。しかし、治療魔法に目覚めるものは全体的にみても少数。はじめから治療魔法を持つあなたには、むしろこちらからお願いしたいぐらいです」

どうでしょうか、と手を差し伸べてくる少女に、ベルは考える。

「……………それって、ダンジョン(へモンスターを倒すため)に潜っても良いんですか?」

「ダンジョンに、ですか? まあ(ダンジョンでしか取れない素材もありますし)構いません。ですが、外で恩恵を得ていたとは言え一人では危険です。繋がりのあるギルドから護衛を雇って……………」

「あ、大丈夫です。僕、これでも鍛えてますから!」

ベルが服の下から力こぶを作ってみせるが細マッチョなため良く解らない。むしろ年齢と可愛いとも言える容姿と相まって、大変愛らしい。思わずクスリと微笑む少女。

「ですが駄目です。良いですか、外のモンスターよりダンジョンのモンスターの方が遥かに強いんです。外から来た人が、モンスターと戦ったことがあるとダンジョンに挑み命を落とす事件は毎年あります」

「う……わ、解りました。アーデイさん達に頼んでみます」

「アーデイ? アーデイ・ヴァルマですか? 知り合いなのですね」

「はい! えつと……………」

モンスターを連れ歩く事を忌避する者も多いと聞かされたベルは言い淀むが、しかし改めて考えれば自分とフェルの友情を誰かにとやかく言われる謂れはない。

「実は僕、モンスターをタイム? してまして。その子に乗って来たら衛兵の皆さんを驚かせちゃってアーデイさんが取り持ってくれた

んです」

「モンスターを……？ 調教師テイマーの資質も……なら……」

と、何やら考え込む少女は、しかし首を降る。

「いえ、何でもありません。そういうことでしたら、アーデイさんなら快く引き受けてくれるでしょう。あ」

「？」

「いえ、自己紹介をしていなかったな、と」

「あ、そうですね。ここまで話してるのに、なんかへんな感じ……ベ
ル・クラネルです。憧れてる人がいて、その人みたいになりたいくてオ
ラリオに来ました」

そう言って、改めて差し出された手を握る。

「アミッド・テアサナレです。若輩ではありますが、【ディアンケヒ
ト・ファミリア】の団長も努めています」

「え!? じゃあ素手で剣を握り潰したり、拳で人を空に飛ばしたり出
来るんですか!？」

「私は治療院を経営している【ファミリア】の団長ですよ？」

何言ってるんだ、と首を傾げるアミッド。ベルは治療院のトップに
間違ったイメージを持っているようだ。まあ、そのあたりはいいか。

「では、一先ず我々の本拠ホームへ……」

と、その時だった。

「ちよーつと待ったあ！」

黒髪ツインテールのロリ巨乳の神様が割り込んできた！

派閥を決めるのは間違っているだろうか？

飛び込んできた小柄な女神。

はあはあと肩で息をしていた女神は息を整えビシッとポーズを取る。

「その君！　もしや「ファミリア」をお探しかい？」

右掌を上に向け親指と人差指を立てベルを指差す。

「はい。それで、ちょうどアミッドさんが「ファミリア」に誘ってくれて！」

「んぐー！　んん……ま、まあそこまで慌てて決めなくても良いんじゃないかい？」
「ファミリア」は沢山あるんだぜ？」

「いえ、その……知ってると思いますけどあっちこつちで断られちゃって。あ、でもゴブニユ様っていう神様は応援してくれました！」

「……知ってる？」

「はい。えっと、ずっと僕をつけていた人……あ、神様ですよね？」
「……」

スツと移動しベルの前に立つアミッド。その目には明らかな警戒心が浮かんでいる。

「気づかれてた?!　いやいや待って待って、違うんだ！　ボクは可愛い男の子がいるなくぐへへぐとか考える神様じゃないやい！」

「神々はいつもそういうのです」

「人類こどもたちからの信頼?!　いやいや信じて！　本当なんだって！」

「では何故、ベルさんをつけていたのですか？」

「その、ね……実はボク、地上に降りてきたはいいけどまだ誰も眷属に出来てなくて……」

と、気まずそうに言う女神。ようするに、眷属になつてくれそうな人類こどもを探している途中、断られ続けているベルを見つけ、彼ならと勧誘するタイミグを測っていたらアミッドが現れ、慌てて出てきたということだろう。

「おっと、申し遅れたね。ボクはヘステイア！　よろしくね！」

「はい。ではヘステイア様、「ファミリア」を立ち上げた後の方針は？」
「っ！ えっと……ダ、ダンジョンに潜って……その、お金を……」

「……………」

「紙くずを見る目!?!」

アミツドの視線に耐えられなかったのか後ずさる女神ヘステイア。
計画性がないのだから仕方ない。

「……………通常、探索系ファミリアは都市外で人員や資産をためるものです。いきなりベルさん一人ダンジョンに送って、死なせる気ですか？」

「そ、そんなことないよ！ 彼、ロキのどこの眷属殴り飛ばしてたしすつごく強いと思っただから！」

「……………ベルさん？」

と、アミツドがベルに振り返る。

「えっと……その、何処のファミリアに行っても馬鹿にされて、苛立ちがたまってる」

「まあ新入りとか聞こえだし、弱いと思ってる相手に槍向けるような奴だからね。全くロキのところの眷属は躰がなってる」

「だとしても、手を出すのはやりすぎです。下手したら都市最強派閥から狙われるかもしれないですよ？ はあ……………【ロキ・ファミリア】には私が話を通しておきます。槍を向けられたのが事実なら、ロキ様なら話を聞いてくれるでしょう」

暫くは自室待機です、と言うアミツドにはい、と落ち込みながら返すべし。

「って！ だからその子を【ファミリア】に入れた前提で話すんじゃない！」

「ですが、貴重な治療師を抜きにしても計画性もなくダンジョンに眷属を潜らせようとする神の下に知人を送りたくはありません」

と、ヘステイアからベルを庇うように抱き締めるアミツド。姉弟子から不思議と母性本能をくすぐると言われたベルは伊達ではない。きつと直ぐに「お姉ちゃんと呼ばれたい冒険者ランキング」上位に仲

間入りすることだろう。

「正論ばかりが通じると思うなよ〜！」

「暴論ばかりが通じたら破滅しか待ってないでしょう」

「だ、だいたい！ 決めるのはベル君だ！ さっきの会話からして、ダンジョンには潜りたいんだろう!？」

「え、あ……はい！」

「……………解りました。では新興派閥におけるメリット、デメリットを説明した上で、ベルさんが決めてください」

このままではヘステイアも引き下がらないと判断したのか、アミツド仕方ないというように話を進める。

「まずデメリットは、先程言ったように人員と資産がないことです。人員に関しては他派閥の方を誘うという手もありますので、それほど大きなデメリットとは言えませんね」

「なるほど。タケやヘファイストスのところから頼めるかもなあ……………」

「ベルさんは治癒師ヒーラーですから他の派閥からも十分借りれるでしょう。あまり有名になりすぎると狙われるかもしれないですね。これが第二のデメリットですね。力がないゆえに、力で無理を通される」

「殴り飛ばせばいいですか？」

グツと拳を強く握るベル。無理はいけませんとなだめるアミツド。
【ロキ・ファミア】の新人を殴り飛ばしたとのことだが、オラリオはモンスターだけでなく冒険者も質が違う。化け物みたいな連中がゴロゴロいる。

「メリットとしては、団長になれるのと、ステイタスの更新を好きな時に行えることですね。人数が多いと順番性になり、ファミアによってはノルマを決めるところもあるそうです

「ボクなら何時でも更新するぜ！」

「後は……………ありませんね。強いて言うならヘステイア様は具体的な運営方針もないので、ベルさんが決めてもいい、ぐらいでしょうか」
「運営方針……………」

「冒険者になりに来ました！」

と、元気良く挨拶してきた少年。

年下というのもあるのだろうが、それにしたって可愛らしく感じる容姿。ようするに、悪い言い方をすれば弱そう。

そんな少年が冒険者になりに来たとくれば、ギルドの受付嬢達はきっと直ぐに死んでしまおうだろうと思った。しかも――

「ヘステイア・ファミリア」……………新興派閥、ですか……………」

出来たてホヤホヤ。構成員も一人という始末。活動方針はダンジョンに……………んん？

「行方不明者の探索、及びダンジョン内での治療行為……………？ クラネル氏、その……………これは？」

「はい！ 『ヘステイア・ファミリア』の活動方針は、救命です！」

後にオラリオで知らぬ者の居なくなる治癒師ヒーラーが、聖女に続きもう一人現れる。

冒険者いわく、兎の皮を被ったトロル。人の姿をしたミノタウロス。ドワーフに生まれなかったドワーフ。子供の姿をした筋肉。

神々いわく。やべーよ、ちようやべーよ。あいつ頭おかしいって。聖女ちゃんとの姉弟井ハスハス。

治癒魔法を使いダンジョンを兎のように駆け回りモンスターを暴走ミノタウロスのように吹き飛ばす。とある冒険者の英雄譚が、今始まった。

恩恵を刻むのは間違っているだろうか？

緑の光が体の中に吸い込まれるように広がっていく。それだけで、冒険者の顔色が戻っていく。

「終わりました」

「おおー」

「……………」

運営方針が救命と聞かされ、困惑していたタイミングでやってきた毒に侵された冒険者が運び込まれ、ギルドお抱えの治癒師ヒーラーを呼ぼうとしたら、あつという間に治してしまった。

「ありがとよ、坊主ー」

「いえいえ、ダンジョンに出張も考えてまして。その時には非ご利用を」

「おう！ 何なら護衛を引き受けてやるぜ！」

バン！ と背中を叩いた冒険者の方が何故かバランスを崩した。毒は抜けても体力までは戻らなかったのだろう。仲間にはもう休むぞ、と連れて行かれた。

「クラネル氏……………治癒師ヒーラーだったんですね。しかも超短文詠唱……………」

「え、詠唱？」

聞こえなかったがああの発動速度はそうなのだろう。

「つまりクラネル氏は、ダンジョンに潜り治療行為を行いたい、と……………それ自体は、我々としても助かるのですが…」

何せ年間でもかなりの死者が出るのがダンジョンだ。潜れるヒーラーはありがたい。ありがたいが、それでも全体的に少なく、その殆どが大手【ファミリア】に所属している。何故か？ 治癒師ヒーラーは本来後方支援。守られるべき対象で、戦えるヒーラーなど聞いたことがない。

【戦場の聖女ディア・セイント】だって上層ならともかく中層に行くなら大抵誰かを雇っている。

「怪我とかしたら、大変なんだよ？」

「大丈夫です！ 治せますから！」

「自分で自分を治せるから良いってものじゃないの……」

「……………治癒師ヒーラーの常識じゃ……………!？」

何で驚いているんだこの子。

「とにかく、一人で行くのはお勧めしません」

「わかりました。なるべく誰かを誘います」

「なるべくというか……………はあ、取り敢えずダンジョンに入るなら
まず基礎知識を……………」

「どうだったベル君!？」

「ヘステイア・ファミリア」の本拠ホーム。寂れた教会で待っていたヘステイアは早速ベルに駆け寄ってくる。

「ファミリア」申請は通ったんですけど、運営方針は探索系ってことになりました……………」

「まあ、前例がありませんからね」

と、同じく待っていたアミッドが言う。

「ですが、これで晴れて貴方もオラリオの冒険者。ファミリアこそ違います、共に人の命を救わんとする身。何かあれば気軽に相談しに来てください」

「はい！ ありがとうございます！」

自分の眷属が早速友情を築いているようで何よりだ、とヘステイアは親面してうんうん、と頷く。そして、ベルに刻んだステイタスを思い出す。

解っていたが、やはり背中に恩恵がなかった。そして新たに刻まれた恩恵……………

『ベル・クラネル

L v. 1

力：I O

耐久：I O
器用：I O
敏捷：I O
魔力：I O

《魔法》

【治癒魔法】

- ・ 速攻魔法
- ・ 治癒魔法
- ・ 怪我、病気、毒の治癒
- ・ 使用魔力量により効果変動
- ┌ 系統強化：他者への効果上昇
- └ 系統劣化：自己への効果上昇

〇

《スキル》

【憧憬疾駆】

- ・ 早熟する
- ・ 憧れが続く限り効果持続
- ・ 憧れの丈により効果向上

【蛇ノ血】

- ・ 治癒魔法の効果向上
- ・ 治癒魔法に対呪詛性能付与

「んんんん!!」

速攻魔法って何さ!?

しかも詠唱の長さによって効果が変わるはずの魔法を、単純に魔力を増やすだけで効果を上げる!?

それに、このスキル。

早熟って……まさかステイタスが早く上がるとかないよね？

因みに、ヘステイアは呪詛を解呪可能な治癒師ヒーラーのレア度を知らない
ので気にしてないがこれだけでも十分やばい。

「担当はチュールさんとのことでしたが、彼女なら安心でしょう」

「はい！ 色々教えてくれました！」

元気のいいベルの頭に無意識に伸びかけていた手を止めるアミツド。

「冒険者になったからと言って、無茶をしてはいけませんよ。恩恵の得たて、ランクアップをしてすぐの慢心などは、冒険者の死因の大多数を占めています。どうしてもお金が足りない時は一時的にギルドと契約するのも手ですがロイマンギルド長はそう簡単に手放してくれないでしょうから、『ディアンケヒト・ファミリア』の手伝いに来てください」

「君はベル君のお姉さんか！」

「そっかあ、新興派閥……うん、おめでとうー！」

ここは【ガネーシャ・ファミリア】の畜舎。

モンスターを調教する【ガネーシャ・ファミリア】の持つモンスターを地上に住まわせる場所。

ライガーファングの毛づくろいをしていたアーデイはニッコリと花咲くような笑顔でベルを称賛する。

フェルを撫でていたベルはありがとうございます！ と返した。

「それとね、ガネーシャ様も君がダンジョンに潜る時、ついてあげていって。モンスターと仲良くできる子は稀だからね……」

ニードルラビット、アルミラーズ、インファント・ドラゴン小 竜、ソードスタツグな

どのモンスターがベルのまわりに集まっていた。普通、調教されたモンスターは人を襲わぬよう躡けられているとはいえ、調教師テイマー以外には懐かない。アーデイとベルは例外のようだ。ベルの周りのモンスター達は興味深そうにツンツン鼻先を当てたりしている。

「あ、こらー！ 君の番は後！」

「キキ、アツア……」

アーデイに毛づくろいして貰おうと列になったモンスター達。シルバーバックが他のモンスターを押しつけようとしてアーデイに叱られ落ち込む。それでも素直に戻った。

「アーデイさんも仲がいいと思えますけど」

「そうかな？ えへへ」

「うむ、二人共ガネーシャだ！」

と、元氣よく叫ぶ像の仮面を被った半裸の男性。何を隠そう、彼こそ「ガネーシャ・ファミリア」の主神、ガネーシャその人である。

「？ いえ、僕はベル・クラネルです」

「アーデイ・ヴァルマだよ」

ベルは改めて自己紹介し、アーデイは慣れているのかあつさり返す。ガネーシャは何を納得したのかウンウン、と頷く。

「ベル・クラネルよ！ 今後ともアーデイを宜しく頼む！」

「えつと……はい」

「アーデイは器量のいい娘だが、如何せん最高の調教師テイマー過ぎて一部では『怪物趣味』などと揶揄されてしまう。しかーし！ アーデイ同様モンスターと心通わせるお前ならば！ 良い夫婦にぶげえ!!」

「ええ!？」

アーデイがガネーシャの頬を引っ叩いた。え、眷属って主神を殴つていいものなの!?

「私は別に相手が居ないわけじゃないよ。今だって告白されるもん。ただ、その人達が皆に関わるのをやめろって言うんだよ。酷いよね」

アーデイの言葉に賛同するようにモンスター達が唸る。

因みにエルフはユニコーンを飼ったりするので、エルフに告白される時はユニコーンはともかく、などと言われるらしい。

「酷いですね。殴ってきましようか？」

「……ベル君って、結構過激？」

「大丈夫です！ 僕は治癒魔法の使い手ですから！」

「うくん。何が大丈夫なのかなあ」

ワシャワシャとベルのフワフワな頭を撫でるアーデイ。なんだろう、見た目可愛らしいのに取り敢えず相手を倒して解決する感じ。夜五月蠅ければとりあえず福音鳴らして物理的に静かにしたという噂の何処ぞの女王様を連想させる。気の所為か、ベルの後ろにぼんやり赤毛の女性が。誰だ？

「あ、そうだ！ 僕そろそろいかないと。アミッドさんも待たせてる

！」

「アミッド？ 知り合ったんだ。何処行くの？」

「えっと……………【ロキ・ファミリア】の人に、その……………暴言吐かれて、つい殴り飛ばしちやっただので謝りに…」

「ええ……………あ、私もついていってあげようか？」

「お願いします。もしも時は、僕を止めてください」

聞く神が神なら大爆笑、もしくはテンション上がりそうな台詞を言うベル。まあ手が速いみたいだし、L v. 2の冒険者数名ふっ飛ばすと言つてもL v. 1。暴れても止められるだろう。

謝罪に行くのは間違っているだろうか？

「あ、ちょうど良かった。ロキ様く！」

「ん？ おお、アーデイたん！ それにアミッドもおるやん！」

【ロキ・ファミリア】の本拠、『黄昏の館』。壊れた壁の修理を監督していた女神はアーデイ達に気づき笑顔で駆け寄ってきた。

「そっちの二人は……………げ、ヘスティア！」

「や、やあ……………ロキ」

「あん？」

ヘスティアの姿を見てデユワ！ という声は何故か聞こえそうな臨戦態勢に入ったロキだったが、ヘスティアの様子がおかしい。

「どないした？ 落ち込んだる自分、正直不気味やで」

「いや、その……………」

「んで、そっちの子は？ なかなか可愛い顔しとるやん！」

と、ベルに目をつけるロキ。そのベルも、なんだか申し訳無さそうな顔をしている。

「あ、あの……………！ ごめんなさい！」

「……………ん？」

「門番を殴り飛ばしたの、僕なんです！」

「……………」

その門番がお気に入りだったり、ベルの態度が不遜ならキレていらろう。だが幸いなことに門番は新入りで、ベルの態度も本当に申し訳なく思っていそうだというか本当に門番殴り飛ばしたの？ 嘘じゃないとはわかるけどあの子Lv. 3やで、などと冷静になるロキ。

「ボクの眷属になる前とはいえ、ベル君はもうボクの眷属なんだ。ボクからも謝罪するよ」

「私からもどうか……………怪我をしたその団員の方も治療いたしますので」

「あ、それがまあ壁にはめり込んだけど不思議なことに傷一つないんや。治療は必要ないで……………んで、少年……………えつと」

「あ、ベルです。ベル・クラネル」

「ベルっちは何でうちの子殴ったん？」

それも壁にめり込むほどに。

それだけの力を込めて、新入りとはいえ眷属を殴ったのだ。納得の行く理由でなければ謝罪は受け入れられない。

「その、実は所属するファミリアを探していたんです……………」

「それでウチに一度来たと？」

「その時に、帰れ帰れって言われて槍も向けられて……………あっちこちで暴言は言われたんですけど、武器まで向けられて我慢できず……………」

嘘は、ない。つまり、まあ……………発端はこちら。はあ、とため息を吐き頭をガシガシかく。ベルは叱られると思ったのかビクリと身を震わせる。

「そういう事情があったんなら、まあええわ。たく、自分殴り飛ばすよ。うな奴の実力見極めず追い返そうとしたとか……………気にせんでええよ。今回はこっちが悪い……………ちよいと待ってろ」

と、ロキは門をくぐり館の中に消えた。しばらくして、一人の男を引き連れて戻ってきた。

「ベルっち、殴り飛ばしたんこいつでええ？」

「っ！ てめえは！」

ロキが連れてきた獣人の男性はベルを見た瞬間、すぐに怒りをあらわにする。殴りかからなかったのは殴り飛ばされた記憶があるからだろう。

「ロキ様！ こいつです、こいつが俺達【ロキ・ファミリア】に喧嘩を売ったやろうですよ！」

「ああはいはい。せやけど自分、この子追い返そうとしたそうやん？

ウチになんの相談もなく」

「へ？ あ、いや……………そ、それは……………」

「フィン達が遠征でいない今、入団希望者は全員ウチに通せ言うたよな？ 門番任せる時言うたぞ。それを槍向けて追い返そうとしたそうやな」

「っ！ こ、このガキを信じるんですか!？」

「うん、ウチ神やし」

神に嘘は通じない。神を騙せるのは神のみ。それはつまりベルが言ったことが真実であると分かっていると言うこと。男は必死に言い訳を考える。

「こ、こんな弱そうな奴が入れば【ロキ・ファミリア】の名に泥が……！」

「自分殴り飛ばされてるやん」

「い、いきなり人を殴るような凶悪な奴を入れたら、不和を生むと思つて……」

「先に槍向けたの自分やろ？ 殴られる前から解つたん？」

それにうちにはベートも居るし今更やわく、と笑うロキ。しかし微かに滲む怒り。勝手な行動をする眷属に向けられたものだ。

男は必死に言い訳を探し、アーデイを見る。

「ガ、象群ガシヤースラの怪物！」

「……………」

「貴方は！」

「っ！」

「……………」

「？」

男の叫んだ単語にアーデイは困ったように微笑みアミッドとロキは明らかに怒り、ベルとヘスティアは首を傾げる。

男はロキ達の怒りに気付かず捲し立てる。

『怪物趣味』の女とつるんでるような奴ですよ!? 追い払って正解だった！」

怪物趣味。モンスターに欲情する人間を指す、蔑称。数多の怪物を率いる調教師テイマであるアーデイは、笑顔でモンスターと接し、それを気味悪がる者も多い。自分がモンスターと同列に扱われているような気になるのだろう。

「てめえもてめえだ！ モンスター相手に腰振りしたいなら、ダンジョンにでも籠もりやがれ！」

「おい、お前いい加減に……………」

「——黙れ」

ロキが顔を顰め叫ぼうとするが、その前に声が響く。決して大きな声ではなかった。しかし唾を吐くほど叫ぶ男の耳にもよく通る、低い声。

「彼女の行動に不純な動機は一切ない。自分の失態を隠すために誰かを責めるような貴方が、馬鹿にしているいい相手じゃない」

「べ、ベル君？ ああ、良いんだよ……なれてるから。ほら、そんな怖い顔しないで？」

と、笑うアーディ。それを見て男はまだ何かを言おうとし、ベルがギリりと睨みひっ、と後ずさる。

「彼女は笑顔の素敵な人だ。幸せそうに笑う人だ。見てるだけで幸せになれる、そんな笑顔を見せてくれる人だ。自分の事ばかりのあなたが、その笑顔を汚すな……取り消せ、今の侮辱」

「ベル君……」

「ベルさん……」

怒りを頭に拳を握りしめるベル。まだ出会ったばかりの自分のために、本気で怒ってくれているのだと、アーディは胸が軽くなる。アミッドもやはり優しい人だと、微笑む。

「う、うるせえ！ 取り消さなかったらなんだってんだ！ 調子に乗るな、俺は【ロキ・ファミリア】の……」

「おいお前！ いい加減に……」

背中に持っていた槍を構える男にロキが叱責しようとしたが、その前にベルが槍を掴み男ごと振り回す。

「うおわあああ!?!」

槍を手放し吹っ飛んだ男は背中から着地し、ベルを睨むがベルが槍を紙の棒でも丸めるかのように丸めていくのを見て顔を青くする。

「あれ柄も金属製なんやけど」

「僕は知らないけど、冒険者ってこうなの?」

「いやあ、ガレスやオツタルぐらいしか出来んやろうなあ。あの子

改宗? L.V. 幾つや?」

「……………1」

「はっはっは！ つくんならもつとマシな……………え、マジ？」

丸まった槍を放り捨てベルは男の下に歩いていく。その細腕のどこにそんな力があるのか、胸ぐらをつかみ持ち上げる。身長差から腕を伸ばす形になるが足の浮いた男は苦しそうにジタバタ暴れる。

「僕が弱そうなのは良いんだ。自覚してる。でもあの人は関係ないだろう……………あの人は良い人だ。謝れ！」

「ひ、ひいー！」

獣人の力で抵抗してもまるで引き剥がせない。顔を青くしてガタガタ震える獣人だが、知人を侮辱されたベルの怒りはその程度で収まらない。と……………

「……………もう良いよ、ベル君。離してあげて」

アーデイがベルの服を掴みやめさせる。

「ありがとう。君の気持ちは嬉しい……………すつごく、嬉しいよ。でもモンスターは、やっぱり皆怖いんだ。仲良くしてる人を、そう思う人もいる……………だから良いの」

「……………」

ベルが手を離し男を地面に落とすと男は情けない悲鳴を上げながら走ろうとしてすつ転びその場でガクガク震える。

「すいませんでした、ロキ様」

「いやいや、うちはスッキリしたで。これ記念にもろうて良い？」

と、謝罪するベルにロキは笑う。

「自分、フィン達帰ったら覚悟しとけよ？ アーデイたんも、それには文句言わせんで？」

「はい……………あ、でも……………」

ロキの言葉に納得したアーデイは、そのまま男の前で膝を曲げる。男はビクリと震える。

「ごめんね、怖かったよね。気にしてない……………ううん、これはベル君に失礼だ」

そう首を振り、改めて男と向き直る。

「何度言われても、すごく傷つく。でも、もう口に出さないなら許してあげる」

「く、口に出さないだけで……………」

「思われるのは、仕方ないからね」

そう微笑むアーデイの背中から光が指したような光景を、男は幻視した。ベルは男がまたなにか言わないか街頭を何時でもひっこ抜けるよう待機して様子を見守る。

「……………女神様だ」

「え？」

「すみませんでした！ 女神様！」

「待って……………待って!? 私は女神じゃないよ!?」

結局女神呼びはやめたけど、どうやらあの男はアーデイのファンになったようだ。

ロキは面白かったから殴った件も槍壊した件もチャラ。むしろ迷惑かけたぶん、何時か借りは返すといっていた。

「いい女神様でしたね」

「うくん。まあ天界にいた頃に比べたらね。いやあ、壁の修理代払えとか言われなくて良かった」

「でもベル君が人を殴ったなんて、信じれなかったけど怒る時は怒るんだね」

「まあ、僕も人間ですから……………それに、やっぱりアーデイさんが悪く言われるのは……………」

「ああもう！ かわいいなあ、ベル君！」

と、感極まった様子でベルを抱き締めるアーデイ。豊満な胸に顔を埋めることになったベルが瞬時に耳まで赤くなる。

「アーデイさん!? 何を!? ベルさんも引き剥がそうと思えば出来るでしょう!?!」

アミッドがお気に入り的小動物を横から搔っ攫われたような感覚を味わい思わず叫び引き剥がしそうとする。そうはさせまいと更に抱きしめるアーデイ。

ヘステイアはボクの初めての眷属、女の子にモテるんだなくと優し

い笑みで見守る。

翌日。

「ダンジョン、来た〜！」

「……………？」

「ほら、ベル君とフェルも！」

「き、来た〜？」

「ワウ！」

ダンジョンにやってきたベルとアーディ、そしてフェル。体高2メートルという巨体の狼に冒険者達はギョツとするがアーディと首輪につけられた発信機ブレイトを見て納得したように去っていく。

「ベル君がすつごく強いのは昨日のを見て解ったけど、ダンジョンで油断は禁物。いいね？」

「はい！」

「それと、その服にあってるね」

ベルが現在着ているのは白衣。触ってみた感じ、なかなか頑丈だ。

「僕が所属していた救命団の服です。他にも黒服と灰服があつて、黒服は前線で怪我人の回収、灰服は後衛で治療。白服は前線で治療」

「じゃあアミッドはし……」

「及び治療の邪魔する奴等をぶちのめします！」

「じゃあアミッドは灰服だね」

と、笑顔でベルの話聞いてくれるアーディ。

「僕の目標は一人でも多く救う救命。ダンジョン探索も視野に入れれば、今より強くなることは必須。そのためにもステータス上げ！ダンジョンに潜って特訓です！」

「おー！ その意気だよ！」

「あ、ゴ布林！」

ドガアアアン！

「でも、もっと下の階層に降りようか！」

食事の誘い方が間違っているだろうか？

初日でオークを殴り殺す冒険者ってなんだろう。

地上に戻り、アーデイは茜色の空を見ながら考える。

潜れるところまで潜ってみよう、と言ってみたは良いが、コボルトやゴブリンを粉碎し、キラアアントを踏みつぶし、ウォーシャドウを引きちぎり、上層とはいえ大型種を殴り殺すLv. 1。

戦いづらそうにしていたのは、狭い階層。広さが出来てくると開放されたように動いていた。

いやまあ、わかつては居たけど。

フェルは時折ベルの横を抜けてくるモンスターを爪や牙で倒していた。

「これでマナポーションを買って、沢山の人を治療出来ますね！」

「良い心がけだけど、自分の為にも使いなよ？」

「自分のため、ですか？ うくん……ナイフを新しいのにしたり？

でも、今はこれでいいですかね」

ギルド支給品のナイフの柄に触れながら言うベル。そうだと妙案を思いつく。

「皆でご飯食べに行きましょう！」

ヘスティアは勿論、世話になったアーデイ、アミッド。エイナも暇そうだったら誘ってみよう。

「あとシャクテイさんやガネーシャ様も誘ってもらっていいですか？」

「うん、まっかせて」

いい使い方だね、と頭を撫でるアーデイ。

「ああ、それと。アミッドさんには本当のこと話しておいたよ」

「え？」

「君が恩恵持ってなかったってこと。アミッドさんなら信用できるし、君はヘスティア様の恩恵をもらって治療師ヒーラーになったってことで良いと思う」

「え、あ……よ、良かった」

正直嘘を付き続けるのは得意ではない。もう嘘を重ねる必要がないと聞き、ほっと一息つくベル。

本当に素直な子だなく、と気分を良くしたアーデイがベルの頭を撫でる。

「あ、じゃあ僕エイナさんとアミッドさんを誘って、神様と合流しますね！」

「わかった。じゃ、お店は私のおすすめ教えただげる。場所はね……」

アーデイはベルに店の場所を教えると、フェルに乗り『アイアム・ガネーシヤ』に向かつていった。

「……………ねえベル君。ベル君ってサポーターだっけ？ 治療師ヒーラーじゃなかった？」

「？ いえ、冒険者です」

「そんなに抱えて、重くないの？」

「重いつて、やだなあエイナさん。別に鉄を詰めてるわけじゃないんですよ？」

巨大なバックパックに魔石やらドロップアイテムを抱えて持ってきたベルに、エイナはこの子サポーターだっけと疑問に思うも良く解らない返しをされた。

取り敢えず中身を確認して見る。

「……………ねえベル君。この魔石、1、2階層の物じゃないよね？ あ

とこれ、もしかしてオークの皮？」

「はい！」

「何階層まで潜ってるの!?!」

「12階層です！」

「そんなこと聞いてるんじゃないの！」

「ええ!?!」

バン！ と使えを叩き叫ぶエイナ。何階層まで潜ったか聞いたのに!?! と困惑するベル。なんだなんだと視線が集まる。

「どうして大型種が出る階層に初日から潜ってるのかなあ!?! 私、危

ないことはしないと言ったよね!」

「えつと……別に、危なくは……」

「危ないの! 毎年、油断した冒険者がその階層で大怪我したり、死んじゃったりしてるんだから! 一体何処の誰と行ったの!」

「ア、アーデイさんです!」

「え……ヴァルマ氏?」

「は、はい……」

と、その名を聞き驚きで冷静になるエイナ。

アーデイ・ヴァルマ。オラリオでも屈指の人気を誇る第一級冒険者にして最高の調教師^{テイマー}。

そしてめちやくちや優しいお姉さん。そんな彼女が、無茶をさせるだろうか?

実はベルはかなりの才能を持っているからとか? 熟練のギルド職員達に半年も持たないと賭け事が行われていたのに? 因みにエイナはその話を聞いて怒りに任せ生き残るし担当になると叫んだ。

「うくん……ううくん……ベル君、ほんとに……ほんとーに大丈夫だったの?」

「はい。鍛えてますから……」

じーつと穴が飽きそうなほどベルを見つめる。嘘をついているようには見えない。

「はあ……わかった。何も言わない……でも、一人で潜る時は安全第一。ベル君の将来の夢はダンジョン内での人助けなんですよ?」

その前に自分が危険に合うようじゃ、助けられるものも助けられないよ」

「……はい」

「ん。よろしい」

と、ベルの頭を撫でるエイナ。

「あ、そうだエイナさん。この後、暇ですか?」

「この後? もうあがるけど、どうしたの?」

「良かったら一緒にお食事でもどうですか?」

「……………へ?」

食事に誘われることは何度もある。そのたびに上手く断ってきたエイナだが今回ばかりは反応に遅れた。

普通、食事に誘う冒険者というのは……まあその手の期待をにじませるものだ。ベルにはそういうのがないし、だからこそそう言うことはしないと思っていた。

「初のダンジョン探索で稼いだお金ですから、お世話になったエイナさんにお礼がしたくて」

純粋な善意で、事実なのだろう。駄目ですか？ と不安そうに見つめてくるベル。保護欲がキュンキュン擦られる。

「もう、仕方ないなあ。場所は？」

「すいません、アミッドさん居ますか？」

「はい、何でしょう？ ……ああ、ベルさん。初のダンジョン探索は終わったのですか？」

「【ディアンケヒト・ファミリー】の店舗にやってきたベルがアミッドの名を呼ぶと、丁度カウンターにアミッドが居た。」

「はい。だいぶ稼げました」

「それは何よりです。怪我などは……いえ、心配無用でしたね」

あのアミッドが。休日は薬品の配合したり調合の本を買ったりする仕事人間のアミッドが見知らぬ少年の仲良さげに話している。

誰だあれは、と興味持つ団員達。と……

「んん？ 誰じゃお主は……」

団員達の心を代弁するように老神が現れた。ベルの汚れを弾く救命団のコートを見て同業者か？ と首を捻り、しかし腰に指したナイフがギルドの支給品であるのを見抜き眉間にシワを寄せる。

「ここは貧乏人が来るところではないわ。薬が欲しいならミアハの所なら安く買えるからそっちにゆけい」

ただ帰れ、ではなく代わりの店を教えてくれるあたり、悪い神様ではないのだろう。言い方はあれだが……。

「彼は私の客人です」

「アミッドの？ どういう経緯で知り合った……」

「子供の怪我を魔法で治しているのを見て、声をかけたんです」

「治療師か!? 改 コンバージョン 宗しに来たか!」

これでさらに儲かる！ と俗っぽいことを言う神。恐らくは彼が
ディアンケヒトなのだろう。

「よし！ では早速改 コンバージョン 宗を！」

善は急げを体現したかのように早速ベルに己の恩恵を刻もうと奥
の部屋に連れていくため腕を掴もうとするディアンケヒト。アミツ
ドがそれを止める。

「残念ながらベルさんは恩恵を刻んで一年も経っていません。改 コンバージョン 宗
は不可能です」

「ぬう！ 恩恵刻んですぐ治療師として目覚める逸材を見逃すとは
！」

心底悔しそうに唸るディアンケヒト。誘ったが結局断られてしまっ
たアミッドは気にせずベルに向き直る。

「それで、どのようなご用でしょうか？」

「はい、【ロキ・ファミリア】の時や、神様に誘われた時に色々教えて
くれたりお世話になったので初のダンジョン探索で得たお金はお礼
にしよう。一緒に食事でもしませんか？」

「……え」

「おお行つて来い行つて来い！ アミッドよ、親交を深め必要な時に
手伝いにこさせるのだ！」

本人を前に言うことなのだろうか？

アミッドは引き継ぎがありますので、と遅れるため合流場所を聞い
た。

「……………えっと、こんばんはテアサナーレ氏。その……………ベルく……………
クラネル氏に？」

「ええ……………まあ、はい」

先に待っていたベルの横にアーデイとヘスティア、シヤクテイとガ

ネーシヤが居るのを見て、思わず固まる二人。同時に足を止めた二人はまさかと同時にベルを見て、察した。

「そうだよね、お世話になった人沢山いるよね……………」

「変な期待をするよりは、ミアハ様を相手にしているのと同じだと思っただけが良さそうです……………」

アミッドとエイナは同時にはあ、とため息を吐いた。なんだか仲良くなれそうだ。

酒場に入るのは間違っているだろうか？

「ここがね、私のお気に入りのお店。値段はちょっと高いけどそのぶん美味しいし、店員さんもきれいで強い人ばかりだから騒ぎが起きてもすぐに収まるの」

『豊穰の女主人』と言う店名の店。店の外からも活気が聞こえるほど繁盛しているらしく、それを誇らしげにしているのはアーデイの性格から考えて知り合いが働いているのだろう。

「というわけで、ジャー！」

と、扉を開ける。酒を飲み豪快に笑う冒険者達に料理や酒を運ぶ若葉色のジャンパースカートに白のエプロン姿のウエイトレス達。店の奥ではドワーフの女性が料理を作っている。

「いらつしやいませ……アーデイ」

「やつほーリユー。今日も綺麗で可愛いね、抱きついていい？ えい！」

「まだ何も言ってません!?!」

入店に気づき声をかけてきた金髪のエルフの給仕に突然抱きつくアーデイ。同性とはいえ他種族との接触を嫌うエルフが困った顔をしながらも受け入れているあたり、仲がいいのだろう。

「ほらベル、リユーだよ。すつごく可愛いでしょ?」

「はいー!」

因みにベルの理想は『金髪』! 『エルフ』!

ベルの好みのだ真ん中。ウサトの周りの綺麗な人達を見た経験がなければ一目惚れしていたかもしれない。

そう、ウサトは色んな女の人と仲良かった! やっぱりウサトさんはすごい!

と何故か勝手に兄弟子の株を上げるベル。

「アーデイ、こちらの方は?」

「んつとね、ベルだよ」

「……………」

「……………」

「…………え、それだけ？」

名前を紹介し、次の言葉を待っていると無言のリュウに首を傾げるアーデイ。紹介がそれで終わったと気付いたリュウは思わずその声を漏らした。

「あ、えつと…ベル・クラネルです。縁あってアーデイさんのお世話になって、他にもお世話になった人を誘ってダンジョン初探索のお金を使おうかと……………」

「それは…………いい心掛けですね。貴方のような方がアーデイの友人になってくれて、私も嬉しいです」

アーデイを引つ剥がしながら微笑むリュウ。

「改めて、私はリュウ・リオン。元『アストレア・ファミリア』の冒険者で、今はこの『豊穡の女主人』の店員をしております」

「アストレア？ 君、アストレアの眷属か！ そっか、懐かしい。アストレアもここに居るのかい？」

「……………いえ、訳あってオラリオには居ません」

と、何処か悲しそうな、あるいは申し訳無さそうな顔をするリュウ。知己について聞きたくはあったが、不用意に踏み込むべきではないと判断するヘスティア。

「では、案内いたします。こちらへどうぞ」

と、リュウに案内され席につく一同。声のよく通るガネーシヤが音頭を取る。

各々メニューを見て、酒や料理を注文していく。ベルの稼ぎを知っているアーデイは遠慮せず、知らないアミッドと知っているエイナは今後必要になるだろうからか遠慮がちに、ヘスティアとガネーシヤはその辺気にせず頼んでいく。

「では、ベルの初ダンジョン探索及びこの出会いに、乾杯!!」

「「かんぱーい!!」」

ガン！ と酒の入った木製のジョッキがぶつかり合う音が響く。祝われている本人が奢る、不思議な宴会が始まった。

因みにベルは酒を飲める。救命団団員達に昔飲まされたからだ。あと甘いのが苦手だったがとある国のお姫様に好き嫌いはいけませ

んど、好きになつてもらうまで食べてもらいますと食わされまくって平気になった。

あの頃は食べたぶんを消費する為に地獄を見た。いや、ほぼ毎日見てたわ。

「それにしても、ベル君凄かったね。初日で潜った階層、新記録なんじゃない?」

「そうなのですか? まあ、確かにベルさんなら……………何階層に?

5階層? まさか、10階層?」

「12階層」

「ぶふふ!」

アミッドは思わず飲んでいた酒を吹き出した。健康に影響の出ない薬用酒。独特の匂いがあるそれがベルに引つかかる。

「ああ! す、すいませんベルさん!」

「あ、いえ……………き、気にしないでください」

人によつてはご褒美だが生憎とベルにとつては良い気分のするものじゃない。まあそれでもアミッドを責める気にはなれないが。

「へく、それってやつぱりすごいのか?」

とオラリオの常識を知らないヘスティアは首を傾げる。ガネーシャは「うむ、ガネーシャだ!」と叫ぶのでまあ凄いことなのだろうな、と思つていとエイナが叫ぶ。

「すごいすくくないの問題じゃありません! ヴアルマ氏! あ、

えつと……………アーデイ・ヴァルマ氏!」

「アーデイで良いよ。お姉ちゃんは?」

「シャクテイで良い」

私、怒ってます! と言う雰囲気醸し出すエイナ。まあ気持ちはわかると特に気にした様子のないアーデイ。

「初日から12階層つて、何を考えているんですか!? ベル君が危険な目にあつたらどうするんですか!」

「いや……………私もね、思ったよ? ダンジョンはモンスターだけじゃなく環境もある。都市外の人は例えLv. 3だつたとしてもまずダンジョンの雰囲気味わうべきだし、ベル君も少し危なそうになつた

ら、その時点で止めようかなって……………」

と、アーデイは遠い目をする。

「でもベル君予想以上に強くなって……………どんどん進んで、流石に中層は良くないな、って引き返したの」

「そんな話、素直に信じられる訳ありません！　どこの世界に恩恵を受けて二日目、ダンジョンに潜るのは初めてで12階層まで行ける冒険者が居るっていうんですか！」

「……」

とベルが自分を、アーデイがベルを指す。ベルを拭いてやりながらアミッドも何とも言えぬ顔をしていた。

「エイナ・チュール。クラネルをそこらの冒険者と一緒にするな。同列に考え、常識を教えるだけ無駄だ。先日、門で暴れた冒険者の噂を知っているな？」

「は、はい。一応……………」

「多少誇張されているが、あれは恩恵を得る前のクラネルだ……………」

「……………え？」

Lv. 2やLv. 3の衛兵もやられたというあの？

どんな恐ろしい都市外眷属がやってきたのかと、ギルド職員達を戦慄させたあれが、ベル？

いや、誇張されているのだったか？　それでも、多分衛兵相手に暴れたのだろうし……………。

因みに誇張されている部分は暴れた者が筋骨隆々だの……………そもそも都市外の神の眷属という部分だったりする。

「それは初耳ですが……………ベルさん？」

「その……………都市外でタイムしたモンスターで一騒動あったって言ったじゃないですか？　その時に……………」

アーデイが取り持つ前に、暴れていたと。

「まあ幸い怪我人は一人も居なかったが」

「はい！　僕は救命団ですから、傷を残さないようにするのはお手の物です！」

「救命団とは……………」

何で人を救う救命団が人に攻撃して怪我させない方法を熟知しているんだ。

エイナはなんだか疲れたと頭を押さえる。

「ベル君が、実は強いって言うのは……そうは見えないけど信じるよ。でも、ダンジョンは油断ならないんだからね？　人を救いたいって思いは立派だけど、無茶をしないように」

「解ってます。自分を守ってこそ、それが僕を鍛えてくれた人の教えで……自分も皆も守る、それが僕の憧れた人の言葉です」

と、誇らしげな、懐かしそうな顔をするベル。

「ローズさん……師匠は滅茶苦茶だし怖いし鬼のような人ですけど、本当は誰よりも優しくして。ウサトさんは格好良くて何時も誰かの為に頑張れて、僕が憧れた物語の英雄が、そのまま目の前に現れてくれたような人達で……だから、あの人の弟子として、あの人の弟弟子として、自分の命を粗末にするのだけはしちやいけない。そう思ってます」

「……そっか。なら、信じてあげる」

それにしても、ローズ。いや、名前が一緒なだけか、とエイナは一瞬浮かんだ同僚の顔を頭から消す。

「英雄かあ、それがベル君の原点なんだね」

「子供っぽいですかね？」

「ううん、良いと思う。私も英雄大好き！」

と、笑顔で返すアーディ。照れくさそうなベル。それを微笑ましげに見つめるシャクテイ、ガネーシャ、ヘスティア。

「ベルさんが居た救命団……きつと、素晴らしいところだったんでしようね」

「はい。皆さん盗賊みたいな顔してますけど、根は優しい人ばかりでした」

盗賊？

まあベルが言うのだから、優しい人たちだったのだろう。

「あそこにいられたのは、僕にとって誇りです。だから、一人でも多くの命を救いたい。守りたい……そのためには、より危険な下の階層に

行けるぐらい強くなりたい。もちろん、地上でも怪我している人がいたら治しますよ」

「……………貴方は……………そうですか。それは、素敵な信念ですね」

グツと拳を握るベルを見てアミツドが微笑む。と、ドンと新たに料理が追加された。

「話は聞こえたよ。冒険者成り立ての坊主が随分大層な夢を持ったもんだ。冒険者はそうじゃなくちゃね！　これは奢りだ、精をつけてダンジョンに挑むんだよ！」

ドワーフの店主が豪快に笑う。アーデイがありがとうミア母さん！　と呼ぶ中ベルはジツとミアというらしい店主を見つめ、首を傾げる。

「なんだい？　あたしの顔になにかついてるかい？」

「いえ、なんかこの感じ……………懐かしいような……………あ！　このムカつくことは取り敢えず暴力で解決しそうな気配、性格は違いうけどローズさんそっくり！」

「はっはっは！　生意気な坊主だ！」

ズドゴン！

ベルはデコピンで吹き飛ばされた。

「てめえ毎度毎度いきなり！　って、あ！　違った……………すみません！

つい、ローズさんにする時と同じ反応を！」

「気にしなくていいよ。そのローズって人は、そんなにあたしに似てんのかい？」

「はい！　忠告より先に手が出るところが良く似てます」

「そうかい、そいつとは気が合いそうだね」

「ミアお母さん以外にそんなやつが？」「この世の終わりにゃ」などと言い合う店員たち。

「つーかなんであの駆け出しミア母ちゃんのデコピン食らってピンピンしてるにゃ。しかしいいケツしてるにゃあ」という店員も居た。

「……………ベル君って、怒ると口調変わるんだね」

「ウサトにい……………ウサトさんが怒る時はきちんと声に出したほうがいって叫ぶ特訓とか手伝ってくれて、少し口調がうつつちやつて

……」

照れくさそうに、でもどこか嬉しそうなベル。

それだけ強く彼の印象に残るウサトと言う人間に、その場の誰もが興味を持つ。

「昔話を聞きたいところだけど、今はお酒とご飯を楽しもつか」

「はい！」

そうして6人の宴会は、そのまま暫く続く。

そして、店を出て解散しようとする一同をベルが呼び止める。

「実は皆さんにこれを……」

人数分に用意された箱。

ヘステイアは小さな銀色の鐘が付いたりボン、アミッド、アーデイ、エイナ、シャクティにはブレスレット、ガネーシャにはネックレスが入っていた。

「やっぱりお食事だけじゃ、僕の気がすまなくて……受け取ってくれませんか？」

「もちろん！」

「わあ、ありがとうベル君！」

「感謝する」

「ベル君、ありがとうね」

「うむ！ これはガネーシャだ！」

少し不安げだったベルは、皆のその言葉に嬉しそうに笑った。

ダンジョンで出会うのは間違っているだろうか？

ベルの朝は早い。まだ日が昇る前に起きて、軽く10K程走り、腹筋、背筋、腕立てなどの各種千回。

今は最後の腕立て伏せ。掌が地面に付かぬよう五指の力で持ち上げ反動をつけぬようにゆっくり降ろし、ゆっくり持ち上げる。

「997……998……999……1000!」

腕の力で跳ね上がり、足で着地。治癒魔法で疲労を癒やして汗を拭き、着替える。

今日もダンジョンだ。ギルド支給のナイフを腰に、救命団団員白服に着換え、早速ダンジョンに向けてかけていく。

今日は一人。何でも、「ガネーシャ・ファミリア」でモンスターの生態調査のための定期検診があるのだとか。そのためアーデイとフェルは休み。他の団員を紹介しようかといったアーデイだったがシヤクテイが余計な混乱を招くとやんわり反対。

エイナからは深く潜りすぎないように言われた。

なので大型種の出ない階層へ！

モンスターの現れるインターバルが短く稼ぎやすい7〜9階層へ。違うそうじゃないという声は残念ながら聞こえてこなかった。

「うくん……この辺はやっぱり怪我する人は少ないのかな？ まあ、それは嬉しいことだけだ」

しかし毎年ダンジョンで死者怪我人は出ると聞く。上層では稀だ。何故か？ 恩恵を持っていたら、それこそ大型種の居る階層でもない限りモンスターから逃げ切れることが多いから。逆に言えば中層、下層に死者怪我人が集中していることになる。

深層は行けるファミリが限られ、入念に準備するため死者は逆に少ない。

「やっぱり主な活動範囲は中層、下層にするべきかな。とはいえ僕一人でも限界はある……」

どっかに重い荷物を運んだまま走れる人材はいないだろうか？ 居なくても育てれば良いが、育てるための人員すらない。

零細ファミリアの悲しいところだ。

祖父は「ファミリア」の女の子を全部ものにするじゃぞくと送り出したがそもそも女の子はいない。

そんなことを考えながらモンスターの胸から魔石を抜き取り灰に還し、時折出てくるドロップアイテムと共にバックパックに入れていく。と……………

「ん？ 何か、来るな……………」

不意に感じる迫りくる気配。なかなか速い。すぐにドド、つと足音が聞こえてきた。

「ブオオオオオ!!」

「え、ミノタウロス!? 何でえ!?!」

中層に出現するはずの二足歩行の雄牛のモンスター。この階層に
いるはずがないモンスターの出現に驚きながらも、ミノタウロスが振り下ろした石ナイチャーウエボン 斧がギルド支給品のナイフを砕いた。

「ほああああ!?!」

貰い物なのに!

ギルドから渡されたものなのに!?

いやまあ、既に購入したレンタル品ではないのだから壊したところで責められる謂れはないが……………さて、ミノタウロスに折られたのをどう説明する?

中層に潜ったと思われて美しいハーフエルフの顔が怒りに歪みお説教タイムでは!?

中層には行つてないけど、ミノタウロスが上層に現れるよりはベルが中層に潜つたほうがまだ現実的だ。そうだ、オークに折られたこと
にしてみるのは!?

「ブルオオオオオ!!」

「ちよつと待つて! 今考えごと!」

「ブオ!?!」

再び振り下ろされた石斧を受け止め握力で握り砕くベル。いや、やっぱり正直に9階層でミノタウロスに合ったというべきか? 普通に異常事態だしギルドに報告したほうが…………ん? ミノタウロス。

「あ……………え？」

「ブモ？」

忘れてた、とミノタウロスに向き直るベル。そのミノタウロスの身体に、線が走る。

胴に続き胸部、上腕、大腿部、下肢、肩口、首と連続で刻まれていく線。

「グブウ!? ヴウ、ヴウモオオオオオ!!」

断末魔を上げ、刻まれた線に沿いズレていく。大量の血が吹き出しベルの頭からバシヤリと全身を汚していく。

「わぶ、ぺっぺっ!」

口に入った血を吐き出しながらミノタウロスを斬った何者かを見る。それは美しい少女だった。ベルより少し上ぐらいだろう。

金の髪に金の瞳。

背中が大胆に開き、下半身は丈の短いスカート。祖父いわく絶対領域のスカートとソックスの間から除く白い肌は陶器のように滑らか。

(……………あれ、この格好……………)

ベルはふと、ロキとしたとある会話を思い出す。

——あの、やっぱり団長さんが戻ってきたら改めて謝罪したほうが——真面目やなあベルっち。主神ウチが良いゆうとるからええんよ。

つかLv. 1のくせにLv. 3殴り飛ばしたなんて、面倒事にしかならへん。特にアイズたんやな

なんでも、いきなり闘いを申し込まれるかもしれない、と言っていた。やはり怒られるのだろうか？

そのアイズたんなる人物の容姿をロキに事細かに自慢気に説明された。そう、ちょうど目の前の少女と被る。

「あの、大丈夫ですか？」

「すいませんでしたああ!!」

「え!」

白兔ベルは逃げ出した!

救命団は何よりも足が命。そこらの騎士でも目にも留まらぬ速さで動く。では治癒魔法持ち故に限界を超える修行をさせられたベル

の速度は？

突然の謝罪に唾然とした少女が正気に戻る僅かな間で、完全に追跡不能なレベルで走り去った。

「……………え？」

ポカンと立ち尽くすアイズ。突然の事に対応できず、呆けているとくく、と笑いを堪える声が聞こえた。

振り返ると狼 ウエアウルフ 人の青年、ベートが腹を抱えて震えていた。

「ま、まあ気にしなくて良いんじゃないの？ サポーターが突然血塗れにされりゃ、ぶふっ！ 逃げたくもなるわな！」

巨大なバツクバツクを背負っていた彼は、あの格好からしてサポーターなのだろう。周りに冒険者らしき姿が見えなかったが、まさか置いていかれたのだろうか？

「……………？」

と、何かを踏みつける。見てみるとそれは、ミノタウロスなどがよく持つ天然武器ネイチャーウエポンの石斧だった。一部が砕けている。周りにナイフの破片らしき金属片も混じっている。

「……………？」

ぶつけ合って、互いに砕けた？ それにしては何というか、石斧の砕け方が一部分に物凄い力を加えたような……………？

「ふう……………」

ギルドの共有シャワースペースで血を落とすべし。脱衣所に戻れば細身ながら引き締まった筋肉に周りの男達からの視線が集まる。こういうのは悪気はしない。

「男として負けてんな、お前」

「お前だって……………あの年であれかあ……………」

そうとも、この年でこうなるほど鍛えまくった。鍛えさせられたともいうが、まあなれてくると自分の意志でやっていたし……………。

軽く水で流すだけで元の白さを取り戻した団員服を羽織り、エイナに報告するためにギルドの受付に向かう。

「私安全を意識してって言ったよね!」

「はい、だから大型種の出る10階層までは行きませんでした」

「ベル君、そこに正座!」

怒られた。何故だ。誰か理由を教えてください。

ミノタウロスの件はギルドで調査するらしい。怪我人が出ていたら、ベルにも教えてくれるそうだ。

「ありがとうエイナさん! 大好き!」

「えあ!」

ベルの明け透けのない好意の暴露に思わず妙な声を出すエイナ。しかし文句を言おうにもベルの姿は日の傾きかけたオラリオの町並みに消えていた。

「うくん。やっぱり、上層も上層じゃあベル君のステイタス、上がらないねえ」

「まあ一日で上がるものでもないでしょうし……」

「いや君の場合上がってもおかしくない……んん! ま、仕方ないさ! アドバイザー君を怒らせるわけにもいかないし、またアーディ君と組んで10階層や、何なら中層にでもいかせてもらおうといいよ!」

「はい!」

ヘステイアの言葉に元気よく叫ぶベル。

ところでLv. 1で中層潜るとか正気かお前等、とつつこむ者はここにはいない。まあ現在ツツコミを入れるほど親しい仲の殆どは、ベルだし、で中層行きも納得しそうではあるが。

酒場で怒るのは間違っているだろうか？

フェルを乗せダンジョンに向かって駆けていくベル。フェルの背に乗ったアーデイがゴーゴー、と元気に応援する。

体高2メートルの巨大な狼を背負った兎のような少年が疾駆する姿に、疎らな人影はギョツと全員二度見、三度見する。

「ところで今更だけど、なんでフェルちゃんを乗せてるの？」

「修行になりますから！ まあ、最近は軽くて鍛えがいないですけど、何かを担いで走る感を鈍らせなくてすみます」

「うくん……………そっか、良く解んないや」

と、大通りを通り『豊穰の女主人』の前を通ろうとして、ベルが足を止める。

「どうしたの、ベル君」

「わふう？」

「今、なにか……………んんん？」

キョロキョロ周囲を見回し首を傾げるベル。バベルの上を見て、また周りを見る。

「誰かに見られていたような」

「それはそうだよ。さつきから目立ってるもん」

「そうですね。きつと、オラリオ都市伝説に刻まれます」

「あ、シルさん」

と、そんなベル達に話しかけてきたのは『豊穰の女主人』の店員の一人、シル・フローヴァだ。リユートの親友の一人らしい。

「おはようシル。今日もかわいいね」

「はい、おはようアーデイ。リユームみたいに私に抱きつかないの？」

「うくん。シルはなんか、踏み込みづらいというか……………なにか私に隠し事してるでしょ？」

「それはアーデイも同じでしょ？」

「うくん。私のはガネーシャ様達から口止めされてるからなあ」

つまり隠し事はあるらしい。隠していることを隠さないあたり、ちゃんと仲がいいようだ。

「そういえば、お二人共今夜のご飯はどうするの?」

「私はまたベルと食べようと思ってるよ」

「神様がバイトの打ち上げなので、僕もアーディさんとお食事を。良ければまたここで食べさせてもらってもいいですか?」

「酒場なんですから、食べに来るのを断る理由なんてありませんよ。それに、今日は団体様が入るんですけど知り合いがいれば私もリユーも少しだけ休めますし、ね?」

パチリとウインクしていたずらっぽく微笑むシル。とても可愛いのが、ネア姉さんと似た気配を感じる。つまり己の可愛い見せ方を熟知している。

悪意は感じないけど、うまいように乗せられそうだな、と苦笑した。

「あ、見て見てベル君。ベル君!」

「アルミラージですよ!」

中層にて石斧を持って群れで行動し、知恵を持って翻弄してくるアルミラージ。ウサギ型のモンスターで毛並みは白く目は赤い。

「ガウ!」

ウサギといえれば狼の餌。本来群れで行動し狩りをする狼とはいえ群れを失った期間の長いフェルは爪で裂き牙で貫く。尾で弾いた個体をベルが受け止め残りのアルミラージに投げつける。

「ベル君! 右方向、砲撃くるよ!」

と、3匹黒い犬の姿をしたモンスターが口の中に炎をためているのが見えた。ベルは即座に緑の魔力の塊を生み出し握りしめ投げつける。

パァン! と大型犬程のモンスター、ヘルハウンドが壁まで吹き飛び、動揺した2体に地面を砕くほどの踏み込みで一瞬で接近したベルが一匹目の顎を蹴りつけ首を飛ばし、体を回転させながら二匹目の背骨の蹴り潰す。

吹き飛びされた一匹が再び炎を吐こうとしたがベルに上顎を捕まれ地面に叩きつけられ、罅が周囲に伝播する。暫くはモンスターは生

まれない。

「うくん。ダンジョン進出半月で中層でも難なく動ける駆け出しって……まあベル君だもんね」

ドロップアイテムや魔石を回収しながらあはは、と笑うアーディ。神々なら細けえこたあ気にすんなど言うのだろう。

「それより、役に立ってるようで何よりだよ」

「ワフウ」

フェル専用に使えられたバックパック。フェルの体幹を邪魔しないよう計算されて、左右についている。ベルがバックパックを背負わずに済むので多少狭い通路だろうと気にせず動き回れる。

「とは言え、一人じゃ確かにろくに魔石とかも回収できそうにありませんね。エイナさんが止めるのも解ります」

「普通は死んじゃうからなんだけどね」

モンスターの数が多く、さらに離れた場所からも戦闘音を聞きつけてやって来る。ベル一人では魔石を回収している途中にでも別のモンスターがやってきて、ヘルハウンドだったならせつかくの戦利品が焼かれていたかもしれない。

「にしてもあのヘルハウンド、あんなに吹っ飛んでたのにすぐ起き上がってたね」

「まあ、あれは回復魔法ですから」

「ん？」

「僕もアルクさんやスズ姉みたいな攻撃魔法を使ってみたんですけど、そこは今後ステイタスに刻まれてくれたらなあって感じですね」

「えつと……ヘルハウンドをふっ飛ばしたあの技は、ベル君の治癒魔法の応用？」

「はい！ ウサトさんが教えてくれました！」

確かそのウサトという人物も治癒魔法の使い手だと聞いた。なるほど、治癒魔法で相手をふっ飛ばすと使い手は二人いるのか。えつと………どういうこと？

うん、これもベルだからということにしておう。

「お、今回はそこそこ上がってるね！」

「本当ですか!？」

「うん！ まあ、ダンジョンに潜らなくても鍛錬で挙げられなくもな
いらしいしね。毎朝の自主練も実を結んでると思うよ……」

ヘスティアの言葉にベルは嬉しそうに微笑む。自分がしているこ
とが無駄じゃないと言われれば、そりゃ誰だって嬉しいだろう。

「まあやっぱり中層に潜ったつていうのが大きいとは思うけどね」

「鍛錬ならともかく、お金も稼がなきゃいけないとなるとエイナさん
の言うとおり、一人は少し厳しいかもですね。後ろから急にモン
スターが生まれたりもして、頑丈なバックパックじゃないと破られちゃ
います」

「つまり君自身は、稼ぎを気にしなければ大丈夫と……」

「後、やっぱりナイフが……ギルドの支給品じゃ中層のモンスターは
斬りにくいですね」

「やっぱり全部殴り殺すのかい？」

「うくん。下の方では打撃に強いモンスターも居るみたいだし、やつ
ぱりナイフは必要ですかね」

「ベル君の力に耐えられるナイフから探さないとだろうけどね」

中層、下層での戦闘ともなればナイフにかかる負荷も段違いだろ
う。ハード・アーマードやキラアアント相手に支給品のナイフを使っ
たら普通にかけたし。もう少し硬ければナイフが砕けていた。

「うくん。ボクも君にプレゼント貰ったしなあ、心当たりを訪ねてみ
よっか？」

「いいんですか!？」

「ボクらはたった二人の主神と眷属じゃないか、支え合って当然さ！」

「ありがとうございます！ 神様！ 大好き！」

「いえーい！ ボクもボクが大好きー！ もちろん、ベル君も大好き
だぜー！」

パーンとハイタッチするベルとヘスティア。ヘスティアはバイト

の打上へ、ベルはアーデイとの食事に向かった。

「いらつしやいませベルさん、アーデイ」

シルは朝の宣言通り、ミアに許可をもらい席に座る。団体が来るからか、給仕の店員はそれなりに居たからだ。

「それにしてもLv. 5のアーデイとLv. 1のベルさんって、改めて聞くと変なチームですね」

酒や料理を注文し、中層にいったことはぼかしつつダンジョンでの話をシルに聞かせる。

「ふふシル。ベルはLv. 1じゃなくて、ベルという存在で見たほうが良いよ。常識が通じないから」

「ええ………僕なんてまだまだ師匠の非常識さには及ばないと思うんだけどな」

「いやいや、ベルより非常識な存在のほうが私は信じられないなあ」

アーデイの言葉に納得いかないとむくれるベル。まあそんな様相も可愛らしいと二人の女性にニコニコ眺められていたが。

「団体のお客様、入りましたニャー！」

と、元気な猫キャットピープル人、アーニャの声が聞こえ十数名の団体がぼつかり空いていた席に座る。

「あ、「ロキ・ファミリア」。あそこね、私の友達のテイオナって娘がいるの。ほら、あのアマゾネス。英雄譚が好きだし、ベル君とも気が合うかもね」

とはいえ今は身内の宴会。邪魔するのは悪い。ベルも彼等の団員を殴り飛ばした過去がある。主神のロキには許されたとはいえ仲間である彼等の中には良く思っていない人も居るだろう。後日きちんと謝りにいくつもりだが、それはそれとして良い気分の宴会を邪魔してはなるまい。

関わったら鬨いを挑まれるかもしれないとロキが言っていたアイズアイズの姿もあるし、ベルは関わるつもりはなかった。その話が、聞こえるまでは……

「そうだアイズ！ お前のあの話を聞かせてやれよ！」

酒に酔い顔を赤くした獣人の青年が不意に叫ぶ。それに対してアイズは首を傾げる。

「あれだって、帰る途中で逃したミノタウロス。最後の一匹、お前が9階層で始末しただろ!? そんなでほれ、あん時いたトマト野郎の!」

トマト? :

ダンジョンで何でトマト? と首を傾げるベル。

「ミノタウロスって17階層で返り討ちにしたら逃げたやつ?」

「それぞれ! 奇跡みてえにどんだん上層に上っていきやがってよ、俺達が泡食って追いかけていったやつ! そこでいたんだよ、いかにも駆け出っというようなひよろくせえガキが!」

何故9階層に駆け出しが? そんなこととしてはいけないと叱られたばかりのベルはそう思った。

「ミノタウロス前にしてなっさけねえ声で叫んでよお!」

「ふむう? それでその冒険者どうしたじゃ?」

「冒険者ですらねえよ、サポーターだ。アイズが間一髪でミノを細切れにしてやったんだけどよお。そいつ……あのくっせー牛の血全身に浴びて、真っ赤なトマトになっちまんたんだよ! くくくっ、ひーっ腹痛ええ……!」

「うわあ……」

バンバン机を叩いて腹を攀じる青年に、ベルはすつと目を細める。雰囲気の変化に料理を運んでいたルノアが気付く。

「アイズ、あれ狙ったんだよな? そうだよな? 頼むからそう言ってくれ!」

「……そんなこと、ないです」

絞り出すような、ともすれば泣き出しそうにすら聞こえるアイズと異なり「ロキ・ファミリア」の殆どが失笑し周りの客達も釣られて出る笑みを噛み殺す。

「それにだぜ? そのトマト野郎叫びながらどっかに行っちゃまってっ……ぶくくっ! うちのお姫様助けた相手に逃げられてやんのおっ!」

「……………くっ」

「アハハハハハッ！ そりや傑作やあー！ サポーター怖がらせて
もうアイズたんマジ萌えー!!」

「ふ、ふふっ……ご、ごめんなさい、アイズっ、流石に我慢できない
……」

どつと笑い声に包まれる【ロキ・ファミリア】。吹き出す客達。その
喧騒は……

「ちよっ、あんた待っ——っ!」

ドガアアアアン!

何かが砕け散る音で静寂へと変わる。

「……………あ」

砕け散ったテーブル。十字に開いた一本足と接触していた床も砕
けている。拳を振り抜いた形で固まる白髪の少年に、誰もが視線を向
けアイズが目を見開く。

「なな、何やってるのさ冒険者君!」

「す、すいませんルノアさん！ ミア母さんも、その…つい!」

顔を真っ青にしてベルをがくがく揺らすルノア。ベルは慌ててル
ノアとミアに謝罪し、ミアは顔を顰め腕を組むも、意外なことに手を
出してこなかった。その視線が【ロキ・ファミリア】に向く。

見逃されているのだろうと理解したベルはルノアの手を剥がし椅
子から立ち上がる。

「……………えっ」

あっさり剥がされたことをルノアは理解出来ないと言うように驚
き己の手とベルを見比べ、ベルが【ロキ・ファミリア】に向かって歩
き出すのに気付くのが遅れた。

「あー！ ベルっち。どないした、何や怒って。ミア母ちゃんの店で命
知らずやなあ」

「どうした？ そんなこともわからないんですか？」

「……………あく……これ、ウチらに怒っとるん？」

意外にもベルを気に入っていたのかベルを怒らせた理由が自分達
にあると気付き冷や汗を流す。

「故意でないとは言え中層のモンスターを上層に逃がして、そのせい

で人が死にかけたことを酒の肴にゲラゲラ笑う。恥を知れ！」
「その通りだな。返す言葉もない、不快な思いをさせたことを詫びよう少年」

ベルの言葉に気まずそうに視線をそらす者達の中には生意気な、と睨む者も居たが緑髪のエルフの言葉にその者達も目を逸らす。ただ一人を除いて

「はっ！・ゴミをゴミと呼んで何が悪い？ 強いモンスターに遭遇するなんて可哀想に、助けてあげますとでも言えっつかあ!? 中層から昇ってきたから何だっつてんだ。自分より弱いモンスター狩って冒険者気取る奴が、すぐに己を過大評価して死にに潜りやがる！」

「……………なるほど。そういう考えですか……………確かに僕の師匠も滅茶苦茶罵倒しそう、情けねえっつて……………だけど、あの人は人が死にかけたことを嗤わない！」

「っ!？」

ベルは獣人の青年の首を掴む。酔っていたとはいえ第一級冒険者が反応に遅れた。

「人を殺しかけておいて嗤うな犬っころ。表出ろやてめえ！」

引き剥がそうとベルの腕を掴む青年。その姿がベルの腕とともにぶれ、入り口まで吹き飛ぶ青年。

「っ!？」

「てめ——!？」

「二人共座れ」

ベルを心配するような顔で立ち上がったアマゾネスと怒りに顔を歪めたアマゾネスは、しかし小人族バルウムの男性の言葉に固まる。

「で、でもフィン！ 酔ってもベートはLv. 5だよ!？」

「そうだね。そして、酔っていたとしても彼はベートを投げ飛ばした」
アマゾネス達が手を出してこないのので外に向かったベルの背を見て目を細める小人族バルウム。

「ロキ、君が言っていた追い返されてしまった治療師ヒーラーの名前も、ベルだった気がするけど」

「あゝ、うん……………門番殴り飛ばした子や。まさかベートまで投げ飛

ばすとは」

「……………これは僕等が起こした不祥事を彼が看過出来ぬと手を出してきた結果。それでもベートは納得しないだろうし、彼も多分そうだろうね……………危なくなったら止めるとして、暫くは静観した方が良さそうだ。【象神ウイヤーサの詩】、君もね」

慌ててベルを追おうとしていたアーデイもその言葉に足を止める。

「まあ止められるように待機はすべきだろう」

「そう、だね……………」

青年に続きアーデイ達も外に出る。酔いが冷めきつていないベートは思考に霧がかかっている中、己を投げ飛ばしたガキを……………否、敵を睨む。「色々言いたいことはありますが、まずは」

「やってくれたなてめえ……………！」

「ぶっ飛ばす！」

あれ、この二人案外仲良くなれるのでは？ アーデイはそう思った。

酒場で再会するのは間違っているだろうか？

父と母の夢を見た。何年も思い出すこともなく風化しかけていた、平穏な日々の一瞬。

何故今になってと考え、昨日の少年を思い出す。冒険者特有の歪みを感じさせぬ、無垢な白。純粋な子供のような、ダンジョンに居るのが不思議な少年がモンスターに襲われていた光景が、父に助けられた時の自分と被ったのだろう。

夢を運んできてくれたかもしれない白兔に、アイズは知らず唇を小さく和らげていた。

その日の夜は遠征の打ち上げ。

宴会の前に、ドロップアイテムや依頼されていた品物の交換に、武器の整備や再購入。アイテムの補充などを行う。

【ディアンケヒト・ファミリア】から深層のドロップアイテム採取の依頼も受けており、アイズ、ティオネ、ティオナ、レフィーヤはそれを渡しに来たのだ。

「いらつしゃいませ【ロキ・ファミリア】の皆様」

「アミッド、久しぶり！」

ティオナが親しげに話しかけたのはアミッドだ。精緻な人形を思わせる彼女はアイズ達の顔見知りでもある。

「本日のぐう用件は、引き受けていただいた冒険者依頼クエストの件で間違いないでしょうか？」

「ええ。今は大丈夫？」

「はい。どうぞこちらに」

アミッドが案内しようとした時、不意にティオナが腕でキラリと光る装飾品に気付く。

「あれ、アミッドがお洒落なんて珍しいね」

白銀のチェーンにアミッドの瞳と同じ色の紫水晶アメジストが嵌められたシンプルながら中々綺麗なブレスレットだ。

しかしアミッドがその手の装飾品を身につけるなど始めて見た。

「これは貰い物です」

「へえ、でも貰い物なんてしよつちゆうでしように受け取るなんて初めてじゃない？」

「それは治療のお礼として渡されるものですから。既に代金を頂いている以上頂けません、これは個人的な贈り物なので」

と、ブレスレットを微笑むアミッド。ティオナはハツとなにかに気付き目を輝かせる。

「もしかして、もしかしてさ！ 男の人からのプレゼント!?」

「ティ、ティオナさん！ プライベートに踏み込んではいけませんよ！」

「え、良いじゃん。レフイーヤだって気になるでしょ？」

浮いた話の一つも聞かぬが人気の高い、オラリオでも知らぬ者のいないアミッドの異性関係の話など誰だって興味持つ。レフイーヤも思わず言葉に詰まっていた。

「男の人というよりは、男の子というべきでしょうか。異性というよりは年の近い弟を見ている感覚です。治療師でもありますし」

「へ、じゃあ新人なの？ どの子？」

「いえ、彼は別の「ファミリア」に所属しました。様々な「ファミリア」で門前払いされていたのを見ていた女神様に見初められて……」

「アミッドは誘わなかったの？」

「誘いましたが、彼の目的を考えるとウチよりも自分で方針を決められる新興「ファミリア」の方が魅力的だったようで……」

少し残念そうに言うアミッド。治療師は希少だから、だけなのだろうか？

その後は冒険者依頼報酬である万能薬を受け取り、また別のドロツプアイテムである強竜の皮膜をティオナが相場より高く売った。

そして武器の整備に【コブニュ・ファミリア】によつて剣の整備を頼み、予備の剣を貰った。因みにティオナは超重量の特別製、二つ名【大切断】の由来である大双刃を溶かしたことを嘆かされていた。

そして宴会。

夢の影響もあつてか、何時もの宴会よりも気分がいいアイズ。しかしそれは一人の男の声で覆る。

「そうだアイズ！ お前のあの話を聞かせてやれよ！」

ロキを中心に遠征の話で盛り上がっていると斜向かい、陶然としているのベートが話を催促してきたが、心当たりがなく首を傾げる。

「あれだって、帰る途中で逃したミノタウロス。最後の一匹、お前が9階層で始末しただろ!? そんでほれ、あん時いたトマト野郎の！」

「――」

彼が言わんとしていることが解った。自分が助けた、あの白髪の少年。

「ミノタウロスって17階層で返り討ちにしたら逃げたやつ？」

「それぞれ！ 奇跡みてえにどんだん上層に上っていきやがってよ、俺達が泡食って追いかけていったやつ！」

こっちは帰りで疲れてたつてのによろ！」

ティオナの確認にベートはジョツキを叩きつけながら答える。

普段より声の調子が上がっている彼に嫌な予感を覚えるも、耳を傾けるロキ達にベートは詳しく説明を続ける。

「ここでいたんだよ、いかにも駆け出さつていうようなひよろくせえガキが！」

――止めて、と。

アイズは反射的に心の中で呟く。

「ミノタウロス前にしてなっさけねえ声で叫んでよお！」

「ふむう？ それでその冒険者どうしたじゃ？」

初めて感じる感情の名前が解らない。何故心を乱されるのかも解らないが、それでも聞いていたくなかった。

「冒険者ですらねえよ、サポーターだ。アイズが間一髪でミノを細切れにしてやったんだけどよお。そいつ……あのくつせー牛の血全身に浴びて、真っ赤なトマトになつちまんたんだよ！ くくくつ、ひーっ腹痛ええ……！」

「うわあ……」

ティオナが顔を顰めながら呻いた。それだけで悲しくなる。

「アイズ、あれ狙ったんだよな？　そうだよな？　頼むからそう言うてくれ！」

「……そんなこと、ないです」

アイズはそれだけを喉から絞り出す。聞き耳を立てている冒険者達の忍び笑いが耳に響く。

「それにだぜ？　そのトマト野郎叫びながらどっかに行っちゃまってっ……ぶくくっ！　うちのお姫様助けた相手に逃げられてやんのおっ！」

「……………くっ」

「アハハハハハッ！　そりや傑作やあー！　サポーター怖がらせてもうアイズたんマジ萌えー!!」

「ふ、ふふっ……ご、ごめんなさい、アイズっ、流石に我慢できない……………」

どっと笑い声に包まれる「ロキ・ファミリア」。

レフィーヤが、ロキが、ティオナが、誰もが堪えきれず笑い出す。自分の周りだけ穴が空いた気がする。

自分一人を残して世界が遠くなる。と――

ドガアアアアン！

何かが砕け散る音が響き、喧騒を静寂へと変わる。意識が今に戻ってきた。音の発生源に目を向ける。

「……………あ」

白髪の少年がいた。机が壊れている。まさか、彼が？

そう思っているとこちらにやってくる。

やはり、笑いにされ怒ったのだろう。そう思うと何と声をかければいいのか解らず、結果俯くしか出来なかった。

「あー、ベルっち。どないした、何や怒って。ミア母ちゃんの店で命知らずやなあ」

ロキの知り合い？　酔で顔を赤くしたまま話しかけるロキに対して、ベルと呼ばれた少年は不機嫌そうに眉間にしわを寄せていた。

「どうした？　そんなこともわからないんですか？」

「……………あゝ……………これ、ウチらに怒つとるん？」

「故意でないとは言え中層のモンスターを上層に逃がして、そのせいで人が死にかけたことを酒の肴にゲラゲラ笑う。恥を知れ！」
「その通りだな。返す言葉もない、不快な思いをさせたことを詫びよう少年」

良く通る声だった。ベルは大きさ。それに賛同したりヴェリアは透き通るような綺麗な声で。

副団長であるリヴェリアにまで言われれば文句を言える者は居ない。一人を除いて……

「はっ！ ゴミをゴミと呼んで何が悪い？ 強いモンスターに遭遇するなんて可哀想に、助けてあげますとでも言えっつかあ!? 中層から昇ってきたから何だっつてんだ。自分より弱いモンスター狩って冒険者気取る奴が、すぐに己を過大評価して死にに潜りやがる！」
「……………」

その言葉にベルは僅かに目を見開く。気のせいかな、険が僅かに取れたような？

「なるほど。そういう考えですか……………確かに僕の師匠も滅茶苦茶罵倒しそう、情けねえっつて……………だけど、あの人は人が死にかけたことを嗤わない！」

「っ!?!」
そう言っつて首を掴む。いけない!

ベートはLv. 5の第一級冒険者だ。しかも酔っているため加減を忘れるかもしれない。アイズが慌てて止めようとしたが……………

「人を殺しかけておいて嗤うな犬っころ。表出ろやてめえ！」

再び怒気を纏い直したベルが叫びベートを投げ飛ばす。その光景に、思わず固まる。

強そうに見えない。見た目以前に、纏う気配が戦う者のそれとは思えなかった。なのに、酔っていたとはいえベートを投げ飛ばした!?

「っ！」

「てめ——!」

「二人共座れ」

立ち上がりかけたティオネとティオナをフィンが止める。ティオ

ナは納得がいけないというように叫んだ。

「で、でもフィン！ 酔ってもベートはLv. 5だよ!？」

「そうだね。そして、酔っていたとしても彼はベートを投げ飛ばした」
そう、そうだ。腐ってもLv. 5の、それも近接戦を得意とする
ベートを投げ飛ばした。ありえない。実は第一級冒険者？ いや、彼
のような冒険者は聞いたこともない。

「ロキ、君が言っていた追い返されてしまった治療師の名前も、ベル
だった気がするけど」

「あく、うん……門番殴り飛ばした子や。まさかベートまで投げ飛
ばすとは」

門のそばが壊れていたがあれ人が殴り飛ばされた跡だったのか。
それをやったのが、彼？

「……これは僕等が起こした不祥事を彼が看破出来ぬと手を出して
きた結果。それでもベートは納得しないだろうし、彼も多分そうだろ
うね……危なくなったら止めるとして、暫くは静観した方が良さそう
だ。【象神の詩】、君もね」

ベルが座っていた席にいた女性、アーデイがフィンの言葉に固ま
る。

「まあ止められるように待機はすべきだろう」

「そう、だね……」

フィンが席を立ち外に出る。ラウル達に待機を命じ、止めるための
要因としてガレスやテイオネ、テイオナを立たせ、リヴェリアもいざ
という時回復させるためかについていく。アーデイも。

アイズも慌てて店の外に出ると、ベルとベートが睨み合っていた。

「色々言いたいことはありませんが、まずは」

「やってくれたなてめえ……!」

「ぶっ飛ばす!」

二人は同時に相手に向かって飛び出した。

凶狼と戦うのは間違っているだろうか？

同時に駆け出した二人。ステイタスによる敏捷性能の高いベートは風が流れるように、筋力で物を言わせるベルは路面に亀裂を走らせながら地面を蹴った。

救命団随一の足を持つナックにも引けを取らないベルの速度にベートは目を見開くも対処する。

振るわれる拳。第一級が放つそれは常人にも並の上級冒険者にも視認不可能。

「おっせえー！」

しかしもつと理不尽な拳を知っているベルは直前で回避し懐に潜り込み拳を振るう。ドン！と大気を揺する音が響きベートの体が空に浮かび上がる。

「え、えええ!?」

その光景に叫ぶのは果たして誰だったのだろうか。

第一級冒険者が無名の冒険者に殴り飛ばされる光景に、誰が叫んでもおかしくない。

「っ…………てめえー！」

「……………」

ふっ飛ばされた勢いのまま地面を滑るベートは腹を押さえながらベルを睨む。ベルもまた、不用意に近づけなかった。

反応された。回避し、動揺を誘ったつもりだったが直前で後ろに飛ばれ十分な威力を与えられなかった。

「……………本気で行くぞ」

ベートはベルを殴りつける直前で、拳の速度を落としていた。それでも人を殴り飛ばすには十分だったが本気ではなかった。だが、それはベルも同じ。

両手に緑の光を纏う。これで、やりすぎても問題ない。でもその前に……………

「っー！」

高速で飛来する緑の光。詠唱がなかったことから、何らかの強化ス

キルかと思いきや飛ばした。驚愕しながらも回避し、二発目に気付く。

投げるような動作からして連続で撃てるものではない。が、二発目を追うように駆けてくるベルを見てまるごと叩き潰すと体を回転させ蹴りを放つ。

「あ……う？」

「え？」

ベートの銀靴が緑の光を吸収し、輝く。その光景にどちらもほうけ、ベートの蹴りがベルの頭に叩きつけられた。

「っ！」

悲鳴が響く。慌てて足をどけるベート。路面が碎けるほどの衝撃で叩きつけてしまった、しかも頭に、何らかの魔法を纏って。最悪な想像をしてしまうベートだったが、ベルが跳ね起きその頬を殴り付けた。

「いっ!？」

首の骨がミシリと嫌な音を立て、再びベートが吹き飛ぶ。困惑も合わさり今度は背中から地面に激突するも直ぐに跳ね起き、己の頭を押さえる。

酒が抜けた。

泥酔から素面に戻り現状を認識できないベートは困惑しながら辺りを見回す。何故自分は外に居る？

と……

「ああ？」

殴りかかってきたベルに気付き顔を歪め、顎を狙った拳を身体をそらしかわし腹を蹴り上げる。打ち上げられたベルは空中で身をひねり着地する。

「なんだ、てめえは……?　なんで俺外に……」

「記憶失うほど飲んだのか」

「記憶?　あ……」

ガシガシ頭を搔きながら、漸く思い出したのかチツと舌打ちする。「俺の発言が気に食わねえ、だから手え出したってことか。度胸のあ

るガキだ、力もある。だがそれだけだ……てめえが吠えたからって何が変わる？ 情けなく逃げ出したトマトやろ……トマ……ト」

ベートが何か気づいたように固まり、ベルが首を傾げる。

「てめえトマト野郎じゃねえか!?!」

「え、トマト野郎って僕のことだったんですか!?!」

ベートの言葉に驚愕するベル。トマト野郎さんが何者かはわからないが、ミノタウロスに殺されかけ、それを唾っていたから怒ったというのにそのトマト野郎は自分だった？

何で？

あ、でも確かにミノタウロスの血頭から浴びたし、ミノタウロス斬ったのアイズだ。傍目から見れば助けられたように見えた……ののかな？

「誰だと思ってキレたんだよ!」

「えっと……それは、知りませんが」

「見ず知らずの、誰とも知れねえ奴にキレたってかあ?」

と、ベートは不快そうに言う。

「馬鹿かてめえ。強い奴が弱い奴庇って何になる。誰かが守ってくれろと思ひ込んだ雑魚ほど使い物にならねえもんはねえ。てめえが守ろうとした誰かが、また守られると勘違いしてくたばりやがる! 雑魚は罵れ、見下せ! それが強者の特権だ!」

そのいいように顔を顰めるティオナやアイズ。それに対してベルは……

「まあそれは解ります」

「……………え?」

理解を示した。純真無垢そうな子供が、よりによってオラリオでも随一の実力差別主義のベートに共感した。

「弱い人が戦場に出たら死んじやいますもん。戦場に出るのに弱いままでもいいとするなら、罵倒して見下して殴って蹴って岩投げて踏み潰して投げ飛ばしたりするぐらいはしたくなります」

「……………そこまで言ってるねえよ」

あれ？ この見た目純朴そうな少年、ややもすればベートより過激じゃね？ と「ロキ・ファミリア」の面々は戦慄した。

「僕も何度殴られて蹴られて潰されたか！ 畜生、あの人の皮被ったオーガを超えた何かめ！」

何やら思い出したのか虚空に向かって叫ぶベル。ふうーと息を吐き落ち着かせる。

「とにかく、弱い仲間をなじろうとそれは貴方の自由です。でも、守らない理由にはならない」

「はあ？」

「というか貴方、守らないとか無理ですよ絶対。むしろ率先して守る人だ。だって雰囲気師匠に似てるもん」

「はああ？」

「でも不安になるのはわかります。あんなに強い人ですら、そうだったんですから……強くなってくれって思いますよね。まああの人は間違いなく性癖入ってるだろうけど、貴方は優しい人だ！」

「はあああ!？」

何やら好意的なベルの態度に分けが解らんと叫ぶベート。ロキは腹を抱えてゲラゲラ笑っている。

「でも死にかけた人を唾うのは駄目だ」

シン、と静まり返る。それだけの威圧感を、目の前の少年は放っていた。

「死者を唾うのは駄目だ。懸命に抗ったとて、力が足りなかった者を唾うのは許さない」

ベルの脳裏に映るのは、この世界での砂漠の出来事。懸命に戦い家族を逃してみせた戦士を笑う畜生共を見た。

「貴方は彼奴等とは違う。それは解る……解るけど、演じられるのは我慢ならない」

あの時程の怒りではない。深さは違う、しかし種類は同じ。その怒りに対し、ベートは目を細める鼻を鳴らす。

「てめえの好き嫌いなんざ知ったことか。ここはオラリオ、冒険者の街。意地を通したきや力を示せ」

「なるほど解りやすい」

意地っ張りなベートの言葉にベルは苦笑する。少なくとも嘯われていたのが自分であると解った今、ベートに対する怒りはそこまでない。面倒くせえ人だなとは思うが。

ベート自身己の失言に怒るのは当然だと思っていたし、何より嘯み付いてきた眼の前のガキをそれなりに気に入っていた。

けどどちらも、一度始めた喧嘩を、決着をつけぬまま終わらせる性格ではなかった。

一度拳を振るい合った。ならばどちらが上かまずハッキリさせる。弱肉強食の部族の教え。

己を鍛えてくれた者への敬意。

形は違えど勝者を決めるという意志は同じ。細かい話はそれからだ！

再び、先程の焼き回しのように駆け出す二人。

酔が覚め、冷静さを取り戻したベートは己の拳を避けたベルに即座に対処する。

身をひねり回避し、肘をベルに打ち込む。吹き飛ばされるベルの足を掴み地面に叩きつけ、再び持ち上げようとしてガクンと固まる。ベルが路面に指を食い込ませ、抗った。体を回転させ無理矢理手を弾くと両足を曲げ蹴りを放つ。今度はベートが吹き飛ばされた。

(こいつ、どういう力してやがる！)

パワーだけなら自分に匹敵、或いは凌駕しているかもしれない。反応速度も尋常ではない、直前まで見ながら避けた。

動きを読むのも馬鹿らしい程の反応速度を持つ奴と戦っていたのだろうか？ だからどうした、反応されたならその都度修正すればいい。

「オラアアア!!」

鞭のようになる蹴り、砲弾のように迫る拳。

『強者』と認めたが故に手加減はない。そんなものは侮辱だ。

だというのに、耐えてくる。耐えて反撃してくる。

「ああ!!」

「がっ!？」

ダメージがないわけでは無い筈だ。それでも倒れず、ベートの蹴りを踏みつけ止め、拳を連続して叩き込む。

力だけではない。耐久力も異常の一言に尽きる。常日頃から第一級冒険者に殴られ続けたのかと思うほどの『耐久』のステータス。

そのくせ避ける必要があると判断した時は確実に避ける。

闘い方がちぐはぐだ。傷付くことを恐れぬタンクタイプかと思えば自分と同じ高速戦闘のヒットアンドアウェイの戦闘スタイルも併せ持つ。

そして何より、既視感。

「フレイヤ・ファミリア」の連中と戦っているような、対人戦になれすぎた戦い方。

「っー」

「らあー!」

だがその戦い方には若干の諦め、どうせ避けられないという意志が見える。ベートの攻撃が、ではない。この少年を鍛えた何者かだろう。

そのせいで僅かに遅れる。そこをついて、蹴りを加速させる。

防御するつもりで、直前で威力が増した蹴り。防いだ腕からベキツと音がなりベルの身体が吹っ飛び壁に激突する。利き腕は折った。戦闘能力は半減では済まない。

良くやった。吠えるだけはある。だがここまで。

それだけの気概があれば直ぐにでもさらなる高みに至るだろう。今回は俺の勝ちだと瓦礫から出てきたベルの意識を刈り取る蹴りを放ち、左腕で防がれ右の拳で殴られた。

「かっ——!？」

ガードも威力を流すことも敵わぬまともな一撃。胸を打つ一撃に肺の中の空気を押し出され、折ったはずの腕に殴られるという現実には困惑し明確な隙を晒す。

「おおおおおおお!!」

その隙を逃す道理など存在しない。放たれる連撃^{ラッシュ}。一撃一撃が第

二級冒険者の上位陣ですら大ダメージを与えうる威力。ランクアップ間近の第一級冒険者とはいえ、意識が飛びかける。

負ける？ ふざけんな！

飛びかけた意識を無理やり引き戻し、拳を振るう。

「ローズ、さんのほうが……速い！」

意地と気合で放たれた拳は避けられるもしかしベルの頬と耳を切り裂く。それを無視して兎のように飛び跳ね、体の中で高速回転。

「僕の勝ちだ！」

回転エネルギーを蓄えた蹴りがベートの頭に当たり、先程の仕返しとばかりに頭を路面に減り込ませる。

ドゴオン！ と罅割れ細かい砂塵が煙のように舞う。

煙が晴れ、肩で息をしながら腰を落とすベルと地面にめり込んだまま動かないベート。

決着はついた。歓声があがる。

「うおおお！ すげえぞあのガキ！」

ヴァナルガンド 【凶 狼】を倒しやがった！

「どこのファミリアだ!？」

「おい誰か情報持つてねえのか!？」

ワイワイガヤガヤと成り行き見守っていた冒険者や一般市民が騒ぎ出す。賭け事でもしていたのか悲鳴と喜びの声が混じる。

(これが、冒険者……これがLv. 5……)

強かった。勝つには勝てたが、また勝てるかと言われれば断言できない。

自分と殴り合いが出来る者なんて数えるほどしか居なかった。もしベートが武装した状態だったら……そして、そんな彼等ですら油断ならぬダンジョンという危険地帯。そこで命を救いたいと叫ぶなら、もつと強くならなくてはいけない。

グツと握りしめた拳に力を込める。と……

「アミッド連れてきたよ〜！」

とアマゾネスの少女がアミッドを連れてきた。

「これは、ベートさん!? 一体何が…… 【フレイヤ・ファミリア】と抗争でもあったのですか!？」

「ううん、その子……………」

「え……………ベルさん？」

「……………ど、どうも」

アマゾネスがベルを指差すとアミッドはベートとベルを見比べる。
第一級冒険者と強いのは知っていたが駆け出しの少年が戦った？

少年は結構埃だらけ、頬には血と泥が混ざった汚れも見える。

「詳しく……………説明してください。今、私は冷静さを欠こうとして
います」

「ひえ」

この世界でベルを初めて恐怖させたのはモンスターでも冒険者でもなく、治癒師^{ヒーラー}だった。どこの世界も医療に携わる者達の長つて恐ろしいのかな、ベルは現実逃避気味にそんな考えを抱くのだった。

再び謝罪に行くのは間違っているだろうか？

「なるほど、自分が侮辱されているとは思わず、ミノタウロスを逃し、結果死にかけた人を笑ったのが許せず挑んだ、と……………それで？」

「え、えつと……………それだけ、です」

「それだけのはず無いでしょう。それが自分を指していたと解った後も戦いを続けたそうではないですか。ええ、殴って殴られて叩きつけられて。なぜ続けたのです？ 怒っていません、私は理由を訊いているのです」

腕を組む銀の聖女の前で正座しプルプル震える白兔。まだ幼さを残し、小柄ではあるのだが何時にも増して小さく見える。

「あのく、アミッド？ 少し良いかな？」

「後にしてください」

「……………そうするよ」

「ちよつとアミッド！ 団長が——」

「後にしてください」

「あ、ハイ」

フィンがアミッドに話しかけ、助かったと思ったたらその後のティオネもアミッドの威圧感に何も言えなくなかった。Lv. 2なのに……………と、Lv. 1のベルは思った。

「どうしましたベル？ 私は何も、なぜ生物は呼吸をするのか聞いているのではありませんよ？ どうして続けたか、その理由を言いなさい」

笑顔だった。聖女が浮かべる美しい笑顔。なのに敬称すらつけ忘れるほど怒っている。

「ごめんなさい……………」

「それは何に対しての謝罪ですか？」

「あばれ——」

て…………、言いかけ止まる。漸く俯いていた顔を上げ、アミッドの目を見たからだ。

「……………心配させて、ごめんなさい」

「……………」

その謝罪に目を瞑り、はあとため息を吐くアミッド。組んでいた腕を解き、膝を付きベルと視線を合わせる。

「貴方がL.V. 1の規格に収まらないのは知っています。ですが、第一級もまた規格外……………」

伸ばされた手にビクリと震えるベルだが大人しく受け入れる。頬を優しく撫でられた。

「……………」

「怪我は、もう塞がっているようですね」

「あ、あの……………出来ればベートさんの治療も……………私だけじゃ、多分」

経験上、岩をも砕くデコピンほどでなくとも打たれるかと身構え、予想が外れ困惑するベルを見てアミッドが呟く。それを見た眼鏡の少女が未だ路面から剥がしたベートに膝枕しながらアミッドに懇願する。

「必要ありません。怪我はしてない……………いえ、既に治療されているようですよ」

「え?」

確かに、路面が砕けるほどの威力で叩きつけられたのに血が出ていない。痣だらけになったと思った身体も、肌が覗く範囲だが痣は見えない。

「治療って、でも……………誰が……………」

「ベルさんです。この子は治療師ですから」

クシヤリとベルの頭を撫でるアミッド。

「……………え……………治療師? ベートさんと殴り合ってたその人が?」

「ダンジョンに潜り怪我人、行方不明者を探し治療する、そういった形を目指しているようです。超長文詠唱故に私には単独で行えないあり方ですね」

「……………」

ワシヤワシヤと毛並みがふわふわした兔のようなベルの頭を撫で続けるアミッド。アイズがソワソワ見ている。ベルは目を細め大人

しくされるがまま。

「どうせ自分の怪我也治すから良いと、そう考えたのでしよう」

「きゅ——」

そのまま両手で頬をガシリと掴む。力で逃げるのは簡単だが、非はコチラにあるので逃げられないベル。

「貴方は、治療の力もLv. 1としては信じられぬほどの規格外でしょう」

位階上位冒険者かが何人も存在する治療師ヒーラーの中でもLv. 2でありながら世界最高峰のアミッドが言えたことではないが。

「それに胡座をかいていないことには好感を持ちます。ですが、行き過ぎた責任感は傲慢と変わらない」

「……………」

まだ、怒っている。

至近距離の紫水晶アメジストの瞳の奥に、確かな怒りを感じる。美人を怒らせると怖いというのは何も師匠だけではなかったらしい。そういえばアマコお姉ちゃんも怖かったなあ、と現実逃避したくとも現実^は目の前だ。

「……………出来ることは、やらなくてはならないことはありません。ベートさんの言葉はたしかに不快でしょう。立ち直れない方もいるかもしれない……………それでも、貴方が怪我をしてまで止める必要はないはずです」

「……………」

「あの場で誰も言わなかった。言ったとしても、止められたのは【ロキ・ファミリア】の誰かだけ。なら止められるかもしれない自分が行く。それは素晴らしい心がけですが、やはり貴方である必要はない。ベートさんが最初から酔ってなかったら？ 武装していたら？ 貴方の強みを知っていたら？」

勝率は下がっただろう。負けていたかもしれない。相手がベートではなく、徹底的に追撃するような輩だったら目も当てられない。

「貴方の方針を考えるなら、無茶をはいけませんとは言いません。ですが、だからといって危険に飛び込んでいいわけではありません」

「……はい」

「よろしい。では、続けたことに対するお説教です」

「……………はい」

その後、街の建物や路面を壊したとしてギルドと「ガネーシャ・ファミリア」に叱られた。ギルドからはエイナが物凄く怒っていた。

ベートに勝つたと聞き、驚いていたがそれはそれ。危険な行為をしたことには変わらない。

「ガネーシャ・ファミリア」からはシャクティが。

冒険者同士のいざこざは多々あれど、街を破壊する前に止めるべきだったとアーデイも隣に座らされ叱られていた。

「も、燃え尽きてる！」

帰ってきた眷属が燃え尽きている件。

ヘステイアは真っ白……何時もより真っ白になったベルをつんつん突く。ううん、と反応するから生きている。

「どうしたんだいベル君、怒らせたら怖い美女3人にお説教を食らった兔みたいだぜ？」

「怖かったです……」

「そうかそうか。よし、ボクの胸でお泣き」

ギュツと抱きしめポンポン背中を叩いてやるヘステイア。一体ベルに何があつたのだろうか？

アーデイと喧嘩………は、ないな。どっちの性格的にも。とりあえず事情を聞いてみる。

「ロキんとこの子と喧嘩か。良くやった、とは言い難いねえ……」

ロキは嫌いだがその子供まで嫌いなわけではない。この街に住んでいれば嫌でも耳にするロキを称賛する声。しかしそれは、ロキの子供達眷属を称賛する声でもある。

彼等がこの街を守っている勢力の一つであるのはもう知ってる。

「その、明日午後に謝りに行くつもりなんです。ただ、フィンさん達も謝りたいことがあるらしく………神様にも来てほしいそうなん

ですが」

「うーん。ロキと顔を合わせるのはなあ……………ボクとロキの喧嘩で仲良くなるうとしてる子供達まで巻き込んで、なんてのは避けたいし……………」

ウンウンと唸るヘスティア。どうもロキとは気が合わないらしい。

「で、でも前は……………」

「あの時は新入りだろう？　今回は幹部だ……………どの程度鼻負してるのか、あるいは全く鼻負してないのかわからないんだ。それにあの時は、ボクよりあのアーディって子を侮辱されてた怒りが強かった」

普段なら喧嘩する程度の敵愾心も、あの場では些事になった。ヘスティアとロキが喧嘩しなかったのはそれも大きい。

「ボクはベル君に謝罪してくれるだけでいいよ。どうしても謝罪しないなら、時間と場所は用意するから伝えるよう言ってきてくれ」

「はい神様！」

そして翌日。『豊穡の女主人』に床と机の修理代を払ってから、再び【ロキ・ファミリア】のホームにやってきた。門番二人の他にこれといった特徴のない容姿の青年が立っていた。

「あ、来たつすねベルさん」

「あの、さん付けは別に……………」

「ベートさんを殴り倒すような人を呼び捨てには出来ないつすよ。案内するつす！」

歩く動きに無駄がない。流石は天下の【ロキ・ファミリア】。門を通る際の門番の態度からも、幹部もしくは準幹部だと思われる。リングル王国だと騎士になれる。すごいなー。

「な、なんすか？」

「【ロキ・ファミリア】には強い人が多いな、つて…」

「あはは。自分なんて大したことないつすよ……………」

謙遜しながらも嬉しそうな青年。なんだろう……………

(なんか、仲良くなれそう) つす)

「そう言えば自己紹介がまだだったすね。自分はラウル・ノールド。一応二軍の指揮をしてるっす」

「凄いですね！ あ、僕はベル・クラネルです」

と、お互い自己紹介した時だ。曲がり角から人が現れた。

「あ……………」

「……………あ」

アイズ・ヴァレンシユタインだ。

アイズはベルを見ると目を見開き、直ぐに泳がせる。ベルもベルで戦いに挑まれぬよう警戒し、ラウルは首を傾げる。

「……………あの。えつと……………君、強いんだね」

「あ、ありがとうございます。まあ、鍛えてますから……………」

「そっか……………」

「……………」

「……………」

どうしよう、会話が続かない。アイズは何か話題を探そうと必死だ。いや、そもそもまずすべきことが……………何だっけ？

アイズは混乱している。

「えつと……………じゃあ、戦おっか」

もう一度言おう。アイズは混乱している！

「ご、ごめんなさあああい!!」

ベルは逃げ出した！

アイズはガーンと固まる。何がいけなかったんだろう。あの時、ベートさんに好意的だったから戦いの中で仲良くなったのかと……………。

「何やってるんすかアイズさん！ 自分ら今日謝罪のために呼んだんすよ!」

謝罪。そうだ、謝罪だった。怖がらせてごめんね、と。いやまて、そもそもあの子怖がってたのか？ ベートさんとも戦えるのに。

一旦状況を整理しよう。彼はベートさんと殴り合える。なら、ミノ

タウロスに恐れるなんてことはない。じゃああの時自分は余計なことをしてしまった……あれ、トマト野郎と揶揄されるほど真つ赤になったミノタウロスの鮮血、あれ……私のせいじゃない？

つまりベル・クラネル少年のアイズの評価はいきなりミノタウロスの血をぶっかけてきた失礼な女……。

「……………っ！」

さらなるショックがアイズを襲う。なんてこった、嫌われてたっておかしくないや。泣けてくる。

とりあえず追わねば！

「ふう、ここまでくれば……どこ、どこ……………あ」

「ああ？」

と、中庭らしき場所でキョロキョロしていると見知った顔に出くわした。ベートだ。

「てめえなんで……………いや、そうか。昨日の……………」

ベルを見て不機嫌そうに顔を歪めるベートにベルはなんだか申し訳ない気持ちになる。そそくさ去ろうとすると、ベートがおい、と呼び止めた。

「……………悪い事したとか思ってたんじゃねえぞ」

ベルをベンチに座らせ、隣のベンチにドカッと乱暴に座り込んだベートは目を合わせず言う。

「てめえが俺のやり方を気に入らねえって喧嘩売って、俺がてめえの言い分がうざって買って買った喧嘩だ。それともなんだあ？ あの時の考えは嘘でした、なんて言うつもりか？」

「いいえ」

それにはオドオドした態度もなりを潜ませハッキリと返した。ベートはハツ、と鼻で笑う。

「俺もだ。だから、あれは俺が負けてお前が勝った。その結果があるだけだ……………次は負けねえけどな」

「次も僕が勝ちます」

「吠えんな……いや、今回負けたのは俺か」

「でも、ベートさんが初めから本気だったら解らなかつたです」

「少なくとも、本気で潰す気だった。這い上がるまでもなくお前が強かった、それだけだ」

強情っぱり。勝てたかもしれないと言われて喜ばないのか？ 喜

ばないんだろなあ。なんかこの街師匠に似てる人多いな。

「……………ベルです」

「あ？」

「ベル・クラネル。トマト野郎じゃないですよ……………」

「……………ベート・ローガだ。てめえとはやり方は合わねえが、まあ話は出来そうだ」

そんな男達のやり取りを見て、ワナワナ震える人影が一つ。

(な、なな……………ななな！)

仲良くなってる!?

何で、どうして!?! 罵倒してたくせに！ 殴り合ってたくせに！

私のほうが先に仲良くなりたかつたのに泥棒狼！

などと混乱するあまり自分でも何を言ってるかわからない、アイズ・ヴァレンシユタインだ。

(やつぱり、戦って仲良くなったの?)

そういえばロキが夕日の中で殴り合ってた築く友情もあるのだと言ってた気がする。夜だったけど、それだろうか？ 自分も仲良くなるためにはやはり戦うしか？

「うん。よし……………行こう」

「何をしてるんだお前は」

いぎ、と勇み足で駆け寄ろうとしたアイズだったが不穏な気配を察知したのかりヴェリアがアイズの襟を掴んで止める。

不味いところを見られたと顔を青くするアイズと、ベートとベルを見てはあ、と頭を抱える。

「アイズ、お前は話が終わるまで部屋で待機してるか、外に行ってる」

「!!」

再びガーンとショックを受けるアイズ。首元を捕まれ項垂れるその姿は猫にも見える。

リヴェリアを怒らせると後が怖い。アイズはトボトボ自室に向かって歩いていった。

黄昏の館に来たのは間違っているだろうか？

「ところで……………」

「はい」

「昨日言ってたあれは実体験か？」

恐らくは弱いままなら罵倒して見下して殴って蹴って岩投げて踏み潰して投げ飛ばす辺だろう。

「はい、実体験です」

ベルは顔を青くしながら答えた。

「……………そうか」

「取り入れますか？」

「……………彼奴等は雑魚だが屑じゃねえ。反感だけ抱くくせにケツ蹴られなきゃ何もしねえ、走りもしねえなんてことはねえよ」

てめえはどうだったんだあ？ と聞いてくるベート。

「確かに、僕は7歳の頃はサボるなって怒られてたなあ。半日も走り続けるなんてあの頃には無理だったし」

「それは普通にお前の師匠がおかしいな」

「でも、おかげで強くなれました。僕、物心ついた頃から両親がいないくって、ちよつとだけお母さんってこんな感じかなって……………」

「普通、母親は子供に岩を投げねえよ」

照れくさいというように頬をかくベルだが7歳からかは知らんがやらされたことを考えると親子の絆を夢想するのは間違っているとは断言できる。

しかし恐ろしいし苦手な部分もあるが慕っていたベルは食って掛かる。

「そ、そんな事ありませんよ！ 探せば子供をモンスターの巣が山程ある森に放り込んだり岩を括り付けて嵐の海に投げ込む母親だっているかもー！」

「居てたまるか、んな母親！」

それは母親とは言わない。悪魔とか魔王とか、そんなちやちなもんじゃねえ。もっと恐ろしいものの片鱗を味わった気分だ。

「まあそんな生活すりやお前の強さも納得だ。納得………まあ納得してやる。ようは恩恵刻む以前から規格外つてことだ。よく死ななかつたな」

「師匠の治癒魔法は千切れかけた腕もくつつけられるらしいですし」らしい、なら………少なくともこいつは千切れてないのか？ 気絶してる間に四肢を別人のとり替えられて無かつたことにされたんじゃないだろうな、とベルの過去が心配になるベート。と………

「ここに居たか。ラウルが慌てていたぞ………まあ、アイズの失言のせいらしいな。済まなかつた」

「よく見るベル、これが母親だ」

「………お母さん？」

「………」

普段から母親扱いされることはあれど眼の前の青年からそう言われるのは初めてだ。母親ではないというのに何だそのこれが常識だ、みたいな言い方は。少年もキラキラした目で見てくるな。悪意がないから怒れない。

と、声をかけたエルフ、リヴェリアは困ったように唸る。

「こいつの母親像がおかしいんだよ。皆にママママ言われてるババアが教えてやれ」

「おかしい？」

「モンスターの住処や嵐の海に投げ込まれんのが普通だと思ってやがる」

「………苦勞しているな」

「く、苦勞はして来ましたが結果に繋がって………！」

「それこそ結果論だろう。まさか結果に繋がったからよし、などとしているわけではないだろうな？」

「？ いえ、毎回終わった後まず殴りに行きますよ。まあ殴り返されるんですけどね………」

ベートと渡り合ったベルを殴り返せる師匠。Lv. 5、或いは6級。もしくは7年前のような『最強』の生き残り。

そうなると彼はかの『大神』か『女神』の系譜………いや、流石に

考えすぎか。

「ベートはどうせ謝らんだろうからと呼んでなかったが、確執はなくなったらしい。同行するか？」

「……………もうすんだ」

ベートはそう言っただけで立ち去った。ベルが手をヒラヒラ振るのを横目で見ても、フンと鼻を鳴らした。

「では、案内しよう」

「はい、お願いします」

素直な子だ。ベートの発言も譜面通りに受け取らず、本質を見抜き懐いている。

元々は「ロキ・ファミリア」に顔を出していたということだが、彼が来てくれればベートと他の団員との架け橋になったかもしれない。追いついた門番の調教期間をもう少し伸ばすことにした。

「ああそれと、ベートはああ言っていたが私を母親ママとは呼ぶなよ？」

リヴェリアの案内のもと、団長室へたどり着く。リヴェリアがノックすると入ってくれ、と声がかかった。

「昨日ぶりだね、ベル・クラネル。来てくれてありがとう」

「こんにちは」

部屋にはフィンの他にガレスやロキが居た。

「ああ。ベルと呼ばせてもらっても？」

「はい、構いません！」

ベル・クラネルの印象は、人が良い。いや、冒険者という職業を思えば良すぎる、といった感じだろう。

親しげな笑みの中で、フィンは冷静にベルを観察する。都市外からきた得物なしとはいえベートをくだせる冒険者。しかもLv.1と来た。

ありえない。都市外で鍛え、コンバージョン改宗させたと言われたほうがまだ納得できる。

「今日は神ヘステイアは来てくれなかったのかな？」

そうなるへとヘスティアは外部ファミリアと繋がっていることになる。ロキはそれはないやろ、と言っていたが。フィン・ディムナは神の感覚を信用こそすれ、信頼はしない。神とて地上では零能にして、心を持つ。他者の裁量は予測するものであつて信頼するものではない。

まあその場合様々な「ファミリア」に顔を出したことが説明つかないが。

「はい、ロキ様と口喧嘩して仲直りを邪魔しちゃうかも、つて……必要ないけど謝罪したいなら、時間と場所を言ってくれば、時間をとるそうです」

「そうか。なら、謝罪は別の機会にさせてもらうよ。今は不要だと言ってくれた女神に感謝を……そして、門番の件、ミノタウロスの件、昨夜のベートの件。本当に申し訳なかった」

フィンはそう言つて頭を下げ、ベルが慌てる。

「だ、大丈夫ですよ！ 門番もベートさんもぶっ飛ばしましたし、ミノタウロスのあれはブーツとしてた僕にも非が……それに、ベートさんとは仲直り出来ました」

「……………やっぱり冒険者なんだなあ」

「……………」

拳で解決するあたり、冒険者らしい冒険者だ。見た目は純朴で歡樂街に迷い込んだら年上の女達に食われそうな容姿なのに。

「とはいえ僕達が君に迷惑をかけたのは事実。ギルドから通達が来てると思うけど、街の修理費はこちらが負担しよう」

「い、いいんですか!？」

正直助かるとベルは喜んだ。フィンの目から見ても、その気持ちに嘘はないだろう。

「昨日の件の謝意だ。ミノタウロスと、門番の件はまた別……そうだね、君ほどの強さなら上層じや経験値エクセリアがたまらないだろう？ かと言つて、知識のないまま中層は危険だ」

モンスターだけではなく、場所そのものが冒険者に牙を向いてくることもある。なんの知識もなしで向かうのは第一級冒険者並の戦闘

能力を持っていたとしても避けるべきだ。

「どうだろう、流石に遠征に同行させるかはまだ決められないが、何度か僕達と潜ってみるのは」

とはいえ、これは昨日アーデイと居たところを見るに大きな旨味とは言えないだろう。本質はフィンがベルを見定めたいのが大きい。

「その、同行していいんですか？」

「謝罪のつもりだけど、こちらにも得があるからね」

あの強さで治療師^{ヒーラー}。戦場を駆ける治療師^{ヒーラー}なんて彼ぐらいしか居ないだろう。しかもあれだけ殴り合っていた二人が無傷。

恐らくあの緑の光が彼の治癒魔法。超短文……あるいは世界初の無詠唱であるの精度。正直欲しい。追いついた門番、しばらく減給したい。

(うちに入ってくれたら、見定める時間なんていくらでも取れたけど……)

田舎から出てきたばかりのあどけない少年。しかしその力はオリオの中でも上位に食い込み、冒険者らしくない少年かと思えば時折冒険者らしい口調になる。

「門番の件は……そうだね、改^{コンバージョン}宗が行える一年後……いや、必要なさそうだ」

言いかけ、申し訳なさそうな顔をするベルに首を降る。

「僕は神様のところで……いいえ、神様のところがいいです」
「……………そうか、残念だよ」

【ロキ・ファミア】という栄光をまるで欲していない。自分には出来ないその生き方に、眩しさすら覚える。とはいえ……

「ところで、君。あの強さ本当に何処かの【ファミア】に所属していなかったのかい？」

聞くべきことは聞くが。

「はい、神様……ヘステイア様が僕の初めての主神です」

ロキが黙ってみている。嘘はない。

一体どんな修行をすればあれだけの強さを得るのか興味は尽きないが、これ以上借りを作るわけにもいかない。

「なら、門番の件の謝罪はまた改めて。時間を取らせて悪かったね………リヴェリア、頼めるかい？」

「ああ……ではベル・クラネル。ついてきてくれ」

「あ、はい！」

『黄昏の館』から出て廃教会に向かうベル。不意に足を止める。

「っ？ また視線」

キヨロキヨロ周囲を見回すも、やはり人影は見えない。『黄昏の館』内では昨晚酒場にいた者達が畏敬、居なかつた者達が疑問、遠くで金髪剣士が凝視していたが、それらとは違う。もっと、こう………粘着くような舐め回されるような………。

あつたばかりのお姉ちゃん呼びを強要してきたスズ姉のあれをより濃くした感じ。

「………？」

一体どこから？

視線の犯人を探ろうとすると直ぐに切れる。来るタイミングもバラバラで、警戒を緩めた瞬間にまた来る。

「………」

目を閉じ、生き物の魔力を薄く広く伸ばし反応を探知する。やはり不自然な動きをしている人影は………

「………あれ？」

「あ、おっい！ ベルくん！」

と、アーデイがベルを見つけ駆け寄ってきた。ベルは足元をじつと不思議そうに見つめていた。

「どうしたの？」

「なんか地下から大型の生き物の気配が……」

「あ、まあモンスターも地上に結構住み着いてるからね。人が踏み込む場所は退治してるんだけど………大きさはどのくらい？」

「えっと………6、7メドルぐらいが複数」

「………調査しなきゃ」

案内して、とアーデイと地下水路へと向かった。

入り口は少し離れた場所にあったので、改めて探り直した。

「このすぐ向こうです」

「ん？ うくん、地図によるとこの向こうに大型のモンスターを隠す部屋ないんだけどな」

眼の前には壁。この壁の向こうは地図上では土の中。ベルが嘘を付くとは思えないし、となるとこの向こうは……………。

「仕方ない、お姉ちゃんに怒られるかもしれないけど……………モンスターが巣にしてたら危ないし壊そう」

「解りました！」

「あ、待って躊躇いがな——!!」

ボガアン！ と壁が破壊される。やはり奥には空間があり、緑の蛇のようなモンスターが爆音に起こされたのかベル達の方に鎌首をもたげた。

花を千切るのは間違っているだろうか？

顔のない蛇、とても言おうか。

緑の長い体にひまわりの種のような顔。目も口も鼻も見当たらない。

「新種？ つ、来るよ！」

迫りくる新種にアーデイが剣を抜きベルが拳を構える。

ドツ！ と剣の腹で一撃を受ける。

強い衝撃、明らかに中層、下層クラスの攻撃力。

「らあー！」

ゴツ！ と伸び切った体に飛び跳ね接近したベルの拳が叩き込まれ、大きく仰け反る。殴られた箇所は凹み、急激な変形に耐えられなかったのか皮膚の一部が裂けている。

「かった!？」

逆に言えば、その程度のダメージしか受けていない。第一級のベルトをして力だけなら己を凌駕すると言わしめたベルの拳にもダメージを受けるほどの耐久。

赤くなつた拳をブンブン振るうベル。

「うわ!!」

己の体を鞭のようにならせベルに叩きつける。空中では踏ん張ることもできず石の柱を数本砕きながら吹き飛んでいく。

「いたた……硬いな、結構」

瓦礫をどけ埃を払いながら立ち上がるベル。己の拳を見つめる。

皮は破けていないが、内出血ぐらいはしてるかもしれない。と……

『オ、オオオオオオ!!』

ベルに殴られた個体の頭にピツと線が走り、咲いた。呼応するように闇の奥から方向が響き花が現れる。合計、7匹。

「花？ ……蛇じゃなかった」

アーデイの言う通り、顔のない蛇かと思っていたモンスターの正体は長く太い曲がる莖を持った植物型モンスター。よくよく見れば尾を持たず、体の末端には根のようなものがあり、そこから伸びる蔓も

そのモンスターが植物であると言っているようだ。

花の色は毒々しい極彩色。

「はっー」

振るわれた蔓を切り払い、本体にも斬りかかる。ザグリと大きな傷が付き食人花は悲鳴を上げる。

「斬撃は通る……ベル君！」

サポートをお願い！ そう言おうとした瞬間、食人花達は一斉にベルへと接近する。

「!?」

突然の行動にアーディの反応が遅れる。己に決定打を与えられないベルを狙った？ モンスターが？

いや、下の方ならその手の知恵を手にするが………！

「よし………」

手の内出血を治癒魔法で癒やししながら、ベルは迫りくるモンスター達を一瞥する。

「打撃に対する耐性が異様に高い。それ以外のスペックは、ベルの格下。体が大きく重い分、体当たりの威力はまああるのだろうが、ベルにとって問題はない。」

最初の1匹を踏みつけ2匹目を蹴り上げ3匹目、4匹目を肘で殴りその勢いで回転し5匹目にぶつけ、6匹目を掴み2匹に叩きつけ最後の1匹の上顎を掴み引き千切る。

「……千切ろう」

殴られた付近がやはり割けていた。その付近を両手で掴み、左右に力を込める。ブチブチと傷が広がり、食人花の体が裂けた。

感覚をつかんだのか、次からは傷に片手を突っ込み強引に引きちぎる。

ブチブチミチミチと嫌な音と食人花の絶叫が広間に響きアーディがうわあ、と声を漏らした。

悲鳴も消え、素手にて引き千切られたモンスターの死骸が広間に転がる。

「ふう………」

「……………お疲れ、ベル君。私、お姉ちゃん達呼んでくるからここ見張っててもらえるかな?」

一仕事した、というように額を拭うベルにアーデイが呆れたように言う。

「僕が呼んで来ましようか?」

「ううん、ここにいて。絶対居て……水持つてくるから、自分の姿を良く見て」

素手で超大型級のモンスターを引き千切ったため、血だらけだった。因みに血の色は紫だ。

「新種だな……しかしこれは、どういう倒し方をしたんだ?」

「ベル君が素手で引き千切ったよ」

アーデイが連れてきた「ガネーシャ・ファミリア」の団員達がモンスターの死骸を回収していった。シャクティはその異様な殺され方に疑問を持つとアーデイが教えてくれた。

濡らした布で血を拭いているベルをなんとも言えない顔で見つめるシャクティ。

「ここって貯水槽? 何年も前に埋め立てられたことになってるけど」

「ああ、とはいえ当時杜撰な仕事をしている職人達も多くいたようだ。それを利用されたのだろう。問題は……」

「どこから運んだか、だよねえ」

「? ダンジョンからじゃないんですか?」

「そうだろうよ。で、どうやって俺達にバレず。それが問題だ……」
と、顔に傷のある男が会話に入ってくる。確か、ハシャーナという

名前だった。

「団長、俺達が気付けねえダンジョンからモンスターを連れてくる方法、あるいはルートがあるとしたらあの件も」

「口を慎め。ここには部外者もいる」

「フェルの件といい、俺としては教えてやっていいと思いますけどね」

フェル？ どうしてここで彼女の名前が出てくるのだろう。確かにモンスターだが。

「あの、そもそもダンジョンから持ってきたんですか？ 地上のモンスターの可能性も」

「地上のモンスターは繁殖の過程で弱体化する。それに、この辺のモンスターじゃねえ以上どっかから俺達に気付かれないように引き入れたって事だ」

この辺りで確認されたことがない以上、たまたま迷い込んだとは思えない。地上のモンスターにしては強い。やはりどうやってかは知らないがダンジョンから連れてきたと考えるのが妥当だろう。

「このタイミング……狙いは怪物モンスター・フィリア祭か？」

「モンスターフィリア？」

「ああ、坊主は来たばかりだもんなあ」

ハシャーナが説明してくれる。

モンスターの調教テイムを見世物とする祭だそうだ。発案はギルド。

モンスターを調教テイムしたものは調教師と呼ばれ、フェルを連れてるべしもこれに該当する。

「モンスターに忌避感持つて調教テイムは見ないって奴でも屋台の飯食ったりするからな。神月祭やグラランド・デイ、降誕祭なんかに比べりや歴史は浅いが人気なら負けてねえ」

主催は「ガネーシャ・ファミリア」だからか、ハシャーナは自慢するようにベルの頭をグシャグシャと撫でる。

「何なら参加するか？ 調教師テイマーとして人気勝負でもしようじゃねえか」

「うくん。ハシャーナとベル君じゃ、ベル君の方が圧倒的人気になりそうだけどなあ」

「おい……」

「お前は顔が怖いからな。クラネルは平気なのか？」

「え？ やだなあシャクテイさん、怖いっていうのはなんの宣言もななく人を谷底に落とす人を言うんですよ」

それは怖いな、と笑いでも求めていたのかもしれないが普通に引い

た。ベルはあれ？ と首を傾げる。どうやらはずしたらしい。

「そ、それにハシャーナさんが怖かったら僕の所属していた救命団はオラリオに近づいただけで憲兵が出動しちやいますって」

「だからどんな救命団なのさ……」

アーデイが呆れる。ベルの脳裏では幼いベルがガチ泣きした強面集団の顔が思い浮かぶ。

「僕はあの人達に人は顔で判断できないってことを教わったんです。だから、ハシャーナさんも怖くありませんよ」

「はっはっは！ いいな坊主、気に入った！ まだ18階層には行つてねえんだろ？ 俺があそこ案内してやるよ、坊主はカモにされちまいそうだしな！」

「え〜！ 私がベル君を案内しようと思ってるのに、横取りだよ！」

「……結局ハシャーナが強面であることを否定はしないんだな」

と、シャクティは呟いたが生憎と誰にも聞かれなかった。

「18階層になにかあるんですか？」

「リヴィラの街だ。ダンジョン内に存在する街……救命活動を方針とするお前にはいずれ必要になるであろう場所だな」

ダンジョンの中に、街？ とベルは困惑する。なんでも、唯一モンスターが生まれない階層なのだから。とはいえ下や上の階層から18階層に存在する緑の楽園を求めてやってきたモンスターは居るらしいが。

「休憩地点ってことですね。覚えとこ」

「おう、酒場もまた地上とは違った雰囲気だな」

「ただ、地上より物価が桁違いに高い。足元に見られないような気をつけろ」

シャクティの忠告にはい、と答えるベル。妹に似て素直な性格に思わず笑みが浮かぶ。

「おお、力と耐久のアビリティが50ぐらい上がってるぜベル君！」

「本当ですか!？」

「勿論だとも。ベル君が戦ったっていう新種が硬かったおかげだね」

あのモンスター、生息階層はどこなんだろう？ 皮膚がドロップしたら砂を詰めてサンドバッグに出来ないだろうか？

「推定下層級なんだって？ ベル君がアビリティあげるにはそこまで潜らなきゃならなさそうだ」

「でも、地上に運んでオラリオの地下に隠されていたのがあれだけとは限らないらしいですよ」

「探すのかい？」

「うくん。シャクティさん達には探す過程で壁を破壊されてはかなわん、って……これまでの水路図と現在のを比べて探して見るそうです」

それでも全てを見つけれられるとは限らないから、祭りの当日は街の見回りを増やすらしい。

「ふくん。ベル君に見つきりさえしなければ、不意を襲えたかもただど、その黒幕もついてないね！」

あはは、と笑うヘスティアだが内心ちよつと慌てていた。

ベルのスキルもあるだろうが、これだけ上がるということはそれだけ力と耐久に受けた影響があるということ。

中層域のモンスターならワンパンらしいが、今後拳一つでは対処できないモンスターが増えてきたら……。

「よし、以前言ってたナイフの心当たり、たずねてみるよ！」

「本当ですか!？」

「もちろん！ というわけで、暫く留守にするから戸締まりはしっかりとするんだよ？」

「はいー」

祭の日に手伝うのは間違っているだろうか？

オラリオには多くの神々が集う。

迷宮都市故に殆どが探索系「ファミリア」。しかしそんな探索系に必要な薬、武器を作る、または魔石製品を開発、販売する医療、薬品、鍛冶、商売と様々な「ファミリア」が存在し、様々なコミュニティを持つ。

そんな神々が方針関係なく集まる『神の宴』。

今回の主催者はガネーシャのため、「ガネーシャ・ファミリア」の拠点『アイアム・ガネーシャ』。

巨大なガネーシャ像がそのまま「ガネーシャ・ファミリア」団員達の住居。入り口は胡座をかいたガネーシャの股間だ。

『本日はよく集まってくれた皆の者！俺がガネーシャである！今回の宴もこれほどの同郷者に出席して頂きガネーシャ超感激！愛しているぞお前達！さて、積もる話はあるが、今年も例年通り三日後にはファイア祭を開催するにあたり、みな「ファミリア」にはどうかご協力をお願いいたしたく——』

ガネーシャの大きな肉声が響き渡るが皆談笑しながら聞き流す。
が……………

『そしてえ！本日地下にて発見された新種のモンスター！ダンジョンより運んだ方法、数も不明！これが祭りの際解き放たれる可能性がある！』

しかし聴き逃がせない言葉にざわりと動揺が走り皆がガネーシャの言葉に反応する。

『打撃に強く、無手で倒すのは第一級でも厳しい！眷属達を武装させて警備を手伝ってくれ！モンスターを倒した「ファミリア」には俺から報奨金も払おう！勿論、市民を優先してくれたならな！』

「おお、流石ガネーシャ！」

「パネエつすガネーシャさん！」

「ガネーシャ！ガネーシャ！」

『うむ、皆やる気でガネーシャ感激！』

「相変わらず元気だなあ……………」

「というか無手で倒すのはきついつて、ベル君今日ナイフすら持ってなかつた気がするんだけど？ まあベル君だしと思っておこう。」

「それよりごっはんごっはん♪」

「ヒョイヒョイと食材をタッパーに入れていくヘスティア。」

「はいヘスティア様、台を持ってきましたよ」

「おおアーデイ君。ありがとう！」

「いえいえ」

ヘスティアがお礼を言うのと台を持ってきてくれたアーデイは去っていった。変わりに呆れた様子の女神が一人。

「何やってるのよヘスティア」

「あ、ヘファイストス！」

男装でもすれば貴族子女でさえ虜にしそうな凛とした顔立ちを眼帯で隠した麗人。

ヘスティアとは付き合いの長い神友であり、地上に降りたばかりの世話をしてくれた女神だ。まあそのヘスティアが明日から本気出すとか言い出して追い出したのだが。

それでも教会の地下を与えたりバイト先を紹介したりとヘスティアにかなり甘いが。

「久し振りね。そんな姿、見たくなかったけど」

魔石灯の光を浴び煌めく紅色の髪を見て相変わらず綺麗な髪だなあと思いつつ、ヘスティアは嬉しそうに彼女に駆け寄る。

「いやまあ良かった。やっぱり来てると思ってたよ」

「何よ、お金なら貸さないわよ？」

「し、失敬な！ ベル君の稼ぎを甘く見るなよ。今回だって……………」

地下のモンスター発見の功績で【ガネーシャ・ファミリア】から、と言いかけて慌てて口を抑えるヘスティア。これは秘匿事項だった。何者かがベルを狙うかもしれないからだ。

「今回だって、何よ？」

「こ、今回だってドレス代節約してるし〜?」
「……………」

呆れたような目で見るヘファイストス。と、不意に思い出したかのよう
ように言う。

「でもそんなにお金が溜まつてるなら、自分で紹介していてなんだけ
どもう少しちゃんとした宿に泊まったほうが良いわ」

「どうして?」

「さつきガネーシャの言っていたモンスター……地上に持ち込んだの
が闇派閥イザイルスの残党なんじゃないかって皆噂してるの」

「闇派閥イザイルスって、オラリオで昔暴れてたっていう?」

秩序を嫌う者達。混沌を望む邪神達かみがみに率いられた過激集団。

その邪神達も平穏を嫌悪する者から、地上で国規模のモンスターと
の戦いが見たい者、司る権能に従い人を殺す生業を補助する者、一度
滅んだ秩序を新たに組み直したい者から、果は暇潰しやゲーム感覚で
やる者と千差万別の目的であったが、その主な行動方針はオラリオの
壊滅。再びモンスターが地上に進出する世界の再来。

「7年前も多くのモンスターを率いてたし、皆結構ピリピリしてるわ
よ?」

その言葉に改めて周囲を見回せば、なるほどにこやかな笑みの下で
探り合いをしている光景が目にとまる。

「うわ、あれデメテルじゃないか。あんなに苛立ってるのはじめてみ
たぜ」

「彼女の眷属は都市外に出ることが多いからね。でも地下では繋がつ
てる場所もある。戦闘員がいなくて、「ガネーシャ・ファミリア」の対
応も遅れる………早めに解決してほしいのよ」

とても美しい笑みを浮かべながらも付き合っているオリユンポス
出身者達の何割かは気付ける大地の女神の警戒心。普段優しい女ほ
ど、怒らせて怖いものはない。

「今話してるのは………デュオニユソス? 地上じゃ丸くなつ
たって聞いてたけど」

「そうよね。私もてつきり闇派閥イザイルスの邪神として行動するのかと思つて

たからビツクリ。7年前といい、オラリオのために尽力してるのよ」「ふくん？ まあ病気が治ったならボクから言うことはないけどさ」デュオニユソスの天界での病気と称される行動を思い出しながら言うヘステイア。まあ神々を唆し殺し合いをさせていたロキも下界では善神の一人として数えられてるし。

「まあとにかく、物騒な世の中だから貴方も気をつけなさい」

と、話を切り上げようとするヘファイストス。ヘステイアはここに来た本来の目的を思い出し慌てて引き止める。

「待ってくれヘファイストス！ 今日君に頼みがあつたんだ！」

色々助けられていて、本当に厚かましいとは思う。それでも、ベルの力になりたいのだ。

「おお狼^{ウルフラビット} 兎、今日もダンジョンがえりか？」

「狼の兄ちゃんこんにちわ〜！」

巨大狼を背負つて「ガネーシャ・ファミリア」とダンジョンを行き来する兎のような少年。最初はぎよつとしていた住人もなれてしまえば問題ない。まあモンスターであるフェルを怖がってはいるが、「ガネーシャ・ファミリア」の存在もあつてか怯えない者も数割いる。

ベル自体は怪我や病気を治してくれる好青年ならぬ好少年だし。

「おおベル、今帰りか？」

「あ、ミアハ様」

「ワフ」

「うむ、フェルも元気そうだな」

ミアハに撫でられ目を細めるフェル。この神は割と最初からこんな感じ。怖くないのかと聞けば、ダンジョンのモンスターとは気配が異なるらしい。オラリオの民が受け入れたのが早いのも、その辺りが関係しているとか。

「聞いているぞ？ この辺りでよく治療をしてやっていると」

「アミッドさんには怒られちゃいましたけどね、他の医療系、薬品商業系の【ファミリア】の仕事を奪うことになる、って」

「なに、彼奴も本気で言っているわけではないだろう。それこそ、アミッドとて行うこともあるからな」

休日でも人を癒し、今は休日だからと代金を受け取らない。

「やっぱり優しい人ですね」

「うむ。同時に大手の医薬【ファミリア】の団長でもある。だから無体を働く者も少ない。だがベル、お前は零細【ファミリア】の唯一の団員、無償で奉仕を当たり前のようにしろと、前例があるゆえに言ってくる者もいるだろう。アミッドはそれを心配しているのだ」

「大丈夫です！ 余裕があるのにただにしろって言う人は殴り飛ばしますから！」

「うむ、その意気だ」

その意気かなあ？ と周りの誰もが思った。

「そういえばミアハ様、神様を知りませんか？ 神様達のパーティーに行った日から、帰ってこないんです」

「ふむ、ヘスティアが？ 生憎と私は神の宴には参加しなかったから………力になれずすまない」

「い、いえそんな！」

その頃のヘスティアは、神友ヘファイストスに土下座していた。

「何時までそうしてるのよ。そこでそうやって虫みたいに丸まられると集中力が落ちるんだけど」

呆れてため息を吐くヘファイストスだが、ヘスティアは動かない。

「はあ………あのねヘスティア。何度も言うけど【ヘファイストス・ファミリア】の上級鍛冶師スミスの武具は最高品質。性能も値段も一流なのよ」

自慢ではなく、純然たる事実として告げるヘファイストス。

「子供達が血と汗を流して造り上げる武具。それを友神の誼で格安で譲るなんて出来るわけないでしょう？」

それがヘスティアがヘファイストスに頼み込んできたこと。ガネーシヤの開催した宴から2日、ずっとこの体勢で動かない。何が彼

女をそうまでさせるのか。

因みにこの土下座なるポーズはどんなことも許してもらえてどんな頼み事も聞いてもらえる最終奥義としてタケミカヅチがヘステイアに教えたらしい。何教えてんだあいつ。

「……ヘステイア、教えてちょうだい。どうして貴方がそこまでするのか……」

我ながら甘いと思いつつも、このままでは仕事に手が付かないと内心の言い訳を用意しヘステイアに尋ねる。

「あの子の力になりたいんだ！ あの子は、憧れている人達のように人を救える、そんな存在になろうとしている。そのために、ボクがしてやれることをしてあげたいんだ。何もできないのは、嫌なんだよ……」

「……………」

本気、なのだろう。これは梃子でも動かない。

ヘフアイストスはあ、とため息を吐いて立ち上がる。

「もう、仕方ないわね」

「ヘフアイストス？」

「何百年掛かろうと、お金は返してもらおうわよ？」

「もちろんだよ！」

「……………」

「ベルさん？ 先程からどうしたのですか？」

モンスター・ファイリア

怪物 祭当日。ギルド職員も忙しくなるとハシヤーナから聞いていたベルは換金などの作業も邪魔になると考えダンジョンにいかず街をふらついていたらディアンケヒトに出店を手伝えと言われて手伝っていた。

オラリオーの治癒師であるアマッドヒーラーという姿が目撃されるだけで得になるだろう、と金をなるべく払わないつもりのディアンケヒトと異なりアマッドは後で別口で用意してくれるらしい。

「ああすいません、お手伝い中なのに」

「気にしないでください。祭り事の際は冒険者の怪我人は減ります。調教師テイマーの方か、人が多く集まり起きた喧嘩の怪我人は増えますけどね」

「そうなんですか」

「……今年は、『ガネーシャ・ファミリア』の方が見つけたというモンスタースターの不安要素がありますが」

と、アミツドの言葉にベルは目を細める。

「アーデイさんから聞きました、手を怪我するほどの相手をわざわざ素手で倒したそうですね」

「――」

ギクリと身を竦ませるベル。アミツドははあ、とため息を吐く。

「別に怒りません。ただ、今は『ガネーシャ・ファミリア』も見回ってくれています。わざわざ無茶をしないでくださいね」

「はい」

「はい、いい返事です……」

とベルの頭を撫でるアミツド。

あのモンスターは打撃にこそ強いが斬撃に対する耐性は殆ど無い。武装している限りLv. 3程度でも十分対処できるだろう。

ギルドや「ガネーシャ・ファミリア」でさえ全容を測りかねている入り組んだダイダロス通り。その地下……

蠢く2種類の影。うち一つが壁を溶かし道を作る。

下水道を通り、人通りの多い場所の下は見張りがいるため仕方なく人気のない場所を目指し移動する。

悪意はゆっくり広がり始めた。

祭りで襲われるのは間違っているだろうか？

祭の空気に当てられ普段は買わない少し高い薬も買っていく客。中には逆に安くしろと言ってくる者も居る。

ダンジョンに潜らない臆病者、怪物と戦ってやっている自分達に奉仕しろだの言う輩はベルの握手で彼我の差を理解し逃げていく。

「また【ソーマ・ファミリア】……ほんと、毎年毎年懲りないですよ
ね」

「そうなんですか？」

「【ソーマ・ファミリア】なる【ファミリア】の団員達を追い返したベルは店員の言葉に首を傾げる。

何でも何時も金稼ぎに奔走しており、犯罪ギリギリの行為も目に余る……何なら裏で犯罪行為もしているのではという噂が立つほどの素行の悪さだとか。

「大変なんですね」

「今年は君がいてくれるから対処が楽だよ」

と、エルフのお姉さんが頭を撫でる。他種族との接触を嫌うとされるエルフだが、それにも個人差がある。彼女は比較的寛容なようだ。

「はい、これ」

「おおお……!？」

へファイストスから手渡された小型のケースにヘステイアは感嘆の息を漏らす。目の下に隈を作りながらも彼女の顔は輝いていた。

「要望には応えられたかしら？」

「十分十分！ 文句なんてあるわけない！」

箱の中身は漆黒の鞘に収められた漆黒の柄を持つ短刀。上から下まで黒尽くめの漆黒のナイフだった。

刃の隅々に刻まれた複雑な刻印は【ヒエログリフ神聖文字】。

「いい、ヘステイア？ よく聞きなさい。このナイフはあんたが

【神聖文字】^{ヒエログリフ}を刻んだ通り、「ステイタス」が発生している。生きているのよ、この武器は」

つまり『神の恩恵』^{フアルナ}を授かった子供達^{眷属達}と同じ。装備者が獲得した【経験値】^{エクセリア}を糧にすることで進化する武器。

ナイフと同じ、ヘステイアの恩恵を授かった者のみに扱うことを許された、それ以外の者には鈍ら以下の武器と墮ちる不良品。

そう語りながら水を飲むヘファイストス。

「なるほど、つまりボクとヘファイストスの子供ってわけだ！」

「ぶふっ！」

秒でその水を吹き出した。

天界時代とある女神と付き合っていたこともあるヘファイストス。別段、その気があるわけではないがそんなふうに言われると流石に動揺する。

「げほ、ごほ！ あ、あんたねえ……誰彼構わずそういうこと言うと、アポロンみたいな馬鹿が現れるわよ」

「やだなあ、こんな事ヘファイストスにしか言わないよ！」

満面の笑みでそう返すヘステイア。ヘファイストスの顔が羞恥で赤く染まる。

「そうだ！ これから渡しに行くけど、ヘファイストスも一緒に行こう！ ベル君に君を、君にベル君を紹介したかったからね！」

「あ、ちよつと！ 引つ張らないでヘステイア！ もう、解ったから着替えさせて……」

元気に誘ってくる神友に仕方ないと微笑むヘファイストス。天界時代引きこもりだった彼女と祭りを回るのも、まあ悪くないだろう。

「お〜いベルくん〜ん！」

「あ、神様！」

「いででで！ は、離せ！ わ、悪かったよ！」

見覚えのある白髪に声をかけるヘステイア。ベルは小太りの男の腕を捻りながら振り返る。

「何事!？」

「この人がポーション安くしないっていった人に暴力を振るおうとしてたから」

「て、てめえ！ 折れたら解ってんだろうな!？」

「はい！ ちゃんと治します!」

「何こいつ怖い……」

男は顔を青くして、ベルが腕を離すとそそくさ逃げていった。

女性店員達がキャーキャー黄色に声を上げていた。

「おかえりなさい神様。そちらの女神様は？」

「ふふん。ボクの神友さ……なんの神か当ててみるかい？」

「え、えつと……美の女神様、でしょうか？」

「そう思うかい？」

「は、はい……」

「……………」

頬を赤くして照れながら言うベル。神故に嘘を見抜けるヘファイストスは本心と見抜きこの神にしてこの眷属ありか、と頬をかく。

「ヘファイストスがきれいなのは認めるけど、不正解だぜ」

「ヘファイストス……ってことは、「ヘファイストス・ファミリア」の……鍛冶の女神様なんですわね!」

「え、ええ……そうよ。はじめまして、ベル・クラネル。私はヘファイストス。貴方の言うように「ヘファイストス・ファミリア」の主神。今度利用してね」

「そ、そんな! 「ヘファイストス・ファミリア」の装備なんて手が届きませんよ!」

「そんなことないわよ。ウチにだって駆け出しはいるからね。その子達の作品だって品質はいいし、お値段も手頃だしね」

「そうなんですわね」

なら今度寄ってみますね、と笑うベル。頭なでたくなってきた。

「それよりベル君、君にプレゼントがあるんだ!」

「プレゼント?」

「ああ、それ——!？」

と、ヘステイアが箱をベルに渡そうとした時だった、ボガアン！
とそう離れていない場所で何か破壊される音が響く。慌てて振り
返ると、緑の体を持った巨大な影……………

「モ、モンスターだあああああつ!?」

凍りついたかのように、平和な喧騒に満ちていた大通り一瞬言葉を
無くす。

蛇のような体躯を持ったモンスターは頭部を開き花の本性を顕に
涎の垂れる口を開き……………

「はあー!」

「ギツ!?」

ラビットフット
ベルの蹴りが地に鎮める。余りの勢いで地面に叩きつけられ無理
やり噛み合わされた歯が数本砕ける。

「グ、ギャ……………!」

怒りを滲ませ起き上がった食人花。その花托部分をベルが
踏み付ける。丁度その位置、口奥に存在する魔石が圧壊しその身を灰
に還す。

「オオオオオオ!!」

「っ! まだ居る!」

その食人花が出てきた穴の中からさらに飛び出す食人花。その数、
3匹。

無手で倒すには地面に押し付けた上で魔石のある場所を叩くか口
内に手を突っ込むが無理矢理引きちぎる必要がある。と……………

「ベル君! 受け取れえええ!」

「神様?!」

ヘステイアがベルに向かって何かを投げる。

箱だ。中身は、ナイフ。

「やっちまえ、ベル君!」

「……………っ!」

次の瞬間、ベルの姿が消える。

最大Lv. 2しかない周辺の冒険者達や零能の神には視認不可能。
一閃、二閃と振るわれた斬撃はナイフで足りない刃渡りを補い首を切

り落とした。

「大丈夫ですか!？」

食人花が出てきた際破壊された路面の瓦礫で怪我した市民を魔法で治療するベル。遠くから悲鳴が聞こえてくる。1つ2つ、ではない。もっと多い。

屋根の上に駆け上がるベル。食人花、そして奇妙な芋虫が街の各所で暴れていた。

祭りで跳ね回るのは間違っているだろうか？

街中に現れた食人花に巨大な芋虫。

出現箇所は12箇所。

治癒魔法を薄く広げ、さらに細かく探知。

数は……食人花51。芋虫39。

芋虫が吐く粘度の高い液体が冒険者達の装備を溶かしている。

巻き添えを食らった食人花一匹が溶けた。

装備を溶かす芋虫に、工夫しなければ素手で殺すのは厳しい食人花。

ベルは一度地面に降りる。

「へフアイストス様、このナイフって不懐属性デユランダルですか？」

「え？ そ、そうよ……どうして？」

Lv. 1とは思えぬ動きを見せられ固まっていたへフアイストスは突然の質問に動揺しながら応える。

「装備を溶かす体液を持ったモンスターがいたので。でも、不懐属性デユランダルなら多分大丈夫」

「待ちなさいベルさん。鉄も溶かす体液って、それ貴方自身が——
——待ちなさい！」

アミッドが慌てて止めようとするがベルはその場から掻き消えるような速度で走り去ってしまった。

「……あの子駆け出しよね？」

「そうなんだよねえ……」

「うわあああ！ 足、俺の足がああ!？」

芋虫の吐き出す粘液により鎧が溶け、皮膚が消え剥き出しの肉が赤黒く染まり骨が形を変える。

仲間の惨状に半狂乱になりながら芋虫に槍を投げつける冒険者。思ったよりあっさり刺さった槍は溢れ出した体液に溶かされ、空いた穴から溢れた体液が地面を溶かしていく。

「オオオオオッ!!」

「ガッ!」

呆然とその光景を見てみると緑の体躯が冒険者を吹き飛ばす。刺し傷や切り傷だらけの食人花。武器さえ無事ならやりあえたそのモンスターは、打撃には滅法強く、武器を失った冒険者達には勝ち目はない。

「み、皆ー！ 少しでも耐えて!」

後方にて叫ぶ茶髪のエルフの少女。彼女は何も無責任なことを言っているわけではない。

「蒼穹を流れる風よ——」

彼女は魔法を放てる魔導師。そして、足元に浮かぶ魔法円がただの魔導師ではなくランクアップを果たし『魔導』のアビリティを得た上級魔導師であることを示す。

魔法円で増幅された魔法は、中層のモンスターすら屠りうる。放たればの話だが。

「——!!」

グリーンと振り返る食人花と芋虫。毒々しい極彩色の花と芋虫が目の前の冒険者を無視して迫る。

「え?」

思わず詠唱を中断してしまったエルフの少女。眼前に広がる食人花の口。

綺麗に生え揃った牙の奥に広がる闇は今まさに少女の命を飲み込まんとして、ガキンと空を噛む。

「大丈夫ですか?」

「……………え?」

直ぐ側からかけられた声と、膝裏や肩周りの感覚から自分が誰かに抱きかかえられたのだと認識する少女。エルフの本能が表に出るまもなく混乱。赤い瞳と目が合う。

「……………あの?」

心配そうな顔で覗き込んでくる幼さを残した中性的な美少年。白い髪に赤い瞳。まるで兎を連想させる少年に助けられたのだと、よう

やく気づく。

「え、ええ……大丈夫」

「良かった」

「……………」

安心したように微笑み少女を降ろす少年。降ろされると同時に落ちていた少女に気付かず飛び降りる。

あの一瞬で自分を助け更に抱えたまま建物の屋根の上に移動したのだと気付いた少女は少年を少なくとも第二級冒険者だと判断した。獲物を見失い右往左往して食人花の一匹を芋虫に向かって蹴りつける。

「オアアア！」

「ピイイイイ!?!」

芋虫が巨大な食人花に押し潰され腐食液を溢れさせながら破裂し食人花を溶かす。この場の食人花は3体、芋虫は4体。残り2体と3匹。

「今治します」

その隙間を掻い潜り足を溶かされた冒険者の下に移動した少年は片手に緑の光を灯し冒険者に向ける。

原型を失いかけていた足が一瞬で治る。と……

「オオオオ！」

「ピイイイイ！」

芋虫と食人花が少年達に向かってくる。

「着地は自分でしてください！」

少年はそう叫ぶと冒険者を屋根の上までぶん投げる。残された少年に迫る食人花を拳や蹴りで逸らし、遅れてきた芋虫を切り裂く。

「っ！」

傷口から溢れ出た腐食液が少年の掌をじゅつと音を立て溶かす。すぐに緑の光を纏い傷を癒やす少年。食人花と芋虫が再び迫る。

(魔力に反応してる?)

食人花と芋虫の反応を観察するベル。再び治癒魔法の光を纏うとやはり過剰に反応する。ならば誘導しようもある。

ギリギリまで引き付け、魔法を解除。目印となる魔力が突然消え一瞬動きが鈍る極彩色のモンスター。

狙いは芋虫。一陣の風が絡みつき無数の裂傷を刻み込む。

再び治癒魔法の光を灯すベルに迫ろうとした食人花達は足を切られ動けなくなった芋虫とぶつかり傷口から吹き出た腐食液をまともに辺り、魔石が溶け灰に変える。

「ピュイイイイ！」

「ピギユウウウ！」

食人花の巨体にぶつかった衝撃で限界を迎えた芋虫。倒されれば破裂し腐食液を撒き散らす特徴を持っている芋虫であるが、体中の傷口からブシユブシユと腐食液を吐き出すのみで、内圧が足りず破裂できなかった。

最後の芋虫は屋台を組んでいた骨組みの鉄棒を胸に突き刺す。バキリと体内の魔石が砕け腐食液を撒き散らすこともできず灰に還る。「……………」

倒せたが街の被害が大きい。路面も近くの建物の壁も溶けている。となると芋虫は一瞬で消し飛ばせる威力……………街にも被害が出る。いっそ、氷結属性の魔法ならばとある女騎士を思い浮かべるベル。と……………」

「あれは……………」

そこまで離れていない街の一角で吹雪が吹き荒れた。屋上へと駆け上がり、凍りついた食人花と芋虫、体中に痛々しい腐食跡を作ったアマゾネスの二人と金髪の剣士、そして魔法を放ったであろう腹から血を流すエルフの少女。

「……………」

ベルはすぐに行動に移る。

「あ、あの、お名前を……………」

「ベル・クラネルです！」

名前を告げ、駆け出すベル。

吹雪を放ったエルフの少女に真っ直ぐ……向かわず他の芋虫や食人花のいる方向へと向かうべく曲がった。

「はふう、倒せた〜……」

「ケホ……」

「レフィーヤ、大丈夫？」

武器を溶かす芋虫、拳では殆どダメージを与えられない食人花。おまけに魔法を使おうとしたら魔力に反応し魔導師を狙ってくる。

風を纏えるアイズは借り物の剣が砕けてしまいうし、かなり苦戦するもなんとか倒せた。

「どうする？ 別のところは、他の冒険者達に任せろ？」

テイオネの言葉にテイオナはうへえ、と言いたげな顔をしながらも立ち上がり、アイズも砕けた剣の柄を強く握る。

「出来ることは、したい」

「うん。まだ行けるからね！」

「皆さん……わ、私も……ん？」

憧れのアイズが、仲間のテイオナ達がまだやると言っているのだ。自分だけ弱音を吐くわけにないかないと腹の痛みも無視してレフィーヤも付いていくと叫ぼうとした時、地面が揺れているのに気づく。後なにか大きな音が迫ってくるような？

「わっ！ 何あれ!？」

「え、え？ 怪物進呈!？」

ダンジョン内で行われる作戦、戦術の一つ。自身のパーティーを追ってくるモンスターを別のパーティーに押し付けるという擦り付け。擦り付けられた者達が死んでいる事が多いから問題になることが少ない非情な行為。それを連想する程のモンスターの群れは緑に輝く少年を追いかけてきた。

時折食人花が振るう蔓の鞭を後ろに目でも付いているのかと思うほど完璧なタイミングで避け、時に切り裂き鞭のように振るい街灯に引っ掛け引っこ抜いた街灯を投げつける。

「すみません一緒に来てください」

「ぐげふ!？」

タツクルさながらの勢いで搔つ攫われるレフィーヤ。少女が上げてはならない類の悲鳴を上げる。

「な、何をするんですかこのヒューマン!」

「さっきの吹雪、もう一回撃てますか!？」

「はい!？」

「撃てるなら、お願いします!」

何に対して撃て、など聞くまでもない。そのためにあの数を集めてきたのだろう。

「詠唱に時間がかかります、稼げますか?」

「はい!」

少年はレフィーヤの言葉を肯定し、緑の光を消し屋根の上に飛びレフィーヤを落とす。路面に降りると再び緑の光を纏い、極彩色のモンスター達を引き付けて走る。

「っ!.....あれ?」

後を追おうとして腹の傷を思い出し、しかし傷がなくなっているのに気づく。そういえば彼、確かベートと殴り合っていた治癒師ヒーラーだったか?」

食人花と芋虫を引き連れ大通りを通り広場に出るベル。魔力を纏うベルを喰らおうと迫りくる食人花を切り裂き殴り、対処する。

「.....」

と、ベルは治癒魔法がナイフに吸い込まれるように動いているのに気付く。後に知ることだがこのナイフは魔力伝達率の高い精製金属ミスリル製。

ベルの魔法に感応しているのだ。

「.....」

その光景に、兄弟子の技の一つを思い出すベルは全身に纏っていた治癒魔法を移動させナイフに込める。魔力をどんどん注ぎ込み、ナイ

フを緑の輝きが包む。

「オオオオオオ！」

「ピギユアアア！」

その魔力に反応しベルの周りを渦巻くように取り囲む食人花と芋虫。振るわれる蔓を、噛み砕こうとする牙を避け、踏み付け地面に叩き落としながら上へ上へと駆け上がっていく。

「オオオオオ！！」

「っ！！」

と、先回りするように同胞を足場に登ってきた食人花。迎撃は容易いが、このままでは食人花と芋虫に囲まれた檻の中に押し込められる。食人花だけならともかく、芋虫に不用意なダメージを与えるのは避けたいベル。と……………

「【吹き荒れる】！！」

文字通り、一陣の風が食人花達を吹き飛ばす。現れたのは、金の剣士。アイズ・ヴァレンシユタインその人だ。

「何時でも、撃てるって！」

「解りました！」

その言葉に下から迫ってきた食人花を思い切り踏みつける。打撃に高い耐性を持つ筈の食人花の頭部が歪み地面に叩きつけられる。その反動でベルはアイズと手を取り合い上に跳ねる。

「【吹雪け三度の厳冬——我が名はアールヴ——！」

視線を向けた先には魔法円マジックサークルの中心にて翡翠の輝きをまとった誇り高い妖精エルフの少女。

「オオアアアアア！」

ベルの治癒の光とアイズの風がよほど魅力的なのか同胞を押しつけながら追ってくる。

「そんなに欲しけりやくれてやらあ！」

そう言って、ベル今にも破裂しそうなほど魔力を纏ったナイフを地面に向かって投げつける。

「！！！！！！！！」

バツと転身する食人花。渦のように絡み合いながら我先にとナイ

フを狙う食人花。その食人花の渦を越えようとする芋虫。モンスタ―達が密集する。

「ウィン・フィンブルヴェトル」!!」

解き放たれる純白の吹雪がモンスタ―達を凍り付かせる。広場に現れた巨大な氷蔵。その中心が、緑に発光する。

「全員、伏せてください!」

「え?」

「ちよつ!」

アイズの腕を掴み氷像を足場にエルフの少女の下に跳ねるベル。二人を庇うように押し倒すと同時に、氷像が内から緑の衝撃波によって砕かれた。

冷気により凍りついたダイヤモンドダストに混じり緑の粒子が宙を舞う。

「おくい! レフィーヤ、アイズ!」

「ティオナさん! は、離れてください!」

仲間の呼び声に反応したエルフの少女は自分達が男に押し倒されているのを思い出し慌てて突き飛ばす。

「あ、あなた! いきなり私やアイズさんを押し倒してどういうつもりですか!」

「す、すいませんつい!!」

顔を赤くして怒る少女に謝るベル。少女も自分達をかばう為だと解っているので素直に謝られ何も言えなくなる。

「あ、さっきの人攫い!」

「ひ、人攫……………あ、でも間違っていないかも」

アマゾネスの少女の言葉にシヨックを受けつつも何処か納得した様子のベル。

「つて、それよりティオナさん! ティオネさんですけど治療……………を……………あれティオナさん、傷は? ティオネさんも……………」

……………」

「ん? おお! 傷が治ってる!」

「あらほんと……………」

全身についた傷が何時の間にか治っているのに気付いたアマゾネスの二人は周囲に降り注ぐ緑の光の粒子に気づく。

「ひよっとしてこれのおかげ？」

「君の纏ってた光に似てるね」

「まあそれですからね……うん、結構広範囲に振り撒けたみたいですね」

流石にオラリオ全域とまではいかないが襲撃があった場所全体を包む程度には緑の粒子が広がっていた。怪我人も治癒されていくことだろう。

「それじゃ、僕はこれで」

「あ……」

アイズが手を伸ばすが遅く、屋根から飛び降りたベルは広場に落ちていたナイフを拾って走り去った。

「その手はどうしましたか？」

「ええっと、僕の治癒魔法って魔力を込めれば込めたぶんだけ扱いが難しくなって、怪我するリスクが増えるというか」

「街の話聞く限り、被害地域を覆えるほどの範囲で使用していたそうですね」

「はい、それでも魔力もなくなっちゃって自己治癒出来なくて」

あはは、と笑うベルだったがだんだんその笑いも尻すぼみしてく。

「オラリオにも治療師ヒーラーは比率が少ないだけで十分居ます。貴方一人、頑張る必要はなかった。出来ることは、やらなくてはならないことはありません。私はそう言ったはずですよ」

「はい、言われました……」

「……まあ、貴方のおかげで怪我人は居なくなりました。これ以上強くは言いません……ただし、もう少し己を大切にするように」

「はい」

「では手を……治します」

「え、そんな！ マナポーションだけ頂ければそれで……！」

血が固まり初めたベルの手を取るアミッド。ベルが慌てて振り払おうとするが、睨まれ大人しくなる。

「これは別に迷惑になりませんよ。ええ、貴方の頑張りは迷惑ではありません。ただ、心配はかける……それをしつかり覚えてください」

そう微笑むアミッドに照れたような困った顔をするベル。しつかり者の姉に叱られる弟のようにも見えた。

「……あんたがあの子の武器を欲しがった理由、少しは解ったわ」

その光景を眺めるヘファイストスは隣のヘステイアにそう告げた。

「Lv. 1とは思えないほど強くて、だからこそ危険に挑めてしまう。しかも他人のために頑張っちゃうんだから気が気じゃないわよねえ」

厄介な眷属を持ったものね、と肩を竦めるヘファイストス。

「でもいい子だ」

「そうね、応援したくなるのも分かるわ。だからといって、値段はまけないわよ？」

リヴィラの騒動

地下の街に潜るのは間違っているだろうか？

「こんにちは！ レフィーヤさんとアイズさんと……ええつと、アマゾネスの姉妹のお二人いますか？」

『黄昏の館』の門番に元気に挨拶する白髪赤目の少年。元気な挨拶に門番なんていう退屈な仕事による疲れが吹き飛びかけたが、所在を確かめている相手が相手なので慎重に対応する門番。

「今アイズさんはいない。『ゴブニユ・ファミリア』に行っているからな。用件は？」

「昨日の祭りの際、助けてもらったお礼にと……これ、つまらないものですが」

と、クツキーを差し出す少年。うまそうな匂いだ。

「そうか。なら俺が渡しておこう。あ、その……失礼だが『ロキッ・ファミリア』には敵も多くてな。名前と所属を聞かせてもらえるか？」

「『ヘスティア・ファミリア』所属、ベル・クラネルです。よろしくおねがいします！」

「そうか、会えなかったか」

「まあ、その後ロキ様が来てまた後で御礼を言いに来れば良いって言ってくれました」

18階層、リヴィラの街。ベルの現在の最高到達階層にてハシヤナに朝の出来事を話すと豪快に笑われる。

現在ベルは臨時治療院を開いている。暇なフェルがくふあ、と欠伸をしながら尾を揺らしていた。

「ま、機会があるならその時会いな。俺はこれから少し深く潜るから、舐められないよう気をつけろよ。帰ってきたら酒を奢ってやる」

「一人で大丈夫なんですか？」

「ああ、下で合流する予定のダチがいるんだ。そいつ等と組むからな……何、階層は言えねえが半日ぐらいで戻る」

ハシャーナはそう言うのと下層に降りていった。

そして、L.V.4^{ハシャーナ}が居なくなつた途端、態度を変える者達が現れるのは必然と言えよう。

「おい、怪我治せ」

と、腕の傷を包帯で応急処置した冒険者が二人ほど仲間を連れてやってきた。

「はい。傷の具合にもよりますが、魔石かドロップアイテム、または【ファミリア】の証文を——」

「は？ おいおい俺達は冒険者だぜ？ 誰のおかげでこの街があると
思つてやがる。誰のおかげで治療師^{ヒーラー}風情がこの階層で安全に過ごせ
ると思つてやがる？ ただにすんのが誠意つてもんだらうが!!」

「そうだそうだ！ 兄貴の言うとおりだぜ！」

「さっさとただで治せよ雑魚！」

「……………」

——舐められないよう気をつけろよ

——いいかベル。治癒魔法使いを下に見るような奴と関わつち
まった時は、遠慮なくぶつ飛ばしていい

バキッ！

「ぶべら!!」

ドゴオオン！

「あ、兄貴いい!!」

頬を殴られ吹き飛ぶ冒険者。建物に突っ込みピクピク痙攣して
いる。

「ええと、腕の傷と頬の打撲、そしてその建物の損害金で締めて——」

「おいまで、頬の傷お前のせいだろうが!？」

「建物壊したのもお前じゃねえか!？」

「はい?」

「「さーせんした!!」」

「あはは、冗談ですよ。建物の損害金は僕が払います」

つまり頬の打撲に関しては対価を払えと。

その後、ベルを恐喝する冒険者が姿を現すことはなかった。

「よし、落ち着いてきたし一旦休憩してご飯食べに行こっか」

「ワフウ」

やっど？ というようにのそりと起き上がるフェル。ベルがまたせてごめんね、と言うように顎下を撫でてやる。

「お、何だ切り上げるのか？」

「あ！ ハシャーナさん、お帰りなさい！」

「おう」

タイミング良くハシャーナが戻ってきた。その装備にベルはあれ、と首を傾げる。

「ハシャーナさん、斧落としたんですか？」

「え？ ああ……あれは魔剣なんだよ。魔法を内包してんだが、使いすぎると砕けるんだ」

「へえ……そんな武器もあるんですね……」

回復魔法を内包した魔剣を作れたら、自分のような存在を量産できないだろうか？ と考えるベル。

「それより飯行くんだろ？ 俺がおすすめの店案内してやるよ。フェルはやっぱり肉がいいか？」

「フェルは林檎が好物ですよ」

「グルウ」

「林檎か……果物は特に高えからなあ……」

と、その時だった。

「おい」

不意に声をかけられる。振り返るとローブの女が立っていた。女と解るのはその声以上に、ローブの上からでも解る肉感的な肢体故だ。ハシャーナは思わずヒュウと口笛を吹く。

「お前、私を買わないか？」

「え、俺？」

突然の身売りに困惑するハシャーナ。それはそうだろう、何せ今時

分は純朴そうな少年と共に歩いているのだ。誘ったところで乗らない可能性が高い。事実買う気はない。

「悪いな嬢ちゃん、俺は今こいつ等と飯に行くんだ」

「その後でなら良いんじゃないですか？ あ、それとも一緒にご飯行きますか？」

「……………ん？」

と、ベルはしかし彼女に好意的に接する。しかしその声や顔に、そういう俗欲染みしたものも感じない。

「なあ坊主、買うつてどういう意味か解ってるのか？」

「パーティーメンバーとして雇わなかってことじゃないんですか？」

当たり前前のことを聞かれたかのように、何故そんな質問をしてくるのか解らないと言う表情をするベルにハシヤーナは思わず笑った。

「はは！ そうか、パーティーメンバーか！ ははははは！！」
「??」

豪快に笑うハシヤーナに疑問符を浮かべ首を傾げるベル。

「そういうことらしいからな。ま、俺も元々の依頼品の受け渡しも終わってるし、また潜るぐらいなら……………」

「……………あれ？」

受け渡しが終わった、その言葉に女が僅かに反応したのをハシヤーナもベルも見逃さなかった。二人の変化に気づいた女はチツと舌打ちした。

「お前、何者だ？」

応えるまで逃さんといった雰囲気ハシヤーナに対して、女は気怠げに声を発した。

「ああ……………面倒だ」

ドツと女の足下が爆ぜる。そう錯覚するほどの踏み込みで接近する女。狙いはハシヤーナ。想像以上の速度に反応が遅れるハシヤーナ。

「ハシヤーナさん！」

ハシヤーナを押しつけるベルが、変わりに女の拳をもろに受ける。

右肩がバキボキ音を立て砕け、吹き飛ばされ民家を破壊し吹き飛ばす。

「坊主！」

女はハシャーナを一瞥し、追撃より目的のものを見つけることを優先することにしたのか踵を返す。ザワザワと狼狽える冒険者達に興味も持たず懐から取り出した草で草笛を吹く。

「なっ!？」

その音に呼応するように現れる大量の食人花。つい最近存在が確認された新種。それが何十匹も現れ待ちを取り囲む。

「宝玉を探せ！」

女の叫びが誰に向けられているかなど明らかだ。モンスターを操っている。調教師^{テイマー}? アーデイ以外で、この数のモンスターを操る者がいるのか?

「っ! クソ、逃がすか!」

ハシャーナ・ドルリア。所属ファミリアは「ガネーシャ・ファミリア」。位階^{レベル}は4の第二級冒険者上位。二つ名は「剛拳闘士」。

本来の戦闘スタイルは二つ名が示す通り、拳による超近接戦。その一撃は一つ上のLv. 5にも通用するだろう。

「なっ!？」

その拳を、女はあっさり受け止めた。

「エニユオからは目立つななどと言われたが、皆死ねば同じ事か」

その何気なく行ったかのような動作だけで彼女がLv. 5の上位、あるいはLv. 6級の能力値^{アビリティ}持ちであることが伺える。顔こそ隠しているが、そのレベルなら武勇を聞きそうなものだが心当たりがまるでない。

「死ね」

腕を引こうにも化け物じみた握力で拳を引き戻せず、拳が振るわれる。彼女が真にLv. 5以上であるなら致死の拳砲。

「あああああ!!」

「!？」

その一撃より早く、女の顔にめり込む拳。ハシャーナの拳を掴む指圧が弱まり剥がれ、女が吹き飛ばす。

「いったあああ!! 指が、折れた!？」

拳を反対の掌で包み叫ぶのは先程殴り飛ばされたベルだ。

「肩の骨は砕いた筈だが」

と、瓦礫を押しつけ立ち上がった女はゴキゴキ首を鳴らしながらベルを睨む。

「顎の骨を砕いた感覚はあったんですけど」

「その程度治る」

「奇遇ですね、僕もです」

と、砕けた拳を治癒するベル。

「ドウゾク……いや、スキルか？ 厄介なものだな、冒険者というのは。だが、それなら頭を砕けば死ぬだろう」

同属……いや、同族？

所属ではなく種族？ まるで自分が回復速度が早い種族であるかのような言い回し。と、ベルが疑問に思うも接近してきた女にすぐに思考を切り替える。

拳と拳の暴風雨。

どちらも相手の骨を砕いたと言っていただけあり、相手に十分なダメージを与えられるだけの膂力を持って殴り合う。

そのどちらも受けた側からダメージを回復する。

「っ、くそ！ 近づけねえ！」

破壊の嵐がリヴィラの街を駆け巡る。時折巻き込まれた家や打撃に強いはずの食人花が爆砕する。

「しぶといな」

「そっち、こそ……僕達みたいなのを相手してるみたいですよ」

条件はほぼ同じ、ならば地力が高い方が勝利するのは道理。

「！っ……は、あ……」

胸ににえぐるような拳が減り込む。肺の中の空気が一瞬で吐き出され、悲鳴を上げることも出来無いベル。地面に膝をつくベルを冷たく見下ろす女は片足を上げる。頭を踏み砕く気だろう。

「坊主！ っ、くそお！」

自分が女にダメージを与えるのは不可能。だが、ベルを運ぶだけな

ら……………!

間に合え、と駆け出すハシャーナだったが、無慈悲にも足が振り下ろされる。

骨が砕ける音が響く。

「っ！ 往生際が悪い……………!」

それは頭蓋が砕ける音、ではない。頭と足の間挟まれた腕の骨が折れる音。ベルは女の足を万力のような握力で掴む。

片足を捕まれバランスが取れない女はしかし反対の足でベルを蹴ろうとする、が。

「ぬううううう!!」

「な!?!」

まともによってもダメージを与えられないのは十分叩き込まれたベルは一先ず女をこの場から離すことを優先。砲丸投げのようにその場で回転する。

「飛んでけええええ!!」

「きやああ!?!」

遠心力に加えベルの腕力によって投げ飛ばされる女。グングンその姿が小さくなっていき肉眼では確認できなくなる。数秒後、18階層の外壁に大きな亀裂が走った。

食人花を斬り伏せながらベルはそれを横目で確認しつつ、再び戻ってくる時に備え探知を最大範囲に広げる。

兄弟子のような広範囲は無理でもこの規模の街なら十分覆える。

「このモンスターは打撃に強い! 刃物を使用してください! 魔力にも反応するので、魔法で迎撃する場合には魔導師を守ってください!」

リヴィラの街をかけながらベルは対処法を住人に教えていく。しかしここは冒険者の街。力こそ全てで誰もが自己中心的な冒険者であり、特にここは破落戸ローグタウンの街と呼ばれるような場所。

今まで見たことがない冒険者Ⅱ最近ランクアップした新人と取られるベルに命令されはいそうですかと従うかと言われれば……………

「偉そうに命令すんなガキい!」

「だいたいその情報本当なのかあ!？」

「俺の長年の冒険者としての勘が嘘だつて言ってるぜえ!」

「るせえ! さつさと行動しろ、ぶちのめされてえのかてめえ等は!!」

「二はい! さーせんした!」

まあ強けりや従う。ここはそういう街だ。食人花の頭部ごと地面を踏み砕き盆地を作ったベルに逆らう者は居なかった。

とはいえ、何処まで凌げるか……………。

流石に数が多い。

「う、うわあああ!!」

「あ、兄貴いい!」

食人花に加えられミシミシと食い千切らんと力を込められていく男性冒険者。その食人花をナイフでバラバラに切り裂き冒険者を抱え地面に落ちる。

「お、おめえなんで……………俺はお前に」

「命を救うのが、僕のやるべきことです。それより……………」

迫りくる食人花を踵落として地面に叩きつけ魔石を皮膚の上から踏みつけ圧潰させながら、ベルは男に尋ねる。

「僕が治癒に回るとして、あと何分耐えられますか?」

「……………この街の今の戦力じゃ、あんたが回復に回ったら完全に勝機はなくなる。一日もあれば押されて潰されるだけだ」

「……………」

ここであるのローブの女が居なければじきに降りてくるであろう冒険者が街の異変に気付き上に連絡し救援に来るのを待てた。

しかしあの女が再び来れば相手できるのは自分だけで、その場合他者を治癒している暇はなくなる。せめて……………せめて一人でも第一級冒険者が居てくれたら!

と、食人花達の何匹が一斉に振り返る。魔力に反応した? だとしでも各々距離がある食人花達が……………ならばそれは、一体どれだけの魔力が……………

「【ヒュゼレイド・ファラーリカ】!!」

降り注ぐ炎の矢。愚かしくもその魔力に飛び込んだ食人花の群れ

が焼き払われていく。極東や兄弟子の故郷には飛んで火に入る夏の虫という言葉があるらしいのを思い出した。因みにこの言葉を知ったのは救命団の訓練に参加したお姉ちゃんズ筆頭だったりする。

「やあ【剛拳闘士】、状況は？」

トン、と軽やかに着地した小人の青年。何でもないかのように現れた彼だがその間に存在した食人花が全て倒されていた。

「【勇者】……………」

主神より勇者の二つ名を与えられし最強の小人族。その位階は6。

「【ロキ・ファミリア】団長フィン・デイルナの登場に、冒険者達に活力が戻る。」

それを見つめる、白い影。

「ふん、【勇者】か。あいつも変わらさず冒険者共の希望であるらしい。彼女の寵愛も受けられぬ凡俗めが」

色が抜け落ちたかのような病的な白髪の長身の男。肌も白く、モンスターの頭蓋骨ドロップアイテムはもちろん服も白い白づくめ。

嫌悪と嘲りを含んだその声色は、同時に確かな殺意も宿していた。

「しかしあの程度の子供にやられるとは、情けないなレヴィス」
「……………」

レヴィスと呼ばれた女は白髪の男の言葉に苛立ったように目を細め、担いでいる剣の柄を握る力を強める。

「あのガキは私が殺す」

そして、別の場所から見つめる別の影。

手に持つ水晶に話しかける。

「【勇者】に【九魔姫】、【剣姫】…………それと、私が居ない間に増えた第一級のアマゾネスの姉妹でしたか？ 豪勢な面子ですね、私が出るまでもなさそうですよ」

『そうか、ではリド達と合流してくれ』

「ええ……………しかし、Lv. 4以上の冒険者が増えたら伝えるように

言ったはずだが？」

『何の話だ？』

「白髪の小僧だ。純朴そうな見た目をしているが、間違いなくあの若さで第一級に片足を突っ込んでいるぞ」

その言葉に水晶越しに困惑するような声が聞こえてくる。

『いや、すまない。そのような冒険者の話は聞いていない』

「何だと？」

『心当たりが無いといったのだ。可能性としてはレベル詐称………いや』

「？」

『噂だが、「ロキ・ファミリア」の第一級冒険者と渡り合った駆け出しが白髪という話が………』

「はあ？ 寝言なら寝て言え。そんなことが可能なら神の恩恵になんの意味がある。肌が荒れぬからと睡眠を削るから寝ぼけるのだ骨め」

『骨は関係ないだろ！』

水晶の向こうから聞こえてくる声に特に気にした風もなく【勇者】^{プレイヤー}の指示に従い策の材料を一度に大量に運んでいる白髪の少年を見つめる。と………

「目があった。やはり駆け出しではないだろうあの小僧」

かなりの距離があるというのに視認された。敵か味方が判断に迷っているのか立ち止まり見つめ様子をうかがう少年に、微笑み軽く手を振る。少年は手を振り返し作業に戻った。

「………少し心配になるぐらい素直ですね。あのポンコツエルフの好きなタイプだ」

『何を言っている？』

「昔を懐かしんでいただけです。私は移動します」

『ああ、リド達によりしく頼む』

作戦を立てるのは間違っているだろうか？

怪物モンスターファイリア祭のモンスター襲撃事件。事前に地下に潜むモンスターの発見により、冒険者達の警戒が強まり一般人には被害が出ず、冒険者達も降り注ぐ緑に輝く粒子により傷が癒やされ実質的な人的被害はゼロ。黒幕もさぞやブチギレてるであろう現状で、事件の黒幕とは別に大きな損害を受けた者が居た。

何を隠そうアイズ・ヴァレンシユタインその人だ。《デスペレート》という愛剣の整備中、貸し出しレンタルされていた剣を何時もの感覚で使い、へし折ってしまった。借金四千万ヴァリスを背負った。

その返済のための金稼ぎとしてダンジョン中層に潜ろう、となつたらしい。小遣い稼ぎに中層に行こうと言えるのは大手派閥の特徴。

メンバーは金の必要なアイズ、アイズを慕うレフイーヤ。フィンに、フィンのおストーリー……もとい愛の奴隷テイオネ、発案者テイオナにフィンを誘う時に部屋にいたリヴェリア。第一級5人に第二級ながら高い火力を持つ魔導士が一人と中々どころかオラリオでもトップクラスの戦力パーティー。彼等のおかげで一時的に敵を押しつけた。

ならば今のうちに逃げようとしたが、食人花や巨大な芋虫に取り囲まれていた。逃がす気はないらしい。

「それだけその布の中身が欲しいんだらうね」

フィンという言葉にギクリと身を振るわせる獣人の褐色少女。名をルネ。ハシャーナから荷物を受け取った運び屋だ。

「それにしてもこれだけのモンスターを操るなんてね……ハシャーナ、いざという時はそれを破壊してくれ。ここまですて奪還したがるものの正体こそ気になるが、奪われる可能性を消せるならそれに越したことはない」

ところで、とフィンは視線をずらす。

「赤髪の調教師と戦ったという君の話も聞きたいんだけど」

「ええ！　もちろん教えます！」

「何でそんなに離れているんだい？」

ベルは離れた場所から会話に参加していた。

岩陰ならぬ水晶陰からヒョコツと顔を出すベルは髪や目の色も相まって兎を連想させる。その後ろで巨大な狼が呆れたような顔をしていた。

「気にしないでくださいー！」

「いや気になるよ……………」

「えつとね、アイズが『後で闘おう』って言ったら脱兎の如く走り去ったのー！」

「……………ほう？」

「っー！」

ソロリソロリとベルの隠れる場所に近づいていたアイズがリヴェリアの漏らした声にビクツと震え、近付いてきたアイズに気付いたベルがシャー！ と威嚇しアイズはトボトボ戻ってきた。

因みに闘おうと言われたことを警戒してるのもあるが、威嚇の理由はアイズがフェルを斬ろうとしたからだ。あの状況、モンスターの見た目のフェルに敵意を抱くのは仕方ないとは思うが一瞬感じた黒い何かを警戒せずにはいられない。

「シャーー！」

「野生化してるなく。おーい、白兎くーん」

「フシャ……………はい？」

「あのね、アイズの闘おうはね、君に怒ってるとかじゃないんだよ」

「……………」

「!!」

ティオナが駆け寄っていき説明し、ベルがチラリとアイズに視線を向けるとコクコク勢いよく頷く。

「ベートさんと、闘った後仲良くなってたから……………」

「……………つまり、あなたも僕と友達になりたいんですか？」

少しだけ水晶陰から出てくるベル。アイズにゆっくり近づき、立ち止まり、近づく。アイズはアワアワとし出してリヴェリアに助力を求めめるように視線を向ける。

その様子はさながら動物園の触れ合いコーナーで中々自分に懐かくなった兎が近付いてきてどうすればいいのか母に助けを求める子供

のようで……………何だ殆どその通りだ。

「私より前を見る」

「!?」

はっとした頃にはベルはすぐ前に居た。ベルのほうが僅かに背が高いが、ほとんど同じ。じつとアイズを見つめアイズも負けずに見つめ返す。エルフの少女が何やら叫ぶ。

「……………もうフェルを虐めませんか?」

「う、うん……………」

「はい、解りました。友達になりましょう!」

「……………!」

ぱあ、と花が咲く……………髪の色も合わせれば雪景色の中に花を見つけたかのような笑みを浮かべるベル。漸く仲良くなれた少年の存在にアイズの中の小さなアイズが大はしやぎ、ほぼ無意識に、無感情で、無拍子で眼の前の兎を抱きしめる。

「ああー!!」

「何をやっているんだお前は」

エルフの師弟の声に正気に戻る。正気に戻ってモフモフの髪の毛の感触に気付く。

「だ、駄目ですアイズさん! 男は狼なんです! そんなことしたら調子に乗るに決まっています!」

「……………兎だと思おう」

「とりあえず離せアイズ……………」

「……………もうちよつと」

「駄目だ」

リヴェリアに叱られしぶしぶベルを開放するアイズ。

「大丈夫白兎君」

「はい、年上の人に抱きしめられるのはもうなれてますから」
ついでに妙な名前で呼ばれるのも、と疲れた顔で笑うベル。

「とと、年上に抱きしめられ…なな、なれなれれ……………なれてるうううう!!? なんて破廉恥な!!」

「僕ってハレンチ? なんですか?」

「リヴェリア、ハレンチってな〜に〜?」

「気にするな」

リヴェリアはごっつ、とレファイヤにゲンコツを落とした。魔導士なのに、こういう時の拳骨はアイズ達にも見えない。

「話が進まないな。本題に入っていないかい?」

向こうもフィン達に警戒こそしているだろうが、戦力が揃えば攻めてくるだろう。早く話を進めたいフィンの言葉にベルは慌てて会議場を集まる。

「それで、今回の襲撃者の強さ?」

「単純な膂力ならベートさんや僕を上回ってます。硬さも異常で、殴ったこっちの拳が折れました。速度はベートさんの方が速いです!」

「……………」

ベートさんを嬉しそうに褒めてる、とアイズはジエラシー。

「ベートより…………? ベートと殴り合った君が言うのだから間違いないだろうけど、相手はLv. 5第1級以上か…………」

「フードを被ってたので顔はよく見えませんが、長くて綺麗な赤い髪を持ってました」

「赤い髪、第一級…………やはり心当たりはないかな。他にになにか気づいたことは?」

「う〜ん。戦い方に違和感があったから、本当は何か武器を使うんだと思います。あと、確かに骨を折った筈なのに治ってました」

ベートから似たような言葉を聞いたな、とフィンはじつとベルを見る。

「硬くて強くて速くて、その上自己回復もちなんて厄介な相手ですよ」

「それはひょっとしてギャグで言ってるのかい?」

「?」

フィンの言葉にベルは首を傾げた。

「まあその女の相手は僕達がしよう。モンスターによる物量にて向こうが勝ってる今、ベル・クラネル。君には味方の回復に専念してほしい」

「もちろんです！」

「食人花、芋虫の対処については僕等から共有しておこう。街としての機能は一度完全に捨てる。修復用の木材、建物を壊して得た廃材で防壁、高台の構築。それと人員の配置にあえて穴を用意してくれ……敵が僕を知ってるなら、そこには来ない」

「じゃあどうするんですか？」

「問題ない。なら何処から来るかは予想できる」

はく、と感心するベル。当然だな、といった顔のリヴェリア。クネクネするティオネ。

「ベル・クラネル。君の治癒魔法は距離があっても使えるかな？」

「はい、少し痛いですけど」

「そうか……ん？ 痛いのか？」

「こーやって投げるので」

えい、とものを投げるような動作するベル。付与魔法のようなもので手持ちの何かに付与するのだろう、と自前の知識から推測するフィン。

「まあその際戦闘の邪魔にならないようにしてくれるならそれでいい。活動範囲をこの範囲に絞ってそこから遠距離の味方の回復も頼む」

「………駆けつけちや駄目ですか？」

「必要と感じたなら、そう動くといい。ただ、君にしてやられた女が君を狙う可能性もあるからね。僕等の誰かが対処できる位置に居てほしい」

つまりなるべく回復に専念してほしいということだろう。

「作戦は以上。細かいことは冒険者達を配置に移動させる際に各々伝える。ティオネ、ティオナは防壁、高台の構築の手伝い。ハシャーナ、通達を頼む。リヴェリア、レフィーヤ、アイズはついてきてくれ」

「僕も防壁作り手伝います！」

「………なるべく休んでいてほしいところだけど、君はその方がやる気が上がりそうだね。よろしく頼むよ」

そしてたくさんさんの廃材や木材を運ぶベル。テイオナ達にも負けな
い量を運んでいる。

「ベル……少し、嬉しそう？」

「え、そうですか？」

「……ごめん。少し、違う……楽しんでるわけでもないけど……」

己の配置に移動しようとしていたアイズはそんなベルの様子を見
てうまく言い表せずに言葉に詰まっていた。ベルはああ、と気づいた
ような声を出した。

「そうですね。少しだけ、喜んでるのは確かです。懐かしい……
とは違うかな。でも、聞いてた状況」

「？」

「頼りになる沢山の人達が戦ってくれて、だから安心して怪我人の回
復に専念できる。体験したことはないけど、何度も聞かせてもらった
あの人達の戦い……僕も、漸くそこに立てたって……」

子供は駄目だって言われてたんです、と苦笑するベル。

「なんて、不謹慎ですよね」

「……ううん、解るよ」

「え……」

「解る……」

アイズはそう言つて、目を細める。自分に当てはめるなら父やその
仲間達のような英傑達と肩を並べられた、そうでなくとも力を頼りに
された時のような心境なのだろう。

アイズも、あるいはそう思えたらう。しかしそう思う時は無かつ
た。心に宿る黒い炎に背を押されるまま、走って走ってここまで来て
しまったから。

(この子は、綺麗だな。真っ白で……眩しい)

幼い心を残したまま大きくなったような。とても愛されて育つた
のだろう。優しい人に囲まれ、それを自覚し、他者に優しさを振り撒
ける人。

自分のような真っ黒な衝動のまま突き進んできた存在が隣りにい
ていいのか、そう思ってしまうほど白くて眩しくて、だけでも、だか

からこそ、幼かった頃、両親がいた頃の真つ白だった自分を思い出せる。
(もつと……もつと知りたいな、君のこと)

最初は、謝らなきや。次に、仲良くなりたい。L V. 1だと知った時はその強さの秘訣を知りたいと思った。

でも今は、ただこの少年……ベル・クラネルについて知りたいと、そう思った。

君は、どんな物語が好き？

家族との思い出は、何が印象的？

好きな食べ物は何だろう。

お母さんはどんな人だった？

知りたいな、色々。話してみたい。

「？　どうかしました？」

その視線に気付き、微笑みを向けてくるベル。無遠慮に眺めていた気恥ずかしさから慌てて顔をそらすアイズ。

周りの恋人居ない冒険者達から黒いオーラ。と……

「動いた、来るぞ！」

「っ！　い、行ってくる！」

「はい、お気をつけて！」

見張りの叫び声。響くモンスターの咆哮。

18階層にてモンスターと冒険者の戦いが、今始まる。

死んだはずの男が居るのは間違っているだろうか？

リヴィラの街に津波のように襲いかかるモンスターの群。人類に敵意を向くモンスターの母胎であるダンジョン内の街は何度も壊滅して、何度も建て直されてきた。その光景は見慣れたものだ…全方位からでさえなければ。

本来なら相手するのも馬鹿らしいと早々逃げ出す物量。そしてどこかの派閥の上級冒険者が問題を解決したら素知らぬ顔で自分達の街だと戻ってくる。

しかし今回は逃げることも叶わず戦う羽目に。

まあ、ただ逃げてるだけじゃ殻は破れない。仲間と手を組んでいようと、先達に助けられていようと、彼等は試練を超えた。偉業をなした。戦えぬ者は、ここには居ない。

「うおおお！ やられ、てっ傷がない!？」

「そこに怪我人が居るんだ！ 誰かはこ…居ない!？」

「消えた、俺の目の前で消えたぞ!」

「待たせたな!」

「うわあああ!？ 無傷、そんな、重症だったのに…ゆ、幽霊!」

芋虫を近付けぬように魔法や矢を放つ後衛。その後衛に迫る食人花達の対処に当たる前衛。

その前衛で怪奇現象が起きていた。

食人花の推定Lv.は3から4。打撃に強く斬撃に弱いという明確な対処法があるうとリヴィラの住人にはかなりの強敵。大半の者にとっては格上だ。

当然怪我をする。けど治る。重症を負い動けなくなる。けど何時のまにか居なくなりモンスターに襲われることはない。

暫くすると無傷で戻ってきた。

「……………凄いな、彼」

「ああ、しかし活動範囲を明らかに超えているな」

それを遠目で確認するフィンとリヴェリア。彼等には怪奇現象の正体が見えていた。

戦場を駆け回る兎……ではなくベル。

怪我人に触れ傷を癒やし、重症人は一度安全な場所まで運んでから一気に数秒で癒やす。

回復速度も練度も高い。

「少しやり方は違うけど、アミッドが居てくれるのと同様と考えてもいいかもね」

「あの子に匹敵する治療師ヒーラーに出会えるとはな……」

気になるところといえは治癒魔法を投げて芋虫を吹っ飛ばしたりしてるところだろうか？ 食人花に食われそうになった瞬間あれにあたって吹き飛びながらも回復した冒険者見てなければ攻撃魔法と思っただかもしれない。

「おっと、来たようだ」

と、築かれた防壁の一部が破壊される。まだ外側とはいえ、そこそこ頑丈に作っていた筈の防壁が宙を舞う。

そのまま連続して防壁が破壊されていく。

「はっはー！」

「うん、元気だね」

「あ？ ぐげ!？」

我が物顔で最後の防壁を突き破ってきた襲撃者を槍で殴り飛ばした。

「づう！ 貴様、【勇者】ブレイカー！ 何故ここにい！」

「明らかに人手が薄いのは誘っている。そこ以外を攻める……と、読んでくると思っているだろうな。その裏をかいてやる」

「っ！」

困惑する白装束に、骨を被った白髪の男。太陽を拒み続けたかのような病的な白さを持つ男は己の内面を読み取ったかのようなフィンの言葉に強張る。

「ただ裏をかくだけではつまらない。自分の圧倒的な力を見せてやる……そう考えて、わざわざ一番壁が分厚い此処を狙ったのかな？ これみよがしに見せつける兵力といい、見せびらかすのが好きなんだね？ おかげで解りやすいよ」

最もこれは、高い探知能力を持つベルに伏兵の有無を確認してもらったからこそ取れた手ではあるが。モンスターをどこまで精緻に操れ、どれだけ考えて行動してるかは、初めての事ゆえ情報がなかった。

「フ、ギイイイ!?!」

そうとも知らず全て掌で転がされていると感じたのか、男は忌々しげに唸る。

『彼女』に選ばれなかった凡俗めが、賢しげに吠えるなああ!!」

警戒していた赤髪の女ではなかった。が、その仲間と見ていいだろう。捕まえて、何者かを聞き出す。

「愚かな神々に啓蒙する愚者よ! 『彼女』に愛されし我が身と相対した愚かさを呪うが良い!」

「その『彼女』とやらについても、是非とも聞かせてもらいたいね」

ダン! と地面を蹴り迫る白髪の男。その速度からの推定、

第1級Lv. 5。特に力に対して自身があるのか文字通り力任せに拳を振るう。

一撃一撃がなるほど、確かに強力だ。ともすれば力だけならLv. 6に届きうる。が、それだけ。

「いっ!?!」

石突で顎を殴られ、よろめいた瞬間多頭とヘビが如く迫りくる槍の雨。一方的だった。一方的に男が押されている。

「馬鹿な、何故だあ!?!」

「弱者を甚振り強者を避ける……そんな戦いばかりしてきた者の戦い方だ。なぜそのレベルまで成長できたのか不思議でならないよ」

明らかに第一級の能力値アペリリテイなのに、戦闘技能は稚拙に過ぎる。ランクアップには長い年月をかける都合上、どうしたって戦闘経験を積まなくてはならないのに彼のそれは弱者を痛め続けた暴力性。

とても偉業をなしたとは思えない。何らかの方法で能力値アペリリテイだけを底上げしたかのような。

(そうなる、未だ姿を表さない赤髪の女もその手の類か? 報告にあった異常な堅牢さと回復能力、一致する点が多い)

もつと早く勝負をつけるつもりだった。しかし力以上に耐久が高い。おまけにつけた傷も回復を始めている。

「なるほど、これは確かに厄介だ」

これで戦闘技能まであつたらと思うと、笑えない。だが、親指の疼きは彼ではない。

「おのれえ！ 食人花！ ザイオラス その小人を食い尽くせえ！」

「逃げるのかい？」

「ぬかせ！ エニユオの甘言に乗るのは癪だが、『彼女』の為に私は果たすべき事があるのだ！」

エニユオ。また知らぬ名だ。人名か神名か……。話を聞く限り良好な仲ではないようだが……………。

「巨蟲!!」

「っ！」

男を追おうとしたフィンだったが腐食液を持つ芋虫が行く手を遮る。あらゆるものを溶かす最悪の液体を吐き散らすそのモンスターを、フィンとて無視できない。

追い打ちとばかりに食人花が芋虫に蔓を振りその身を破裂させ、飛び散る腐食液。後ろに飛び回避したが距離を取られる。

「感じるぞ！ 『彼女』の気配……貴様か！」

「いい!？」

褐色の犬 シアンスロープ 人の少女にまつすぐ向かう男。『彼女』とやらの気配が、彼女の持つアイテムから発せられているのだろう。

「あ、あっちいけ！」

「ぬっ!？」

犬 シアンスロープ 人の少女は抱えていたバッグをぶん投げる。腐食液を撒き散らす芋虫の方へ。

「ぬあああ!!」

これには流石に男が反応を遅らせる。自らの足を溶かしながら腐食液の水溜りをかけ、鞆を受け止めようとした瞬間――

「ぶっ!？」

グシヤリと何かに踏みつけられる。ベルだ。

男を浮島代わりに腐食液溜まりに着地しバックをキャッチしながら跳ねる。その衝撃で男がさらに沈んだ。

「ああ、バッグが溶けてる！」

腐食液をわずかに浴びたバッグの一部が溶け中身が溢れる。慌てて受け止めるベルだったが布も溶け中身が頭になった。

「……………カエルの卵？」

それは、半透明の球体に丸まった胎児。緑の皮膚に、女であること象徴するかのような髪。異様に大きな瞳でジツとベルを……………というよりは虚空を見つめている。

ブンブン上下に振ってみるベル。

「フィンさくくん！ どうしますこれ、もう割っちゃいますか！？」

「それは困る」

「え……………」

ゴッ！ と鈍い音と共に衝撃が走りベルが地面に叩きつけられる。地面が罅割れ、陥没しベルの頭部が半ばで沈む。

それでも足らぬとベルを叩きつけた赤髪の女はベルを持ち上げ再び叩きつけようとしてグニツと妙な感触に阻まれる。

「何だ、これは」

何時の間にか現れた緑の半球体。それが地面をベルの頭から守るように衝撃を飲み込んでいた。弾力を持ったそれは、ベルごと女の腕を弾き飛ばす。

「っー！」

「はあー！」

体を回転させ女の腕から逃れたベルは勢いそのまま蹴りつける。防いだ女だったが、ベルの足にも弾力のある膜が現れており、その弾力を用いてベルが女から距離を取る。

「頭割れるかと思った……………」

「だ、大丈夫かよ……………いや何で大丈夫なんだよ？」

「やだなあルルネさん、地面は鉄の塊じゃないんですから思い切りぶつけられても痛いだけですむに決まってるじゃないですか」

「普通は潰れるぞ!？」

ドクドク血を流すベルは傷を癒やしながら女を見る。女もまたベルを睨んでいた。

「頑丈な奴だ……その上、傷はすぐ癒やすときた。面倒な」

「貴方がそれを言いますか」

「……………」

お前も言うな、みたいな視線をベルに向けるルルネ。

「僕は治療師ヒーラーですからね。多少の傷は傷に入りません」

「時代と共にあり方を変えたか、厄介な」

いいえこいつだけです、とルルネは思った。

「まあいい、それを渡せ」

「嫌です」

ミシツとベルの持つ宝玉から嫌な音が聞こえ女が目細める。

「これが何か知らない。でも、これにこの町の人達を苦しめてまで手にする価値があるとは、僕は思えない」

ミシミシと音がなり、中の胎児が怯えるように身を震わせる。と……

「逆だ、小僧。この街に、『彼女』の手を煩わせる価値すら存在しない」「っ！」

腐食液に溶かされながら男が起き上がる。骨の兜は完全に溶け、彼もまた高い再生能力で溶けかけた顔が治っていく。

「は、お前……………その顔は!？」

その顔に見覚えがあるのか、ルルネは目を見開き叫ぶ。

「ありえねえ、だって……………死んだはずだろ!?! 千切れた下半身だつて、見つかったつて……………!」

「知り合いですか、ルルネさん……………」

「……………闇派閥」

「イヴィ……………」

「過去オラリオに存在した、邪神の眷属……………都市に破壊と死を振りまいた最悪の集団だよ。彼奴はその幹部、【白髪鬼ヴェンデッタ】、オリヴァス・アクト！」

白髪の男、オリヴァスはふん、と不敵に笑う。

「懐かしい名だ。だが私は愚かにも愚昧なる神々に踊らされていたあの頃とは違う」

「何が違うってんだ!? あの頃から何も変わらねえ、また死と破壊を振りまいて! 今回だって、こいつがいなけりや何人死んだと思つてやがる!!」

「くだらん。どうせ皆滅ぶ、遅いが早いかの違いだ。何より、何かと……………そう愚問を口にしたな?」

その顔に浮かぶ感情は……………優越感?

「何もかもだ! 私は『彼女』の代行者! 『彼女』より、種を超越した力を授かったのだ!」

再生中の体の前面。その胸、腐り落ちた胸の肉の奥に極彩色に輝く結晶。

「そうだろう、レヴィス?」

「くだらん。お前は冒険者の相手をしていろ、あの兎は私が狩る」

『彼女』の力の一端にあのような小僧が触れていることが問題なのだ。早急に離さねば、二人で行くぞ」

「……………」

どうやらこの二人はあまり仲が良くないらしい。ベルはチラリと視線を別の方向に向ける。

「フィンさん!」

剛速球。

突然の行動に第一級の力を持つ怪人達すら反応に遅れ、ベルが叫んだ名からフィンの方へと振り返る。だが……………

「うん、手に入れたよ」

僅かに角度がずれており、受け止めたのはアイズ。フィンに向かうべく隙だらけのオリヴァスを吹き飛ばし、ベルに向かおうと己に背を向けるレヴィスに迫る。

「なめるな!」

「っ!!」

急制動、からの反撃。圧倒的な身体能力を持ってして行かう駆け引きとも呼べぬ力技。

「テンベスト目覚めよ!!」

宝玉を上投げ、《テスペレート》を両手に構え放つ風を纏いし一撃。レヴィスが風に飲まれ吹き飛ばされ水晶の柱に激突した。

「アイズさん!」

「大、丈夫……あ、宝玉」

ゴン、と音を立て地面に落ちる宝玉。慌てて取りに行こうとする二人。と……

「今の風……」

水晶の瓦礫を押しつけレヴィスが立ち上がる。ベルと……そして同様でなくとも同量の感情を乗せた瞳でアイズを見据える。

「お前が『アリア』か……?」

「——!!」

その名は、アイズにとって無視の出来ない名前。ロキやフィン、リヴェリアとガレス以外はアイズと関連させることなどありえぬ名。

じゃあ……彼女是谁だ?

エルフに頼るのは間違っているだろうか？

アイズが『アリア』の名に動揺する中、アイズの風に反応したのは彼女だけではなかった。

『アアアアアアア——!!』

宝玉の中の胎児が不気味な叫び声上げる。

ギョロリと双眸がアイズを見据え、己を包むガラスのような半透明な膜をすり抜けアイズに襲いかかりベルが受け止める。

「——!?!」

ゾブリ、と溶けるように輪郭が曖昧になりベルの腕と融合していく。嫌悪感からほぼ反射的に治癒魔法を使うとその身はあっさり剥がれる。すぐさま放り投げるベル。胎児は芋虫に激突した。そのまま溶けてくれるかと思いきや、今度は芋虫と融合する。

「っ!!」

その芋虫を破裂させようと石を拾うベル。投げつけようとして、慌てて振り返り後ろから迫ったオリヴァスに対処した。

「ええい！ 何もかも台無しだ！ せめて『劍姫』…いやさアリア、貴様だけでもおお!!」

「……………私は、アリアじゃない」

アイズへと向かうオリヴァス。対処するために風を纏うアイズ。強さで言えばレヴィスが上だが、その膂力は決して油断していい相手ではない。

『彼女』が貴様を求めているのだ！ 大人しく軀を寄越せ！」

「アイズさ——っ!!」

援護に向かおうとして、芋虫の接近に気付く。その身の輪郭を泡立つように変化させながら手当たりしだいに暴れていた。

「モンスターを、食べてる？ 強化種……………!」

他のモンスターの魔石を喰らい、冒険者達のランクアップが如く力を増していく特殊な存在。エイナから教えられた知識を思い出し思わず叫ぶ

芋虫はその身を膨張させながら、やがて一つの形を取る。

「オオオオオオオオオオオオツ!!」

人間の女性を彷彿させるシルエツト。扇のような4枚の腕部。盛り上がったその体高は5メートル程。後頭部に髪のように生えた管のような器官からドロリと腐食液を溢しアイズに迫る。

「!?」

その身がガクリと停止する。

「殺して、駄目なら………!」

芋虫の原型を保った下半身。その一部を掴みその巨体の動きを止める。指を食い込ませた場所から腐食液がこぼれ手を溶かすが溶けきる前に治し、ビキリと地面に亀裂が走るほどの踏み込み。

「飛んでけえええ!」

「アアアアアア!?!」

超大型級の巨体が宙を舞う。リヴィラの街を、防壁を飛び越え森の中央に落ち、その衝撃が腕部から鱗粉が撒き散らされ爆発した。

「オオアアアア!?!」

その爆発の中でも叫ぶ元気があるようだ。大きさだけでなく耐久にも変化があるようで、再び戻ってこようとする。女体型にベルはヘスティア・ナイフを構える。

傷をつければ腐食液を撒き散らし、殺せば破裂。広範囲を爆散させる厄介な鱗粉。有効な対処法は、魔石の破壊。

治癒魔法による探知の応用で魔石の位置は掴んでいる。

「ふう——」

やり方はあの時と似たようなもの。ヘスティア・ナイフに治癒の魔力を貯めていく。

「!!」

「ガア!」

「ピィー!」

その魔力に反応し迫る残った極彩色のモンスター達。

「おおおりゃあ!」

「【アルクス・レイ】!!」

それをティオナとレフィーヤが吹き飛ばした。

「念の為聞くけど、爆発させないよね？」

「そのつもりです。時間を稼いでください！」

「おっけー！ レフィーヤ、いっくよー！」

「私、後衛なんですけど!? でも、解りました！」

幸いにしてベルの魔力が余程魅力的なのか短文詠唱による魔力程度なら見向きもしない。ちよつとムカつく。

「わ、私だって長文詠唱ならあなたより魔力だしますし！」

一体何を張り合っているのだろうか？

そうこうしてる間に魔力が貯まる。ヘスティア・ナイフから溢れる深緑の魔力の粒子。

ただ放つ、だけでは足りない。薄く、鋭く、研ぎ澄ませる。

「ああああー！」

放たれる緑の三日月。

地面を切り裂きながら女体型に迫り、その身を通過した。

「ちよお!? あ、あれ、爆発するんですよ!!」

レフィーヤが叫びながらベルを物陰に隠すために駆け出し、しかし違和感に気付いた。

女体型が腐食液を吹き出さない。外した？ いや、地面に刻まれた斬撃のあとからして間違いなくあたっているはず。その証拠と言わんばかりに、女体型が死んだ。

腐食液を撒き散らすことなく、灰となって崩れ落ちた。

「何をしたんですか？」

「治癒魔法の斬撃で体を斬ってすぐ治して魔石のみを破壊しました！」

「あなた治癒魔法の定義知ってますか!？」

「? 傷を治すんですよね。だからこれも治癒魔法のはず！」

だってウサト兄さんも殴ってすぐ治してたから！ そう叫ぶベルに、レフィーヤはそのウサトなる何者かのせいでこの子が治癒魔法を勘違いして育ったのかと、まだ見ぬ男に少し怒りを覚えた。

「残りの芋虫もこれで……………っ!？」

と、芋虫を完全に無効化できるベルに向かってレヴィスが太剣を振

るう。下からナイフを叩きつけ流すベルの腹をそのまま蹴りつけた。

「ご、あ……！」

「しぶとく、強く、巨蟲ヴィルガの特性を無力化する、か………お前が一番厄介だ」

オリヴァス程アイズ……或いは『彼女』とやらの声に頓着していないのか、ベルを狙ってきたレヴィス。

その特性から冒険者にとって最も厄介なはずの芋虫の完全なる天敵であるベルを静かに見据える。

「けほ……！」

「そこに治療師ヒーラーという要素も組み込むと………ここで殺しておくか」

再び大剣を振るう。余波だけで余った木材や乱立する水晶が砕け散る。その脅力はオラリオで出会った中でもトップクラス。

「だけど、それだけだ！」

もつと速く、もつと重い一撃を知っている。

だから勝てる、などと寝言は言わないがなんとか見える。見えるなら反応できる。反応できるなら対処できる。

Lv. 1と無名の戦闘とは思えぬ戦い。

どちらも並の中層モンスターすら葬る程の一撃を連続して相手に叩き込む。鉄と鉄がぶつかり合う音が響き、地面が、廃材が、岩が、モンスターが巻き込まれた碎けていく。

「解き放つ一条の光、聖木の弓幹。汝、弓の名手なり」

「……!!」

聞こえてきた詠唱うたにベルは即座に戦闘スタイルを剛から柔に切り替える。押し切るためでなく、その場に留めるために。

「[アルクス・レイ]!!」

放たれるは速度重視の魔法。『魔導』のアビリティを持つ為強化された、自動追尾の回避不能の一撃。レヴィスは片手で受け止めた。

「な!？」

質量を持つ魔法の光を、迫ってきたベルに叩きつけた。

「があ!？」

爆音とともに土煙が上がり地面が揺れる。クレーターの中央で倒れるベル。装備のコートの質が余程良かったのか、コートはボロボロだがその下はわずかに焦げる程度。だが、衝撃は十分内部にも届いた筈。息がでえず痙攣するベルの頭部を踏みつけるレヴィス。

そのまま力を込めていき、ベルが片手を上げる。とはいえこの角度では腕にろくに力も込められまいと、レヴィスは更に足に力を込めながら大剣を振り上げ……

「っ!!」

ベルが地面を殴った。そのまま寝返りを打つかのように回転してレヴィスの足を殴りつける。

簡単な話、押さえつけるには押さえつけるものが壊れないものでないといけないのだ。オラリオならアマゾネスの姉妹、ドワーフの戦士、狼人の青年、最強の武人など、地面に押さえつけただけなら力任せに脱出する者もいる。ベルもまた、その一人ということだ。

片足の骨が砕け、傾くレヴィスにナイフを振るう。大剣とナイフがぶつかり合い火花を散らし、大剣が砕けレヴィスが吹き飛ぶ。

「レフィーヤさん………」

「な、なんですか?」

「時間は稼ぎます、とびつきりの魔法をお願いします」

ベルはそう言つて、ヘスティア・ナイフを構えながら傷を癒やす。

「私なんかの魔法じゃ………」

「卑下しないでください。短文詠唱の威力は低くて当たり前、次は長文詠唱を撃てばいい」

「か、簡単に言わないでください!」

「簡単じゃないから、あなたに頼みます」

ベルは真つ直ぐレフィーヤを見つめる。赤い瞳に見つめられ、思わず息を呑むレフィーヤ。

「あなたは自分の未熟を知っている。誰よりも、誰かの力になれないことを嫌ってる。僕と同じだ………でも、だから。僕は貴方を、この場の誰よりも信頼できる!」

「——!!」

初めてあつた時は、恐ろしい人。なにせあのベートと殴り合つたのだから。次は、無礼なヒューマン。いきなり人のことかつさうしおかげで乙女にあるまじき悲鳴を上げたし。

リヴィラで見た時は、羨ましい人。

強くて、頼りにされて、アイズさんに何故か気に入られてて。羨ましくて妬ましくて、それでも間違いなく強くてきつと、自分のように先行く人を必死に追いかける者の気持ちなんてわからないだと、勝手に思った。

「……あなたにも、追いつきたい人がいるんですね」

「はい。僕なんかより全然強くて、その人達がここに居てくれたら、そう思っちゃいます」

もしここにいたのがベートなら、ガレスなら、そうでなくても二軍の誰かなら、きつともつとうまく立ち回つたろう。そう思わずにはいられない。でも

「でも——」

「追いかけない理由にはならない」
「！」

言葉が被り、驚いたように振り返るベル。その表情は年相応に子供のように、思わず微笑み……キツと前を睨む。

「詠唱します、私を守ってください！」

「はい！……ここから先、誰にも貴方に触れさせない。誰にも貴方を傷つけさせない！」

彼が憧れる兄弟子が見たら呆れるようなことを平然と口にしながら駆け出しベル。土煙の奥から武器を失い拳を握りしめたレヴィスが駆けてくる。

ぶつかり合う二人。それだけで衝撃波が発生する。

【誇り高き戦士よ、森の射手隊よ】

レヴィーヤは静かに、しかしよく通る声で、力強く詠唱を開始した。

怖がらないのは間違っているだろうか？

「押し寄せる略奪者を前に弓を取れ」

背後から聞こえる詠唱。魔法を発動されるために紡がれる歌。その魔力を感じ取り、厄介と判断したのかレヴィスがレフィーヤを先に潰そうと駆け出す。

「同胞の声に応え、矢を番えよ」

第一級の敵意。第二級で、後衛のレフィーヤからすれば恐ろしい筈のそれを、しかしレフィーヤは恐れない。

「はあー」

「ちいー」

ベルのナイフが迫り、砕けた大剣の僅かに残った刃で受ける。

獲物を失ったレヴィスと獲物が健在のベルでは、僅かにベルに軍配が上がる。それでも決定力にかけるが……。だからこそ、レフィーヤを傷つけさせない。レフィーヤもまた、そんなベルを信じる。

「帯びよ炎、森の灯火」

殴り、殴られ、斬りつけ、斬られ。しかしどちらもすぐに癒やす。そして、それには明確な差が生まれ始める。

「ちいっ！」

レヴィスの傷の治りが遅くなっていく。ベルの魔力にはまだ余裕がある。

「撃ち放て、妖精の火矢」

溢れ出る魔力はレヴィスが発動させまいとするには十分で、当然極彩色のモンスターはその魔力に反応する。

「その人に、触れるな！」

レフィーヤに迫る蔓を、牙を、全て切り捨てその残骸を芋虫に投げつける。接近されれば片手に貯めた治癒魔法弾を投げつけ吹き飛ばす。

岩肌につけた傷も回復し腐食液を撒き散らせなかった芋虫はベルの治癒魔法により癒やされていき、その魔力に惹かれた同族に噛み

付かれ腐食液を彼等に浴びせる。

「あー!」

己に背を向けたベルをレヴィスが蹴り飛ばした。背骨が砕け、内臓が潰れる。

「雨の如く降りそそぎ」

詠唱はまだ完成していない。魔法は放たれない。起死回生の一手をここで潰すと走り出そうとしたレヴィスだったが何かに足を取られる。

それは食人花の蔓。反対側を握るのは、ベル。斬った食人花の蔓を利用したのだ。

「蛮族どもを焼き払え!!」

「飛んでけええ!」

レフィーヤの詠唱が完了すると同時に、逃げ場のない空中に投げ出されるレヴィス。

壁はない。足場もなく、回避は不可能!

「ヒュゼレイド・ファラーリカ!!」

詠唱通り、雨の如く降り注ぐ炎で構成された大量の矢。本来なら広範囲に振りまかれる炎の豪雨がレヴィス一人に降り注ぐ。

「!!」

連続して響く轟音。炎に飲まれ、姿が見えなくなる。

「やりましたか!」

「湖に落ちました。生死までは確認できませんでした…」

レフィーヤの言葉にベルは苦虫を噛み潰したような顔でいう。レフィーヤはそうですか、と息を吐く。

「数もだいぶ削れてきましたね、あと少しです」

「はい。いってきます!」

ベルはレフィーヤにマナポーションを投げ渡すと残りのモンスター達のもとに駆け出した。

「はっはあ! どうした【劍姫】、これが、この程度が第一級かあ!」

純粋な技術ならアイズが勝る。だが異様な打たれ強さ、再生能力、ヒューマンとは思えぬ膂力はアイズを上回る。

「やはり神などに従う愚か者などこの程度だ！ 『彼女』の寵愛を受けし私こそ、至高の——!!」

仰々しく語りだしたオリヴァスに、巨狼がその爪を叩きつける。

「貴方は……………」

「……………」

ベルの連れていた狼型の魔物。灰色の毛並みを持つ大型級。啞えていた食人花の首をベツと吐き捨てる。チラリと何処かを一瞥した。

「……………」

視線を追うと、地面に刻まれた斬撃の跡が見えた。ベルが放った緑の斬撃……………アイズはあれを思い出す。

「そつか……………ありがとう」

「……………」

アイズのお礼に何を思ったのか、狼……………フェルは残りのモンスターに向かつて駆け出した。

攻撃自体はアイズの方が当てている。頑強さと回復力で互角に持ち込まれているだけ。なら、やり方を変える。

「こう、かな……………【目覚めよ】」

アイズを包むように巻き起こる風。それが全て剣に集まり、速度と密度を増す。圧縮された空気が屈折率を持ち、アイズの持つ《デスペレート》の輪郭を歪める。

「おのれええー！」

瓦礫から飛び出してきたオリヴァスはフェルの姿を探し、しかしこの場にはいないことに気付き舌打ちするとアイズに向き直る。

「まあいい、まずは貴様からだ！」

アイズは動かない。動けない。こんなやり方初めてだから。主神に騙され名付けた技、《リル・ラファールガ》の、限定展開。

「グラ・トルベジーノ」

圧縮された風がオリヴァスの脇腹の一部を削り取り——爆発した。

「——あ？」

キョトンした顔で宙を舞うオリヴァスの上半身。胸より下はない。地面に倒れた下半身も足のみで、腹部が完全に消失していた。

あまり実戦向きとは言えない。たぬが長いし、動けない。己の力を過信したオリヴァスだから通じた技だ。改良の余地あり……………。

「でも、終わり」

「っ！ヴィオラス 食人花ウー！」

「っ!？」

勝利を確信したアイズだったが……………否、間違いなくアイズの勝利であったがオリヴァスは深層のモンスターもかくやというしぶとさで叫び、食人花を呼び寄せて、その身を啜えさせ、逃走した。

「逃さない！」

「私を守れえ!？」

アイズが追おうとすれば無数のモンスターがオリヴァスを守るために動く。このままでは逃げられる！

とアイズが思った瞬間、一本の槍が食人花ごと口の中のオリヴァスを貫き地面に固定する。

「が、あ……………!？」

「己が優位の時はしつこいぐらい攻め立てるのに、劣勢になれば逃げ出す。変わらないね、ヴァンデッタ【白髪鬼】」

「ぶ、勇者!!」

オリヴァスは己を見下ろすフィンに憎々しげな目を向け、逃れようと必死に腕に力を込める。

「さて、流石に吹き飛んだ体を再生は出来ないようだけど、それでも元気だね。まだまだ治りそうだし、どうするか」

「関節を外すといいですよ。僕等みたいに自分で回復できる人は、それが一番です！」

と、ベルがやってきてオリヴァスに向かって歩いていく。

ゴグ、ボグ！ ボギツ！ギャア！ア、オモツタヨリモロカッタ グン！

「終わりました！」

肩と肘と手首の関節を外され腕をだらりと垂らすオリヴァス。フィンは引きつった顔でベルを見る。

「う、うん。ありがとう……とりあえず、地上に戻ったら色々聞かせてもらおうか」

「っ！ なめるなよ、人間が。例え私を捕らえたところで、『彼女』の寵愛を同じくするレヴィスが——!!」

ボツ、とオリヴァスの頭部が消える。残された顎と舌がビクビク動く中、フィンとベルは投石が飛んできた方向に振り返る。

森が広がっている。これでは大まかな方向しか……

「オオオオオ！」

と、生き残った食人花の一匹がオリヴァスの胸を食い千切り、逃げ出す。元々街の端近く。完全に意識が別の方向に向いていたフィン達は反応が遅れ、食人花を逃してしまう。

「やられたな。口封じか……」

「それだけ、ですかね……」

「胸の魔石の事かな？」

フィンの問いかけにベルは頷く。

モンスターは魔石を喰らえば力を増す。オリヴァスの魔石もその法則に当てはまるのかわからない。だがもし当てはまるなら……それを、恐らく同じく魔石を持つであろうレヴィスが喰らったなら……

「厄介なことになりそうだね、流石に7年前の再来になるとは思いたくないけど」

「7年前？」

「こつちの話さ。君もこの街に住んでいれば、いずれ知るだろう」

オリヴァスが纏めてくれたおかげで残党は処理できた。後はフィスが勝利宣言する。指揮官の役目の一つだ。

「グルル」

「あ、フェル。お疲れ、じゃあ怪我人を治しに行こっか。結構疲れたよ。マナポーションも殆ど使ってるから、背に乗せて？」

「ワフウ」

仕方ない、と言うようにベルを啞え器用に背に乗せるとノツシノツシと歩き出した。

「……………」

そんなベルをじっと見つめるアイズ。

そうだ、お礼しようと思えそうとする。オリヴァスに勝てたのは、彼が意図してなかったとしても彼が見せてくれた技のおかげなのだ。

「あ、アイズさん！」

そんなアイズにベルも気づき、フェルの背を撫でるとフェルが察して向かってくる。が、アイズは思わず固まる。

『アリア』の名を聞き、追い詰められ、黒い感情が沸き立った今の自分が、無垢な笑みを浮かべてきた彼に触れていいのかと迷ったからだ。事実自分は、彼に逃げられてきた期間もあった。

「……………アイズさん」

「え…………」

と、思わず立ち止まり後ずさったアイズにベルがフェルの背中から飛び降り両手を優しく包むと己の額に当てる。

「大丈夫、怖くありません」

「え、あ……………え、つと…………」

「怖がったりしません。怖がらせちゃうかも、そう思ってあげられる優しい人なんですから」

アイズの内心を読み取ったかのようにあて、安心させるように優しく語りかけてくる。

「私は、優しくなんか……………」

「優しいですよ。今も、僕を気にしてくれている。だから、何度だっていいですよ……………僕は、貴方を怖がったりしない」

それじゃ、とベルは怪我人の治療に向かった。

「アイズ、ここに居たのか……………アイズ？」

レヴィスは間違いなく己より強い相手。オリヴァスに勝てたのも、

彼が油断していたから。自分は弱い、もつと強くならなきゃ、そんな黒い衝動は何時の間にか消えていて、残ったのは……

「リヴェリア」

「何だ？」

「あの子連れて帰っちゃ……駄目？」

あの白が欲しいという想い。

「ああ、駄目だ」

だけど駄目だった。

「追いついたぞ、この糞パルウムがつー！」

「ぎっ!?!」

L v. 1とはいえ、アビリティCを超えた冒険者の蹴りは小柄な少女を簡単に吹き飛ばす。

呻くこともできず痛みには震える。起き上がろうとした頭を踏みつけられ石畳にぶつけ、視界に火花が散った。口の中に血の味が広がる。

「くそ、くそが！ なめやがって、サポーター風情が見下しやがって！」

苛立ったように何度も何度も蹴りつける。少女もまた恩恵を授かっている。そうでなければ死んでいただろう。

いや、どのみち死ぬだろう。このままでは。

手加減なんてない。殺す気もないのだろうが、止める気もない。殺したらどうするのか、慌てて逃げるのか開き直って死体を隠すのか。自分でも驚くぐらい冷静だ。これで、漸く終われるという淡い期待があるからだろうか？

足が振り上げられる気配。あ、これ死ぬ。

そう思った瞬間、ゴツ！ という音が聞こえた。蹴りは、来ない。「大丈夫ですか!?!」

片目は腫れ、もう片方も血で滲み良く見えない。見えたのは、白。それがなにか確認するまもなく、少女は意識を失った。

「……………なんですかあ、これ？」

起きたら『私は肋骨が折れてるのに気付いていながら他の人の傷を治すのに魔力を使いすぎ、折れたまま地上に戻りました』と書かれた板を首にかけて白髪の少年が銀髪の女性の前で正座していた。

小人の盗人

サポーターと契約するのは間違っているだろうか？

少女、リルルカ・アーデは小柄な女性に仁王立ちで立たれ小さくなってる兎のような少年を見つめる。

自分より大きいのが、年下だろう。髪は白髪だが、老人のように抜け落ちたというより処女雪のように白い。

生まれつきなのだろう、若いし。

「それで？ 肋骨が折れていたのも、それを無視して他の人を優先したのもまだ許しましょう。なぜ地上に戻って、わざわざここに来て、そのまま帰ろうとしたのですか？」

「ほ、ホームにはマナポーションもあるので……」

「ええ、でしょうね。しかしわざわざ怪我人をここに運んできたのだから、ここで買えば宜しかったでしょう」

マナポーション？

怪我には普通ポーションだろう。となると彼は治療師^{ヒーラー}。治療魔法の使い手で、己より他人を優先して治し精神枯渇寸前になり己の怪我を放置した、と………治療師なら冒険者に脅されて、と既視感を覚えかけるが、違うだろう。

この世の汚れなんて知らない、幸せ者の目だ。

内心の嫌悪を押し殺し、リルルカは二人に話しかける。

「あの………」

「自分がどんな状況でも他人を思える、そこに好感は覚えますが………ああ、目が覚めました。何か不調はございませんか？」

「全部治したつもりですけど、痛いところはありますか？」

「はい、大丈夫です。ええつと、ここは？」

「ここは『ディアンケヒト・ファミリア』の経営する治療院です。私は団長のアミッドと申します」

「『ディ、ディアンケヒト・ファミリア』!？」

大手【ファミリア】御用達の、高額の!？」

そんな大金払えなくはないが払いたくない。

そんな考えが顔に出ていたのか、女性は白髪の少年を見る。

「代金は彼が払ってくれました。と言つても、個室の使用代だけですが」

「……………え？」

「彼は『ディアンケヒト』の団員ではありません。【ヘスティア・ファミリア】の冒険者です。たまにここで働いてもらっていますが、今回は非番なので代金の有無は彼の一存です」

「え、お金なんて別にいりませんよ。好きでやったことです」

「……………そうですね。ただ、仕事としてやる時はきちんと代金をもらうんですよ。あなたの【ファミリア】は余裕があるとは言えないのですから」

派閥が別になつちやつた弟を心配するお姉ちゃんかな？

お金はいらないと言い切つたベルに微笑み頭を撫でるアミッドを見てリリルカはそう思った。というか……………

「冒険者？ 治療師ではなく？」

「ええ、自分で自分の傷を癒やしながら戦い続ける、戦場を駆け回る回復員です」

ナニソレコワイ。

いや、しかし冒険者、か……………。

「助けていただきありがとうございますございます冒険者様。リリはリリルカ・アーデと申します。リリは、お礼に何をすればいいでしょう？ サポーターのリリに出来ることなど限られています」

ニコニコ微笑み下手に出るリリルカ改めリリ。冒険者を相手にするのだ、謙るぐらいが丁度いい。何を目的としているのかは知らないが、自分からこれ以上奪えると思うなよ、そんな感情を表に出さぬよう務めるリリに、少年も自己紹介をする。

「僕はベル……………ベル・クラネル。お礼なんて、気にしないで。僕が好きでやってることなんだから」

「……………え」

だがベルはあっさりと報酬を断る。

「え、あの………え？ リリは、サポーターですよ？」

「？ うん、聞いたよ？」

サポーターとはダンジョンにおける非戦闘員。魔石やドロップアイテムといった戦利品を回収する荷物持ち。戦えぬ弱者が選ぶ道と蔑みの対象になる専門職。

「そういうことですか」

「どういうことですか？」

「彼女を襲っていたという冒険者、彼女がサポーターだからこそ暴力を振るっていたのでしよう。自分には勝てないであろう相手だから。もつとも、その原因は定かではありませんが」

「っー」

アミツドの一瞥にリリは息を呑む。気付かれている？

いや、明確な確信こそ持っていないが、何かをしたとは思われている。

そりやそうだ、街の住民は勿論「ガネー都シヤ市・ファミリア憲兵」の目のある地上に出てまでサポーターに暴力を振るうなど、余程のバカでなければそのサポーターに何かをされた者だけ。

あの冒険者は馬鹿の類だが、会っていない彼女からすれば冒険者もリリも疑う。

「自分には勝てない相手に………」

ベルが明らかに不機嫌な顔になる。弱い者を我欲で甚振る者が許せないというように。でもどうせ貴方も冒険者なんだろう、とりりは思った。

なるほど、きつと駆け出しだ。だからまだ無垢。でもすぐに力に溺れる。戦う力を持つが故に、戦わぬ者を嘲り、自分が誰かより強い、力で支配できるという快感に溺れる。そうに決まってる。

「お礼を気にするなど言われても、冒険者様に助けられ何もしいないなんて知られたら、それこそリリはもつと追い詰められてしまいます」

「え、そうなの？ じゃあ………どうしよう………」

「お金を受け取りたくないというのなら、どうでしょう。リリを雇いませんか!？」

「雇う？」

「はい。リリは新しい冒険者様に雇ってもらえるというメリットもあります。どうでしょう？」

リリの提案に考え込むベル。アミッドはジッとリリを見つめる。

「……どうするか決めるのはベルさんです」

「ううん。じゃあ、お願いしようかな。フェルは荷物運びは出来ても回収はできないし」

「……そうですか」

アミッドとしてやはりまだリリを疑っているようだ。

まあ別に良い。バレたところで、それでもいい。

「よろしくね、リリ」

ただの八つ当たりだ。気に入らないだけだ。

どうせ汚く染まっていくこの真つ白な冒険者に、最初に泥をつけるのが自分なら、ほんの少し満たされる。

「はい、よろしくお願いしますね、ベル様！」

『ベル・クラネル

L v. 1

力：I 8 4 ↓ H 1 6 2 (+78)

耐久：E 4 2 1 ↓ D 5 3 4 (+113)

器用：E 4 1 8 ↓ E 4 5 8 (+50)

敏捷：D 5 0 1 ↓ D 5 6 2 (+61)

魔力：D 5 2 7 ↓ C 6 0 1 (+74)

《魔法》

【治癒魔法】

・ 速攻魔法

・ 治癒魔法

・ 怪我、病気、毒の治癒

・ 使用魔力量により効果変動

「系統強化：他者への効果上昇

「系統劣化：自己への効果上昇

〇

《スキル》

リアリス・フレシゼ
【憧憬疾駆】

・早熟する

・憧れが続く限り効果持続

・憧れの丈により効果向上

アスクラピウス
【蛇ノ血】

・治癒魔法の効果向上

・治癒魔法に対呪詛性能付与 』

(トータル300オーバー!?)

特に耐久の上がり幅が高い。続いて魔力、敏捷。

かなりのダメージを追い、回復しながら、恐らく他の誰かの怪我を治すために魔法を使い続けたのだろう。

「ベル君、一体何があったんだい？」

「そうですね。一言でまとめると、モンスターの群れと凄く力の強い人が攻めてきて、冒険者の皆さんを回復させながら走り回ってたらその人にボコボコにされちゃいました」

「ベル君ってロキのところの第一級にも勝ったんだらう？」

「酔ってましたけどね」

あと油断してた。

とは言うが、ベルを追い詰められる存在なんてそうないないだらう。

「うくん。ベル君の救命団衣もボロボロになったし、新しい防具を買ったほうが良いかもね。そのへんはアドバイザー君に聞いてみたらどうかな？」

「というわけでエイナさん、なるべく安く中層でも使える防具って何処で買えますか？」

「中層……？ いや、うん。ベル君だもんね………18階層でも大活

躍した白髪の冒険者だもんね」

18階層での異常事態イレギュラーの翌日、訪ねてきた担当冒険者の言葉にエイナは頭を抱える。なんで冒険者になって一年どころか一ヶ月も経つてない少年が中層に行くことを視野に入れてるのだろう。

でも実は怪物祭モンスターフェアの際にLv. 1とは思えぬ動きをしていたベルを見ているエイナ。

「中層に通じるかどうかは置いて、掘り出し物を安く仕入れる場所なら知ってるよ。掘り出し物だから、運と見る目が重要だけど」

「本当ですか!? じゃあ、その場所を……!」

「うくん………ベル君、明日開いてる?」

「午後からはダンジョンなので、午前中で良ければ」

それぐらいなら、時間も十分だろう。とエイナは頷く。

「じゃあベル君、明日少し時間もらえるかな? 案内するよ」

「わかりました。デートですね」

「ふえ!」

サラリと言われ言葉にボツ、と赤くなるエイナ。ベルもハッと気付く。

「ご、ごめんなさい! 何時もの癖で、つい!」

「い、いや別にいいの! って、何時もの? ふうくん、癖になるほどデートしてるんだ、ベル君って」

「はい、お姉ちゃん達とローテーションで……」

「あ、ああ………お姉さんか。ベル君、お姉さんいたんだね」

「はい、沢山!」

想像できるな、姉達に可愛がられる末っ子のベル。なんとなく、悪い意味でなく女性との間に壁を感じないのはその姉達の影響なのだろう。

防具を買いに行くのは間違っているだろうか？

オラリオ北部、大通りに隣接するよう設けられた半円形の広場にてベルはエイナを待つ。

女性と二人つきりのお出かけは久しぶりだ。今度神様やアミツドさん、アーデイさんなんかも誘おうと、異性が二人で出かけることに対する認識が一般人とズレている事に気付かないベル。

「おーい、ベルくーん！」

時間になり、エイナが駆け寄ってきた。

「おはよう、来るの早いね。なあに、そんなに新しい防具をを買うのが楽しみだったの？」

「いえ、エイナさんと二人きりでお出かけなんて、楽しみで目が冴えちゃって」

「あ、そ……………そう。そっか……………な、なんか照れるなあ。えへへ」
「……………？」

ベルの言葉に顔を赤くしてなんとか笑みを浮かべるエイナ。何故そんな反応をするのかわからないベル。団員が女性一人のミアハ様ならこういうった女の子の反応についてなにか知ってるだろうか？

「それにしても……………」

「こ、今度は何……………？」

「いえ、何時ものピシツとした制服姿のエイナさんも素敵ですけど、今日は年相応に可愛らしいなって思いました」

「……………！」

「赤!? だ、大丈夫ですかエイナさん! ね、熱でも……………！」

「だ、大丈夫! ほんと、大丈夫だから!」

プシユウ、と頭から湯気を出しかねないほど真っ赤になったエイナを見てオロオロしだすベル。何だこの怪物、誰が育てた。

「も、もうベル君! かわいいとか、素敵とか、そういうのは誰にでも言っていることじゃないんだからね!」

「はい。だからエイナさんにはしつかり言っておこうと思って」

「~~~~!!」

ビシツと指差し叱ればものすごいカウンターが帰ってきた。顔をさらに真つ赤にしハクハクと口を動かすエイナ。

手でも繋いでからかってみようかな、と思っていたが今は無理だ。手なんて繋げない。

「それじゃあ、行きましよう」

「ひゃうわああああ!」

「ええ!」

繋げないけど繋がれた。色んな感情が爆発しそうなエイナの叫びにベルがたじろぐ。

「あ、えっと……もしかして、嫌でしたか?」

しょんぼり落ち込むベルに思わず垂れたうさ耳を幻視する。そんな顔されるとこつちがいけないことをした気分になる。

「ち、違うの! 確かにエルフは肌の接触を嫌がるけど私は別にむしろベル君とだったら嬉しいじゃないから安心して!」

早口でまくしたてるエイナ。とりあえず嫌ではないことがわかって一安心。

「良かった……それじゃあ改めて……行きましようか、エイナさん」

今度は手を繋がず差し出すだけ。エイナを気遣ったのだろう。何というか、年下なのに大人だなあと思いながらその手を取る。

「あ……あの、そういうえば何処に向かうんですたっけ?」

「……………」

訂正、まだまだ子供だ。

困ったように頬をかくベルを見てエイナは微笑む。

「もう、しょうがないなあ。こつちだよ、ベル君」

こういうところが、放っておけないんだよなあ。

バベルはダンジョンの『蓋』の役目を持つ。それと同時に、冒険者のための施設でもある。シャワールーム、簡易食堂に治療施設、そして換金所。

そして空いたスペースをテナントとして商業者に貸し出す。その一つが「ヘファイストス・ファミリア」で、今回の目的の店。

「ベル君？ その戦闘衣バトルクロスがどうかしたの？」

その店に並ぶ白い戦闘衣バトルクロスという……一見すると服のようで、造り手によって凡庸な鉄の鎧すら超える強度を持つ品を見ていた。

「こういうのって、オーダーメイドだとやっぱりよりお金がかかるんでしょか？」

「うん。そうだね……デザインを指定すると、やっぱりその分お金がかかるよ」

「……………ですよね」

ベルの防具。オラリオのものとはまた違った戦闘衣バトルクロスにも似た丈夫な服。彼がオラリオに来る前に世話になった救命団という組織の正装。

18階層の事件でボロボロになったらしい。中層でも使える装備を、とは言っていたが本音は新しい防具は似たようなものが良かったのだろう。

「もつと稼げるようになれば、好きなデザインで注文もできるよ。

「ファミリア」によっては大量発注する制服にしたり、「ロキ・ファミリア」みたいに全部オーダーメイド、なんてところもあるからね」

どの道お金が必要ということだろう。仕方ない、名残惜しいけど又の機会に……

『神秘』のアビリティとかに目覚めたら、治癒魔法で再生する服とか作れないかなあ」

ここに来る途中聞いた、『発展アビリティ』なる恩恵効果の一つ、『神秘の奇跡』を思い出し呟くベル。

因みに『神秘』のアビリティを持つ歴史的有名人の『賢者』と呼ばれる存在は永遠の命を手に行ける賢者の石を主神に砕かれ笑われたらしい。

「もしその人が無限の寿命を手に入れて今も生きてたら、作れたんですかね」

「どうだろう。『神秘』で作られる魔法道具マジックアイテムはなんでもありと思えるほ

「どらしいし、ひよつとしたら出来たかもね」

「そうですね。でも、永遠の命は手に入らなかったんですよ……」

「エイナの言葉に残念がるベル。と……」

「いらつしやいませー！ 今日御用は何でしょうか、お客様！」

「店員の女の子が声をかけてきた。」

「可愛らしい黒のツインテールを結びリボンには鐘がついており、小さな体躯に不釣り合いな大きな胸。」

「……………何やってるんですか、神様」

「その少女は、ベルの主神であるヘステイアであった。」

「べべ、ベル君?! それにアドバイザー君?! どうしてここに!?!」

「こっちの台詞なんですけど!?! 僕、リヴィラの臨時治療院で結構稼いできましたよね?! なんてバイト増やしてるんですか!?!」

「い、いやあその……ベル君ばかり働かせるのは悪いかなあつて……………」

「それは……………確かに僕も逆の立場なら思うかも」

「そうそう! そうなんだ! はい、この話おしまい! あ、と。久し振りだね、アドバイザー君」

「酒場の宴会以来の再会だ。アーデイは良く遊びに来るし何なら泊まるからもう一人の眷属ことどもぐらいの感覚だったが、エイナはギルド職員という立場上、冒険者一人に親身にできない……………」

「ん? 公私分けて、これ私としての行動?」

「えっと、そうですね。今日は非番なので、私事として来ています」

「ふくん……………」

「ジツとエイナを見つめたヘステイアは、ベルに離れるように手を動かしてエイナの耳に口を近づける。」

「君はベル君に気があるのかい?」

「ふえ!?!」

「いや、そのね。ベル君って結構むちやするから、いつそ世帯でも持ったほうが落ち着くかなって」

「しよ、シヨタ!? は、早すぎます神ヘステイア! ベル君はまだ14ですよ!?!」

「早すぎるもんか！ 14でタケやミアハみたいは無自覚で女の子落としてるんだぞ！ いつそ誰かと正式に付き合わないといつか刺されかねない！」

「……………」

心当たりがある。いや、自分は落とされてないけどね？ でもああいう人を勘違いさせる態度を取っていたらいつか本当に刺されるかもしれない。いや別に聞いた話の統計であって自分が落とされたわけでは断じてないが。

「まあ、最終的に決めるのはベル君自身だけだよ。ボクとしてはもう少し己を優先してほしいんだ。この前なんて肋骨が折れたまま地上に戻って人助けしてたってアミッド君が怒ってたし」

「……………ベル君、ちよつと来なさい。あ、神ヘスティア。ここって談話スペースありますか？」

「あ、はい。鍛冶師と冒険者が話すための休憩所はあちらになります」

ハーフエルフと約束するのは間違っているだろうか？

「とにかく、ベル君はキチンと自分も大事にすること。いいい？」

「はい……」

エイナに叱られしよんぼり落ち込むベル。心なしか縮んだような。

「反省したなら、許してあげる。それじゃあ、ベル君の防具を買いに行こっか」

「ハーフアイストス・ファミリア」は高級ブランド。それは間違いない。だが冒険者に駆け出しがいるように、鍛冶師にもまた駆け出しはいるのだ。

そういつた者達はまず名を売らなくてはならない。如何に装備が優れていようと無名の作者と有名な作者では信用が違う。そのために駆け出しの鍛冶師の作品を安売りするのだ。

「それがここ。ほら、ベル君でも買えるでしょ？」

「わあ……！」

鎧、槍、短剣、長剣、戦斧、メイス、盾。

様々な武具防具が、自分でも手の届く値段で売られている。その事実にベルは子供のように手をキラキラさせる。

「見てくださいエイナさん！ この兜かっこよくないですか!？」ゴブリンか？

「うーん、なんか呪われそう。それにほら、この角とか邪魔そうだよ」

「折ればなんとか……いや、せつかく造った人に失礼ですしね」

渋々兜を戸棚に戻すベル。

残された兜は不穏な気配を漂わせ次の担い手を待った。

「私のお説教のせいだけど、時間使っちゃったし手分けして探そうか」「良いんですか？ 行ってきますー！」

エイナの言葉にベルは早速駆け出す。男の子だなあ、と微笑む。

エイナから離れた後、ベルは早速防具を探す。お金を貯めれば再び

救命団衣を造れるらしいので、その繋ぎでしかないが……いや、その上からでもつけられる軽装のアーマーとかが望ましい。

「……………ん？」

と、不意にベルが足を止める。防具の各パーツが山積みになった木箱。乱雑な扱いは、鎧の評価が低いことを意味する。だけでもベルは、その鎧を手取る。

ライトアーマー。体にフィットする小柄なブレストプレート、膝当て、肘、籠手腰部など、最低限の箇所を保護する構造。

軽い。サイズもピッタリ。指に力を込めれば曲げられそうだけど、自分の力はちよつと強いから参考にならない。

中層で通じる、だろうか？

目利きができるわけではない。でもなんとなく、命を預けるに足ると、本能が言っている。

何より、色が白。救命団でも限られたものだけが着れる、強さの象徴。

「ヴェルフ・クロツゾ……………」

製作者のサインを見つめる。ベルの心を一瞬にして掴んだ何者か。なんだろう、不思議と昔からこの人の作品に惹かれていたような、そんな気がする。値段は9900ヴァリス。うん、余裕！

「おーい、ベル君！ 私良いの見つけちゃったよ！ プロテクターにレザー革鎧！ ちよつと高いけど、どっちか一つは買つといたほうが

……………あれ、ベル君もなにか見つけたの？」

戻ってきたエイナはベルを見て、次に木箱を見る。扱いからしてやはり評価が低いと彼女も気付いたのだろう。むむ、と顔をしかめた。

「それに決めちゃった？」

「はい。僕はこれにします」

「はあ……………ベル君って、本当に軽装が好きだね。せつかく選りすぐってきたのになあ」

「沢山の冒険者を担当してきたエイナさんが選んだんです、きつとそれも素晴らしい掘り出し物なんでしょうけど、僕はこれがいい」

「すいません、と謝るベルにエイナは「いいよ、気にしないで」と苦

笑した。

「ベル君が使うんだもんね。私としては身の守りのことも考えてほしいけど、君がこれって決めたんなら、それでいいと思う」

「……………ありがとうございます」

早速ボックスを抱えてカウンターに向かう。店員も乱雑においたその鎧が買われるとは思ってなかったのか少し驚いた顔をしていたが無事購入。

「あれ？」

ふと、何時の間にかエイナが居なくなっていることに気づく。辺りを見渡し、すぐに見つけた。今まさに店から出てきた。とてもニコニコしている。

「ベル君。はい、これ…」

「へ？」

おもむろに手渡されたのは、細長いプロテクター。

エイナの瞳と同じ緑玉石《エメラルド》の色をした、手首から肘くらいの長さをしている。

「私からのプレゼント。ちゃんと受け取ってね」

「い、いいんですか？ でも、その……………」

女性から渡されたのなら、必ず受け取れと育てられたベルではあるが、だからといって高そうな物を受け取れるかというと……………。

「私は貰ってほしいな。私のためじゃなくて、君自身のために」

「君ってば、他人はすぐ治すのに自分は何時でも治せるから後回しでいいって思ってるでしょ？ 冒険者はさ、本当にふとしたきっかけで死んじゃうの。ダンジョンから帰ってこない冒険者を、私は何人も見てきた。ダンジョンで人を助けたと思って思うベル君は、その分危険に飛び込むと思う。本当は止めたいよ、でもベル君は止まらないでしょ？」

「……………はい」

安心させる『嘘』はつけた。嘘の通じぬ神でもあるまいし、言葉だけで安心させる道もあった。だがベルは一切の嘘をつかず告げる。エイナは困ったように笑う。

「なら、なおさら受け取ってほしいな。私は君にいなくなっただけではないから。あはは、これじゃあやっぱり、私のためかな?」

「いいえ、ありがとうございます」

ベルはそう言ってプロテクターを受け取る。

「約束します。僕は、必ずエイナさんのもとに帰ってくる。何度冒険しよう、必ず貴方の顔を見るために地上に戻る」

「え、あ……う、うん。嬉しいなあ……あ、ほ、ほら! そろそろ

【ガネーシャ・ファミリア】に向かわないと! フェルちゃん連れて、サポーターの子に会うんでしょ!」

ベルの言葉に、笑顔にエイナは目を逸らしながら話を変える。ベルもハツとして失礼します! と走り出し、ピタリと止まり振り返る。

「今日はありがとうございました! エイナさん、大好きー!!」
「えうー!」

変な声が出た。ベルはそのまま文字通り目にも留まらぬ速さで走り去った。残されたのは必ず貴方のもとに帰りますなどと告白しか受け取れないことを言われた挙げ句告白されたハーフエルフ。

周りの住民達が拍手したり独り身の己への当て付けかと嫉妬の視線を向ける。

「もう! ベル君は、本当にもう!」

妖精の血を引く美しい少女は怒りと羞恥で真っ赤になった顔で叫ぶ。

例えば優しいと噂の冒険者のパーティーに、サポーターが入ったとしよう。分前は多くなる?」

ありえない。

優しい? それは仲間にだけだ。同じ冒険者だけだ。サポーターなんて雑用係、冒険者に奉仕して当然の役立たずに金など本当は1ヴァリスだって払いたくない。

サポーター無くしてこの稼ぎはありえないのにな?

だからどうした。サポーターは冒険者無くしてダンジョンに潜れ

ない。絶対に稼げない。冒険者はサポーターが居なくとも時間を多少かけるだけで同じ値段を稼げる。だからサポーターなんて雇ってやっているだけむしろ感謝してほしい。

(それが冒険者……どんなに優しくたって、どうせそのうち邪魔に思うに決まっています)

自分で斃して自分で稼いだ金を、荷物を持つだけのサポーターが持つていく。割に合わない、いずれ思うのだ。リリはそれを良く知っている。

「あ、おっい！ リリルカさくん！」

どうせ相手が裏切るのだから、先に裏切つてやるのだと言い訳して、本音は世界の闇も知らなそうな子供への嫉妬を自覚して、リリはどうせ人懐っこい笑みを浮かべているであろう駆け出し冒険者の声に振り返る。

「ベル様！ お待ちして……ま……し、た……」

「ワフウ」

「あ、リリ。紹介するね、この子はフェル。【ガネーシャ・ファミリア】から特別に許可をもらった、僕の調教済みモンスター」

巨大な狼がいた。大型の馬の二周りぐらいはありそうな立派な体高を持った狼。それを、許可をもらって調教した？ いやまあそれはいい。良くないけど、L v. 1のやることじゃないだとは思うけど今は置いておこう。

「荷物持ちはこの子がやってくれるから、リリルカさんは魔石やドロップアイテムの回収を……どうかした？」

「……………あの、何で狼を背に乗せてるんですか？」

逆なら解る。【象神の詩】^{ウイヤーサ}は新たに仲間にしたモンスターの背に乗り街を駆け回り姉に取っ捕まる光景をよく見るからだ。そんな彼女も大型種のモンスターを背に乗せたりはしない。

「ああ、重りを乗せて走ったら鍛錬になるでしょ？ 今の僕からすると、もうフェルは軽いんだけど揺らさず運ぶ練習にもなるし」

意味がわからない。リリは宇宙の情報を流し込まれた猫のような顔をした。